

# 安芸地方における中世陶磁器の研究

－広島大学東広島キャンパス鏡地区出土資料を中心として－

永田千織・藤野次史

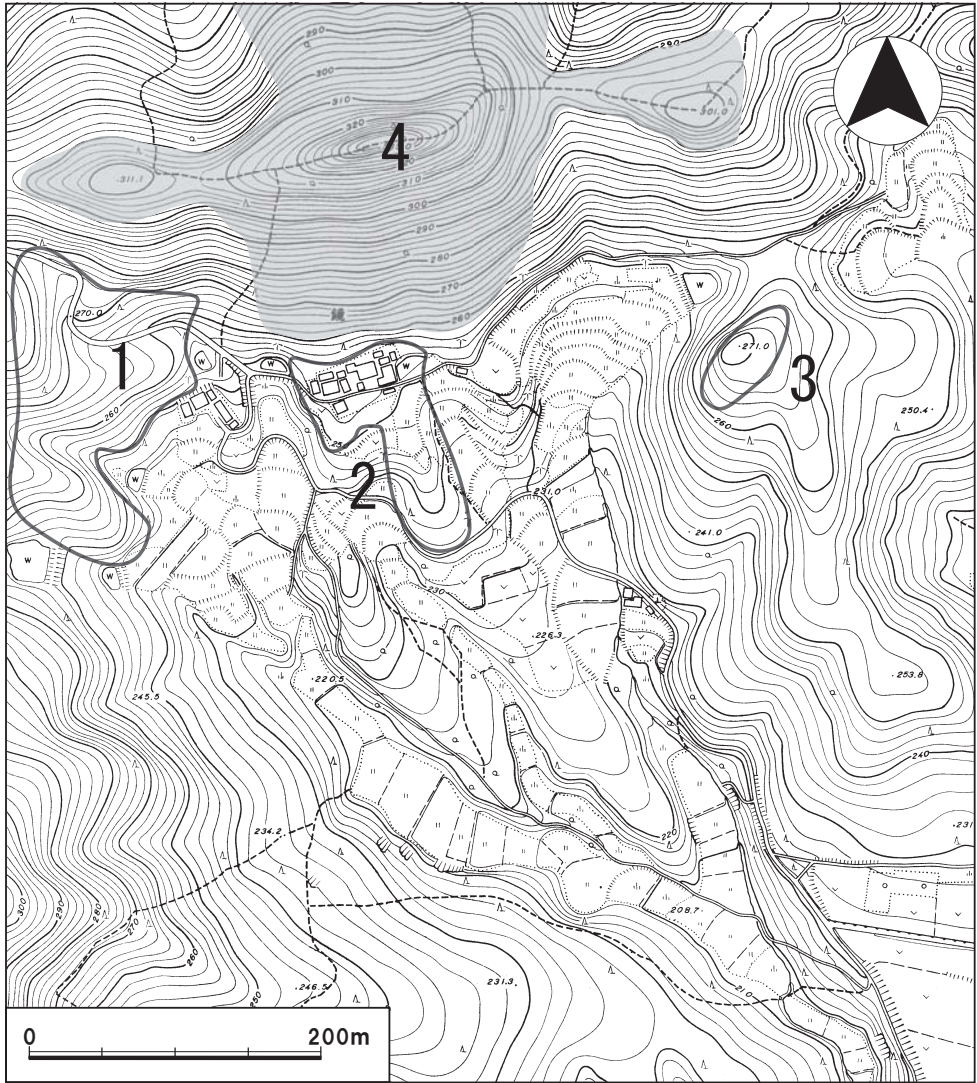
## 1. はじめに

安芸における中世の考古学的調査は、1980年代以降を中心に、東広島市鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、道照遺跡、薬師城跡、広島市恵下山城跡、亀崎城跡、池田城跡、有井城跡、下沖2号遺跡、北広島町吉川元春館跡、小倉山城跡、安芸高田市郡山大通院谷遺跡などの城館遺跡を中心として多くの遺跡が発掘調査され、広範な時期の資料が蓄積されている。特に、1991年に吉川氏・毛利氏関連を中心とする中世遺跡の調査研究を行うために広島県教育委員会内に設置された中世遺跡調査班は、吉川氏関連の遺跡調査・研究を継続的に行うとともに、広島県内の城館遺跡の総合調査を行うなど、中世研究の基礎的研究と進展に大きく貢献した。また、芸備友の会では1990年代後半頃から中世城館を中心とする問題を例会や紙上において数度にわたって取り上げており、安芸地方の中世研究の進展に大きな役割を果たしている。

ところで、広島大学東広島キャンパス鏡地区（農場地区）に位置する鏡西谷・東谷遺跡などからは150点を越す陶磁器が出土しているが、2003年度刊行の報告書I（藤野編2001）では、諸般の事情から、その一部しか実測図・写真を掲載していない。内容としては青磁・白磁のほか、備前焼などの陶器が出土している。その多くは破片であるが、文様などから産地や時期を窺い知ることができる資料も少なくない。本稿ではそれらの陶磁器類を既報告資料を含めて紹介するとともに、安芸地方出土の中世陶磁器について概観する中で、本遺跡の資料の位置づけを検討してみたい。

## 2. 東広島キャンパス鏡地区の中世遺跡と出土陶磁器

広島大学の東広島への統合移転に伴って、鏡地区は生物生産学部附属農場予定地として位置づけられ、1979年に広島県教育委員会が鏡千人塚遺跡、清水奥山遺跡の発掘調査を実施した（植田編1982）。その後、広島大学内に統合移転地埋蔵文化財調査委員会が設置され、1981・1982年に鏡西谷遺跡、1982年に鏡東谷遺跡の発掘調査が、また、1981年に鏡千人塚遺跡の補足調査を実施した（藤野編2001）。これら鏡地区の4遺跡ではいずれも中世の遺構・遺物が多数検出され、陶磁器についても少なからず



第1図 広島大学東広島キャンパス鏡地区の中世遺跡と鏡山城跡

1. 鏡西谷遺跡、2. 鏡東谷遺跡、3. 鏡千人塚遺跡、4. 鏡山城跡

出土している。以下、遺跡ごと、地点ごとに出土状況を述べた後、既報告資料を含めた主要な出土陶磁器について述べてみたい。

### I. 鏡西谷遺跡

鏡西谷遺跡は広島大学東広島キャンパスの東部に所在する農場地区に位置しており、国史跡鏡山城跡の南裾に広がる丘陵地帯の一角にある。鏡西谷遺跡は、地形的なまとまりを単位として、A～Hの8地区に分けて、1981年・1982年に発掘調査を実

施し、縄文時代～近世・近代の遺構・遺物を多数検出した。中世関係の遺構・遺物は、各地区から出土しており、今回取り上げる陶磁器は、B 地区、C 地区、D 地区、E 地区、G 地区で出土している（第 5～7 表）。

#### 1) B 地区

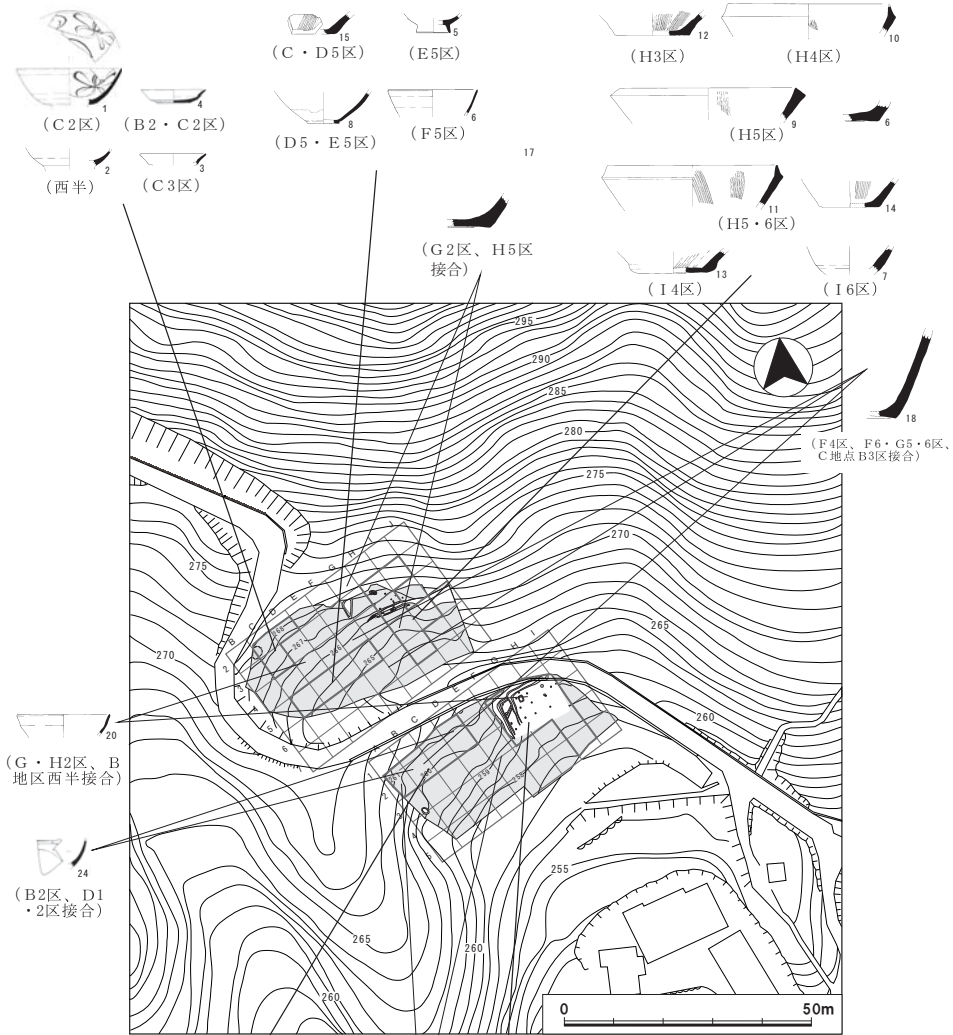
B 地区は鏡西谷遺跡の北東部に位置しており、鏡山南斜面から沖積低地（小規模な谷底平野）へ移行する緩斜面部に立地している。調査区の東側および西側は北から南へ延びる丘陵が位置し、北側には鏡山の南斜面が迫っているため、三方を土塁に囲まれたような状況を呈している。検出遺構は、調査区北端部に集中しており、G3・4 区、H3・4 区、I3・4 区西半で、溝 1 条（S D 01）、土壙墓 1 基（S K 01）、土坑 1 基（S K 02）、柱穴状ピット群（S X 01）を検出した。また、B2～D2 区にかけて平坦面を検出し、平坦面上で完形の土師質土器がまとまって出土した（S X 02）。溝はほぼ東西方向に長さ約 10 m、幅 0.8～1.2 m の規模をもち、深さは約 20cm ほどである。溝内の西端部に石組が見られることから、溝の壁には小規模ながら石垣状の石組が存在していたようである。溝の北側は平坦面が広がっており、土壙墓、柱穴状ピット群、土坑が位置している。柱穴状ピットは溝に近接しており、直線的に並んでいる部分も見受けられることなどから、付近に柵や掘立柱建物など、何らかの構築物が存在した可能性が高い。これらの遺構が位置する平坦面や S X 02 が位置する平坦面は北側の調査区外に広がっており、さらに多くの関連遺構が存在することが予想される。

B 地区では全域から陶磁器が出土しているが、出土量はあまり多くない（第 2 図）。明確に遺構に伴う資料を指摘できないが、青磁は S X 02 周辺で出土しており（第 3 図 1～4）、S X 02 の土師質土器と近接した時期を示すものかもしれない。溝（S D 01）およびその北側の平坦面では備前焼播鉢などが若干出土している（第 3 図 9・11・16）。溝（S D 01）、S X 01（柱穴状ピット）、土坑（S K 02）に伴う可能性がある。また、備前焼播鉢などの破片が溝（S D 01）の南側を中心に調査区南部に広く分布しており、この分布域内で朝鮮産青灰釉陶器、瀬戸・美濃系陶器が出土している。備前焼には時期幅が認められるが、朝鮮産青灰釉陶器、瀬戸・美濃系陶器は備前焼の時期幅よりやや新しく位置づけられるかもしれない。

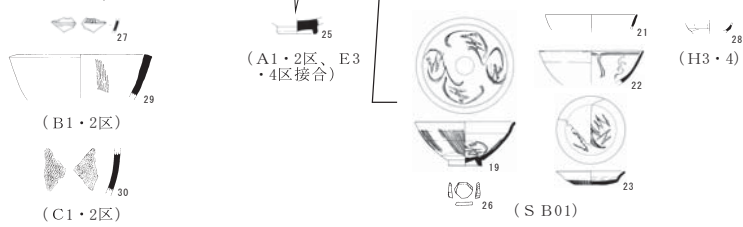
以下、出土陶磁器の主要なものについて説明する。

磁器（第 3 図 1～5） いずれも輸入磁器で、青磁、白磁がある。1・2 は龍泉窯系青磁碗で、1 は内面に蓮華文が描かれている。高台を欠損し、残存部は全面に施釉されている。復元口径 16.4cm である。2 は調査区西半から出土したもので、出土区を

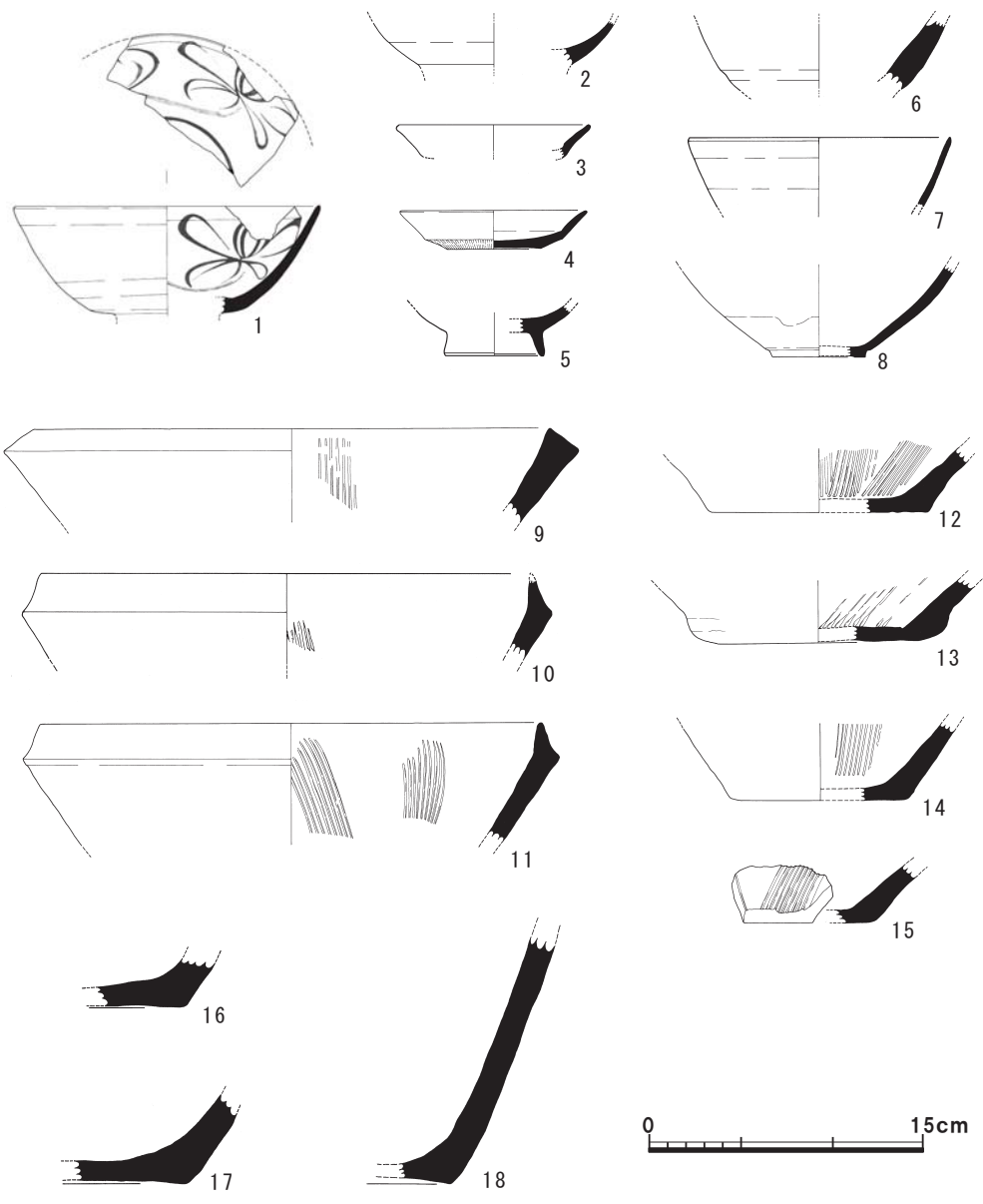
B 地区



C 地区



第2図 鏡西谷遺跡B地区およびC地区の中世陶磁器出土状況  
(北側がB地区、南側がC地区である。各地区の網目部分が調査範囲を示している。)



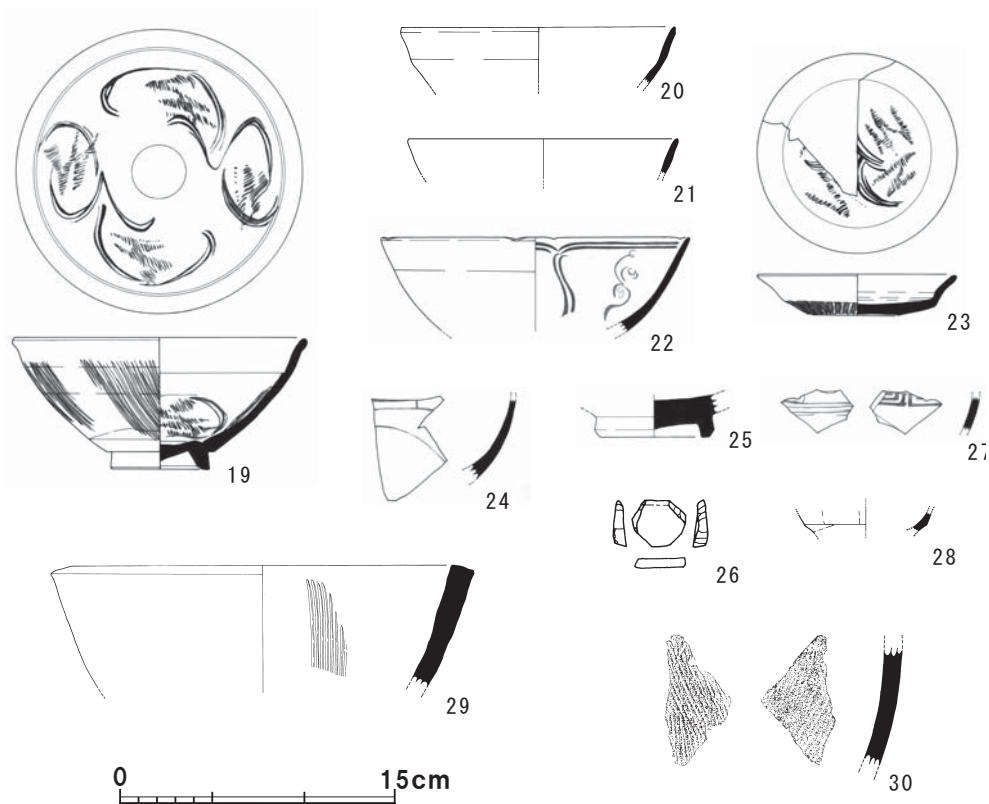
第3図 鏡西谷遺跡B地区出土中世陶磁器実測図

(1～4. 青磁、5. 白磁、6. 青灰釉陶器、7・8. 瀬戸・美濃系陶器、9～18. 備前焼)

特定できないが、S X 02 周辺から出土した可能性が高い。碗の体部下半の破片で、無文であるが釉はガラス質で透明度が高い。3・4 は同安窯系の青磁皿である。ともに無文で、内面見込みと体部の境に段を持ち、体部下半には施釉されていない。3 は復元口径 10.6cm、4 は復元口径 10.0cm、底径 5.1cm である。5 は白磁碗の底部である。高い高台をもち、全面に施釉されているが畳付部は釉が掻き取られている。釉は黄色味を帯び、貫入が見られる。底径 5.4cm である。

陶器（第 3 図 6～17） 6 は朝鮮産の青灰釉陶器である。器壁は薄く、青灰色と灰色の釉が混在している。復元口径は 14.2cm である。7・8 は瀬戸・美濃系陶器である。7 は天目碗の破片で、黒い鉄釉がかけられており、一部は茶色を呈する。8 は灰釉碗である。高台は削り出しによって断面方形に作出され、底部は薄く、回転糸切り痕が見られる。外面体部中位以下は施釉されず、露胎となっている。復元底径は 5.0cm である。9～18 は備前焼で、9～15 は擂鉢である。9 は口縁部で、口縁端部にむけて厚みを増すものの、上方への拡張は見られない。復元口径は 28cm である。焼成がやや甘い。10 も口縁部で、断面は「く」の字状を呈する。上方に口縁部を拡張しているが、口縁端部を欠損している。復元口径は 27.4cm で、内面の沈線は現状で 6 本が確認できる。11 は口縁部～体部上半の破片で、口縁部を上方に拡張し、10 同様、断面は「く」の字状を呈する。口縁端部は先細りとなり、丸くおさめている。復元口径は 27cm である。内面の沈線は 8 本 1 単位である。12～15 は底部で、12 はやや外反した体部をもち、内面の沈線は 9 本 1 単位である。外面は縦横にナデ調整が施されており、復元底径は 11.8cm である。13 は腰部で一度大きく屈曲し、体部へ移行している。内面の沈線は起点のみが残っており、摩滅が激しい。外面はヘラナデ調整で、復元底径は 10.6cm である。14 は腰部から体部へと直線的に立ち上がり、両面とも回転ヨコナデ調整と縦方向のナデ調整で仕上げられている。内面の沈線は 10 本 1 単位である。復元底径は 9.8cm である。14 は調査区西部の D 5・E 5 区の出土で、10 本 1 単位の沈線が見られる。内面は使用による摩滅で平滑となっている。16～18 は甕または壺の底部である。いずれもわずかに上げ底で、腰部でやや屈曲して体部へと移行している。16 は内外面ともにヨコナデ調整であるが、17 は内面ヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整である。18 は底部から体部へと直線的に立ち上がり、内外面ともにハケメ調整を基調とし、部分的にナデ調整やヘラケズリ調整が施されている。なお、18 は C 地区出土の破片と接合している。

この他に、青磁の碗（写真 1 - 4・7）、盤と思われる破片（写真 1 - 5）、白磁碗（写



第4図 鏡西谷遺跡C地区出土中世陶磁器類実測図

(19～26. 青磁、27・28. 白磁、29・30. 備前焼 26のみ縮尺1/3である。)

真1-8)や備前焼の甕もしくは壺の破片が出土している。

## 2) C地区

C地区はB地区の南側に隣接する調査区である。調査時点では旧林道によって隔てられていたが、道路は後世に土盛などを行って設置されたもので、本来B地区と同一の地形上に立地している。旧地形はB地区から連続する南向きの緩斜面で、西側には南北に延びるD地区の丘陵が、東側もB地区から南へ延びる丘陵が位置している。検出遺構は調査区の東北部に集中しており、掘立柱建物跡1棟(SB01)、溝2条(SD01・02)、土坑1基(SK01)を検出した。1号掘立柱建物跡(SB01)は西側のD地区丘陵裾から東側に張り出した地山(花崗岩風化層)の東南端部をL字状に削平して平坦面を造成して構築されている。張り出した地山はB地区では確認されなかったことから、B地区側では地山を削平し、1号掘立柱建物の北側は土塁状を呈していた可能性がある。削平によって造成された平坦面の端部に沿うように、北側

と西側に1号溝（SD 01）、2号溝（SD 02）がめぐっている。1号溝と2号溝は切り合いを明らかにできなかったが、2号溝を拡張して掘削している可能性も想定される。1号溝は調査区東端部で北側に屈曲しているようで、北側へ延びていたと推定されるが、道路敷きの下のため調査できなかった。1号掘立柱建物跡は東西3間×南北2間の建物で、1号土坑（SK01）が中央部北端部に配置されている。1号掘立柱建物跡および1号溝内から陶磁器、須恵器、土師質土器、石鍋などが多量に出土している。

C地区では1号掘立柱建物跡を中心に、調査区北半部から陶磁器が出土している（第2図）。1号掘立柱建物跡では、東播系須恵器、瓦器や多量の土師質土器とともに、磁器が出土したが、陶器はまったく伴っていない。青磁（第4図18～22・25）が出土しており、白磁（第4図27）1点が遺物集中部に近接して出土した。1号掘立柱建物跡の遺物出土状態は、北縁の1号溝上から柱穴列（建物）北半部にかけて分布している。溝上では東西にほぼ連続するように分布しているが、柱穴列部分では1号溝南北部分の東側列（P2・P7）と中央付近（P4・P9西側）および1号土坑東側などに集中して分布しており、分布は南北方向に広がっている。床面からは少し浮いた状態で出土しており、溝部分もほぼ同じレベルで、溝の底面あるいは底面近くでは基本的に出土していない。平面分布の状態も考慮すると、建物倒壊に伴って落下した状況を示す可能性がある。いずれにせよ、一括遺物と判断される。調査区西部では中世の遺構は検出されていないが、青磁、白磁、備前焼が散漫に出土した。調査区の北西部に集中している。1号掘立柱建物跡に隣接したE3・4区でも青磁（第4図25）が1点出土しているが、北西部の個体と接合しており、基本的に北西部から移動したものである。これらの陶磁器はB地区の出土遺物と関連をもつ可能性が高い。

磁器（第4図19～28） いずれも輸入磁器で、青磁（19～26）、白磁（27・28）がある。19～21・23・26は同安窯系青磁で、19～21は碗、23は皿である。22・24・25は龍泉窯系青磁で、いずれも碗である。白磁は27が碗、28が坏である。

19はほぼ完形で、内面には櫛状の工具で文様を描き、外面は上下方向に平行して櫛目を施している。櫛目の単位は20条程度であり、施文方向は上から下である。内面見込みは削られて段となっている。外面体部下半には施釉されない。口径15.4cm、底径5.2cmである。20は体部中程で「く」の字状に屈曲し、やや外反気味に口縁部に至る。21は口縁部破片で、体部以下の形態は不明である。20・21とも釉の透明度が高く、貫入が見られる。20は復元口径14.8cm、21は復元口径14.6cmである。22は龍泉窯系青磁碗である。口縁部が輪花となっており、内面には劃花文が描かれている。



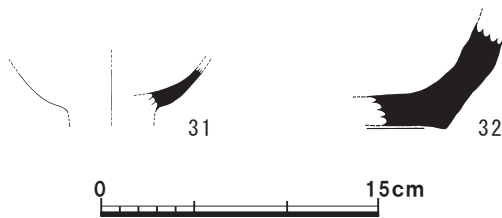
る。復元口径 16.4cm である。23 は体部中程で屈曲し、口縁部は外反する。内面は櫛状工具によって施文されている。底部は釉が掻き取られて露胎となっており、回転ヘラ削り調整が明瞭に残されている。わずかに上げ底である。口径 10.8cm、底径 4.4cm である。24 は碗の体部破片で、雷文帯が見られる。25 は底部で、高台部外面に面取りが見られる。底径は 5.6cm で、高台裏は露胎であるが畳付部には釉が見られる。26 は碗もしくは皿の口縁部破片を素材としており、上端部（口縁端部）以外の割れ口全体に外面方向から細かく加工を施し、円盤状に成形している。27・28 は白磁で、27 は体部破片であり、内外に雷文の一部と思われる文様が描かれている。28 は平面八角形を呈すると思われる、体部と底部の境界は稜を形成している。釉は薄くかけられており、一部灰色を呈す。

陶器（第 4 図 29・30） いずれも国産陶器で、備前焼である。29 は播鉢口縁部～体部上半である。口縁端部は器壁に直交するように切り取られ、肥厚しない。内外面ともに回転ヨコナデ調整である。内面の沈線は 8 本で 1 単位をなす。復元口径 20.2cm である。同一個体と思われる破片に片口部を認めることができる（写真 2 - 21）。30 は甕もしくは壺体部破片で、内外面ともにハケメ調整が施されている。

### 3) D 地区

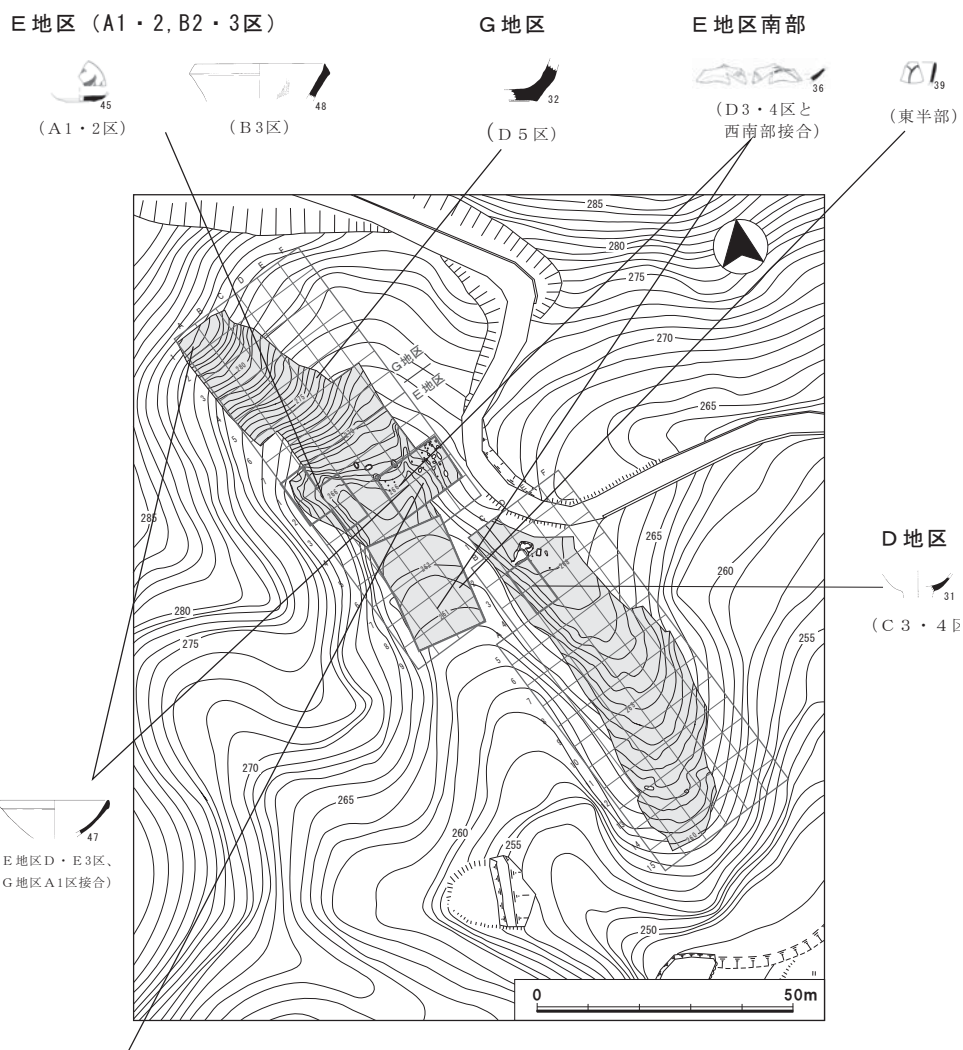
D 地区は鏡西谷遺跡のほぼ中央に位置し、C 地区の西側に隣接する。D 地区は南に延びる痩せ尾根で、幅 15 m 前後の細長い平坦面が広がっている。中世の遺構は調査区の北端部と調査区南端部に散漫に分布している。検出遺構は、土壇墓 3 基（S K 05・07・08）、土坑 1 基（S K 06）、竪穴遺構 1 基（S B 04）である。調査区北端部には、1 号土壇墓（S K 05）、2 号土坑（S K 06）、竪穴遺構（S B 01）が近接して位置している。2 号土坑は 1 号土壇墓の副葬品供献用土坑と考えられ、土師質土器坏

5 点などが出土した。竪穴遺構は不整形ながらも複数の柱穴を伴い、床面はおおよそ平坦であることなどから、竪穴住居であると想定している。1 号土壇墓と主軸がおおむね一致し、相互に意識するような配置を示すことから、両者が近接した時期に構築された可能性はあるが、明確にできない。調査区南端部には 2 号土壇墓（S



第 5 図 鏡西谷遺跡 D 地区、G 地区出土中世陶磁器類実測図

(31. D 地区：青磁、32. G 地区：備前焼)



第6図 鏡西谷遺跡D地区およびG・E地区の中世陶磁器出土状況  
 (東側がD地区、西側がG・E地区である。各地区の網目部分が調査範囲を示している。)

K 07)、3号土壙墓 (S K 08) が位置している。2号土壙墓から土師質土器杯2点が出土した他は土器類の出土はない。

D 地区出土の陶磁器としては青磁1点のみであり、堅穴遺構・1号土壙墓に近接したC 3・4区で出土している (第6図) が、遺構との関連は不明である。

磁器 (第5図31) 31は龍泉窯系青磁碗の破片である。無文で、灰色味の強い緑灰色の釉が薄くかけられている。

#### 4) G・E 地区

G・E 地区は鏡西谷遺跡中央部に位置し、東側のA・D地区と西側のF地区に挟まれた丘陵斜面および谷部であり、連続した地形面である。調査の都合で便宜的に北半の南向きの急斜面・裾などをG地区、南半の谷部をE地区とした。G地区では弥生時代後期の遺構が多数検出され、E地区では弥生土器集中部が複数検出された。しかし、G・E地区境界付近の丘陵裾部で土坑数基、A地区丘陵部の西裾にあたるE地区東北部で柱穴群、土坑など時期不明の遺構が検出されているものの、明確に中世に属すると考えられる遺構は検出されていない (ただし、E地区北東部の柱穴群などは保存区に含まれることになったため遺構検出のみで、遺構の調査は実施していない)。

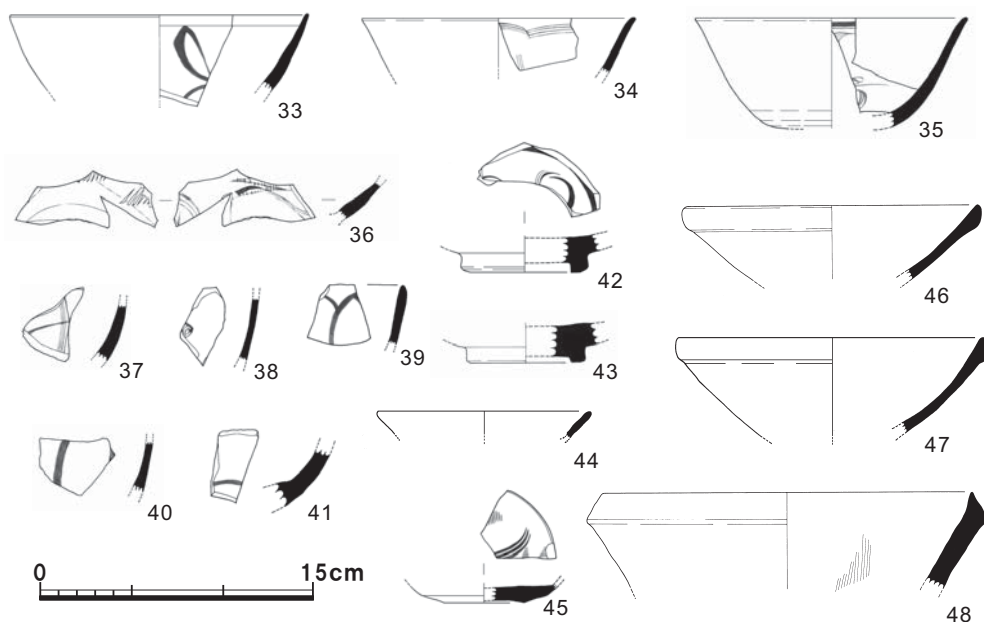
G・E地区では、中世の遺構は検出されていないが、E地区北半部を中心に陶磁器が出土している (第6図)。前述のごとく、東側のD地区では中世墳墓および建物遺構が検出されており、西側のF地区でも中世の建物跡、柵、墳墓などが検出されている。周辺の地区からの流入の可能性も否定できないが、隣接地区の検出遺構から転落と解釈するには少し無理のある位置から出土していること、出土遺物に摩滅が認められないことなどから、近接位置の未検出遺構からの廃棄もしくは移動の可能性が高い。

G地区は東側のA地区、西側のF地区との間に南北に延びる小規模な埋没谷が位置しており、地形的に両地区と区分される。G地区ではわずか5点であるが、調査区中央部の緩斜面部などから白磁、備前焼が出土している。

陶器 (第5図32) 備前焼の甕または壺の底部である。底部はわずかに上げ底で、腰部で屈曲して体部へと至る。内面はヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整である。

他に備前焼の甕もしくは壺の破片が3点出土している。

E地区はD地区丘陵西裾およびF地区丘陵東裾に東西を囲まれ、幅約20mの南北に細長い谷地形である。G地区の東西を画する埋没谷がE地区北端部で合流し、E地区の谷を形成する。調査区北半部に集中する形で陶磁器が出土している (第6図) が、詳細を見ると、調査区北東部のD3・4区、E3・4区、F3・4区で集中的に出土 (第7



第7図 鏡西谷遺跡 E 地区出土中世陶磁器類実測図

(33～45. 青磁、46・47. 白磁、48. 備前焼)

図 33～44・46・47) しており、調査区北西端部の A1・2 区、B3 区に散漫に分布 (第 7 図 45・47・48) している。前者は G 地区東側を画する埋没谷の延長線上に、後者は G 地区の西を画する埋没谷の延長線上に位置しており、前述のごとく、調査区内に関連遺構がないことからすると、前者は A 地区南端部～D 地区北端部の南斜面裾部、後者は F 地区東斜面裾に構築された遺構から流出した可能性が高い。調査区北東部出土の遺物は磁器のみで、青磁を主体に白磁を混じえている。調査区北端部出土遺物は、青磁、白磁、備前焼が認められ、白磁は調査区北東部出土の白磁と接合している。

磁器 (第 7 図 33～47) いずれも輸入磁器である。青磁 (33～43) と白磁 (46・47) がある。青磁は同安窯系 (36・44・45) と龍泉窯系 (33～35・37～43) が見られる。同安窯系の点数は少なく、碗 (36)、皿 (44・45) が認められる。龍泉窯系は確認できるのは碗のみである。

青磁 (第 7 図 33～43) 33～35 は碗で、内面には劃花文がみられる。33 は内面に蓮華文が描かれている。緑灰色の不透明な釉がかかっており、文様は鮮明ではない。復元口径 16cm である。34・35 は同一個体の可能性がある。口縁部は直線的に立ち上がり、端部でやや外反する。内面には櫛状の工具で文様が描かれており、復元口径

は 14.6cm である。36 は底部付近の破片である。黄色味を帯びた不透明な釉がかけられており、体部下半には施釉されずに露胎となっている。内面には櫛状工具とヘラ状工具による施文が見られ、外面にも櫛目を有する。37・38 は体部の破片で、内面に劃花文が描かれている。39 は口縁部、40 は体部の破片で、外面に蓮弁文が描かれている。41 は底部付近の破片で、内面見込みに沈線が見られる。42 は底部で、高台部外面に面取りがみられ、内面見込みにはヘラ状工具によって文様が描かれている。43 も碗の底部で、断面方形の高台部をもち、暈付部と高台裏は露胎となっている。44・45 は皿である。44 は口縁部付近の破片で、内面見込み付近に段をもち、口縁端部は磨耗のためか釉がはげている。復元口径は 11.6cm である。45 は底部付近の破片で、内面は見込みに櫛状工具による文様が描かれている。底部外面には施釉されず、回転ヘラケズリ調整によって窪んでいる。底径 4.4cm である。

白磁（第 7 図 46・47） 46・47 はいずれも碗である。玉縁状の口縁部をもち、灰白色の釉がかけられている。47 の体部下半には施釉されていない部分が見られる。復元口径はそれぞれ 15.8cm、16.2cm である。この他に、四耳壺の一部と思われる破片（写真 3 - 26）が出土している。

陶器（第 7 図 48） 国産陶器で、備前焼 1 点があるのみである。備前焼は挿鉢で、口縁端部を外方に拡張しており、引き伸ばされた端部は先細りである。内面の沈線は現状で 6 本が確認できるが、切り合いが認められ、単位は不明である。

なお、F 地区および H 地区においても中世の遺構・遺物が多数検出されている。F 地区では、鎌倉時代前半期、室町時代、H 地区では室町時代の遺構・遺物が検出されたが、陶磁器は出土していない。

## II. 鏡東谷遺跡

鏡東遺跡は鏡西谷遺跡の東に隣接しており、鏡西谷遺跡とは幅約 80 m の小規模な谷によって隔てられている。鏡山城跡の中心的遺構のほぼ南に位置しており、鏡西谷遺跡同様、鏡山麓の低丘陵地に立地する。鏡東谷遺跡は遺跡の東西を画するように南北に延びる小規模な谷地形が位置し、2 本の低丘陵（以下、西側の丘陵を西丘陵、東側の丘陵を東丘陵として説明する）が南へ延びている。両丘陵の間に小規模な谷が認められるが、鏡山裾の北端部でひとつながりとなり、連続した丘陵平坦面を形成している。西丘陵は東丘陵に比較して南北に短く、丘陵平坦面はほぼ平坦である。西丘陵の南端は急斜面を形成して南側一帯の水田へと移行していたが、丘陵尾根筋はさらに南側へと連続していた。広島県教育委員会の行った試掘調査では明確な遺構を確認

することはできなかったが、尾根筋は平坦な地形が南側へ連続して広がっており、本来何らかの施設が存在したことを想定できる。東丘陵は南北に細長い平坦面を有する。北端部は西丘陵平坦面とほぼ同じレベルであるが、全体では南に向かって緩やかに傾斜している。調査では数段に渡る平坦面を確認したが、面的な調査が実施できたのは北端部と南半分である。東丘陵南端部は比較的緩やかに南に向かって傾斜しており、調査時には東広島市道隣接部が崖状を呈していたが、本来は比較的緩やかな傾斜で水田面に移行していたのかもしれない。南丘陵の南側一帯も調査時点では水田として広く利用されていたが、東丘陵の尾根筋も南側に延びており、東丘陵の尾根筋に平行するように細長い平坦面を形成していたと想定される。

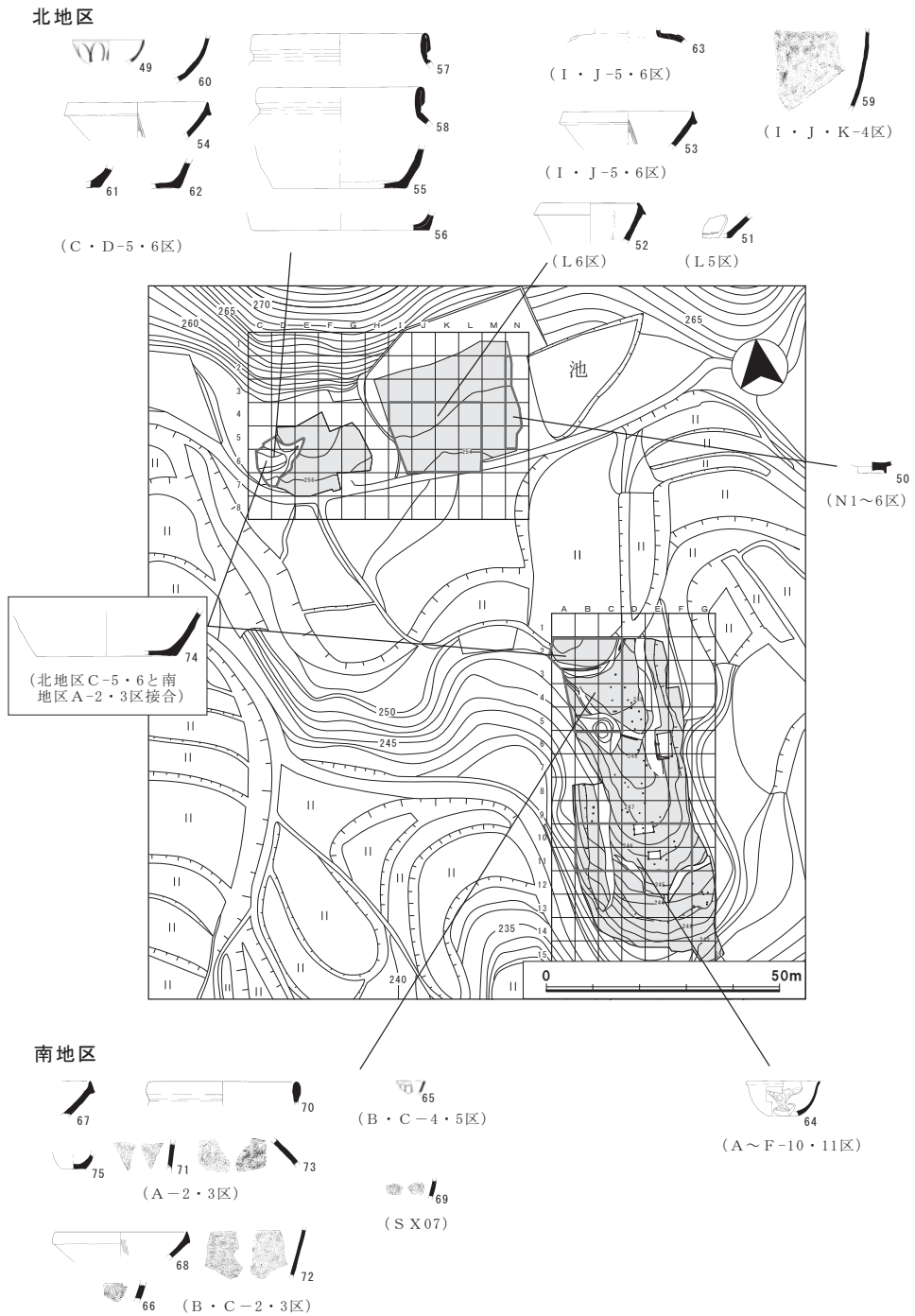
発掘調査は1982年に実施した。当初、1979年度に実施された広島県教育委員会の試掘調査の結果を元に、西丘陵・東丘陵北端部のみを発掘調査する予定であったが、調査範囲を確定するため補足的な試掘調査を実施したところ、両丘陵の平坦面を中心に全域から遺構・遺物が検出されたことから、当初発掘調査が予定されていた丘陵北端部を北地区、新たに遺構が集中的に発見された東丘陵南半部を南地区とした。

鏡東遺跡では、弥生時代、古墳時代、中・近世の遺構・遺物が多数検出されており、中世の遺構・遺物についても北地区、南地区の両地区で検出されている。北地区では近世の遺構が主体で、明確な中世の遺構は検出されていないが、調査区東半部および調査区西端部の埋没谷を中心に陶磁器が出土している。南地区では中世後期の遺構・遺物が多数検出され、調査区北部を中心に陶磁器が出土した。以下、既報告資料を含め、地区ごとに陶磁器の出土状況と主要な資料について述べる。

#### 1) 北地区

調査区には調査以前に民家があり、調査区西部と東部は約2mの比高差をもって段状に造成されていた。調査区西部では近世以降と推定される時期不明の土坑10基などが検出されたが、明確な中世の遺構は検出されていない。西端部で調査直前まで存在して民家築造の際に埋積したと思われる埋没谷が位置しており、谷埋土内から近世・近代の遺物に混じって陶磁器が少量出土している(第8図)。磁器は青磁が1点認められ、陶器は備前焼播鉢・甕・壺である。調査区東部も調査直前まで民家が位置していたが、調査では近世を中心とする土壙墓、土坑などの遺構が検出された。明らかに中世に属する遺構は検出されていないが、調査区全域から陶磁器が散漫に出土しており、備前焼を主体に、青磁がわずかに認められる。備前焼は播鉢・甕を主体とする。

磁器(第9図49・50) 磁器は青磁のみであり、いずれも龍泉窯系の碗と思われる。



第8図 鏡東谷遺跡北地区および南地区の中世陶磁器出土状況  
 (北側が北地区、南側が南地区である。各地区の網目部分が調査範囲を示している。)

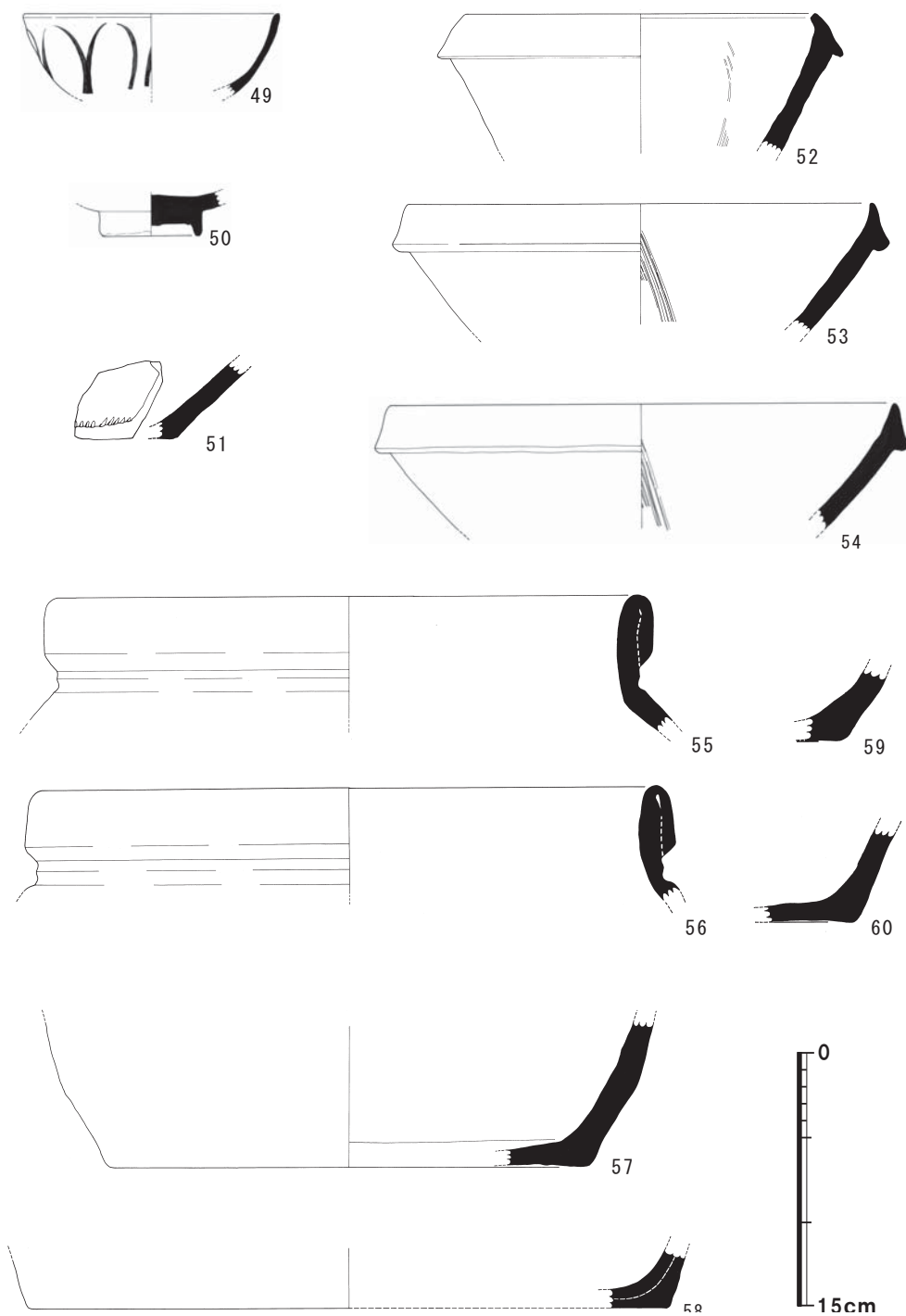
49は外面に幅広の蓮弁文が配され、口縁直下はわずかに窪む。復元口径14cmである。50は底部で、豊付部と高台裏は露胎となっている。内面には同心円状の回転調整痕が見みられる。

陶器（第9図51～60、第10図61～63） いずれも備前焼であり、51～54は挿鉢、55～58は甕、59～61は甕または壺、62・63は壺である。挿鉢はいずれも内面が摩滅しており、日常的に使用していたことが窺える。51は底部の破片で、外面はナデ調整である。内面は磨耗が激しく、沈線起点部分のみが確認できる。52～54はいずれも口縁端部を上下に大きく拡張させている。52の復元口径は20.4cmで、口唇を平坦におさめている。内面の沈線の条数は不明で、内面・外面ともに回転ナデ調整である。53は上方に引き伸ばされた端部が先細りとなり、やや内湾している。内外ともに回転ナデ調整である。復元口径は27.0cmである。54も内外面ともにヨコナデ調整であるが、内面は磨耗が激しく沈線がわずかに見える程度である。復元口径は29.5cmである。55・56は大甕の口縁部である。ともに口縁部を折り返して肥厚させ、玉縁状に仕上げている。頸部は強いナデによって稜が形成されている。内面はヨコナデとハケメ調整、外面はヨコナデ調整である。同一個体の可能性がある。57・58は大甕底部と思われる。57は平底であるがわずかに上げ底状で、腰部は湾曲して体部に至る。内外ともにヘラナデ調整である。58はほぼ直線的に体部へと立ち上がり、底部断面中央に2枚の粘土板の接合痕が明瞭に見える。内面はヨコナデ調整で外面は丁寧なナデ調整が施され、底部はハケメ調整である。59・60は底部小破片で、59は腰部で屈曲して体部に移行する。外面腰部は横方向のヘラナデ調整、体部は縦方向のヘラナデ調整である。内面には固形物が全面に付着しているため、調整は不明である。60は平底であるが、わずかに上げ底気味であり、体部は直線的に立ち上がる。内面はヨコナデ調整で、粘土の接合痕が観察できる。外面は横方向のナデ調整を基調とし、縦や斜め方向のナデ調整が加わる。底部外面はハケメ調整である。61は胴部破片で、内面ナデ調整で、指頭圧痕が多く見られる。62は壺頸部～肩部で、肩部は水平方向に張り出し緩やかに湾曲する。偏平な円形になるとと思われる耳が取り付けられている。頸部は垂直に立ち上がる。内面は回転ヨコナデ調整、外面は自然釉が付着しているため調整は不明である。頸部外面は回転ヨコナデ調整である。63は壺の肩部に近い部分と思われ、内面は横にヘラケズリ調整、外面は縦方向にヘラケズリ調整が施されている。

## 2) 南地区

南地区は南に延びる低丘陵部で、幅15～20m程度の細長い丘陵平坦面を中心に弥



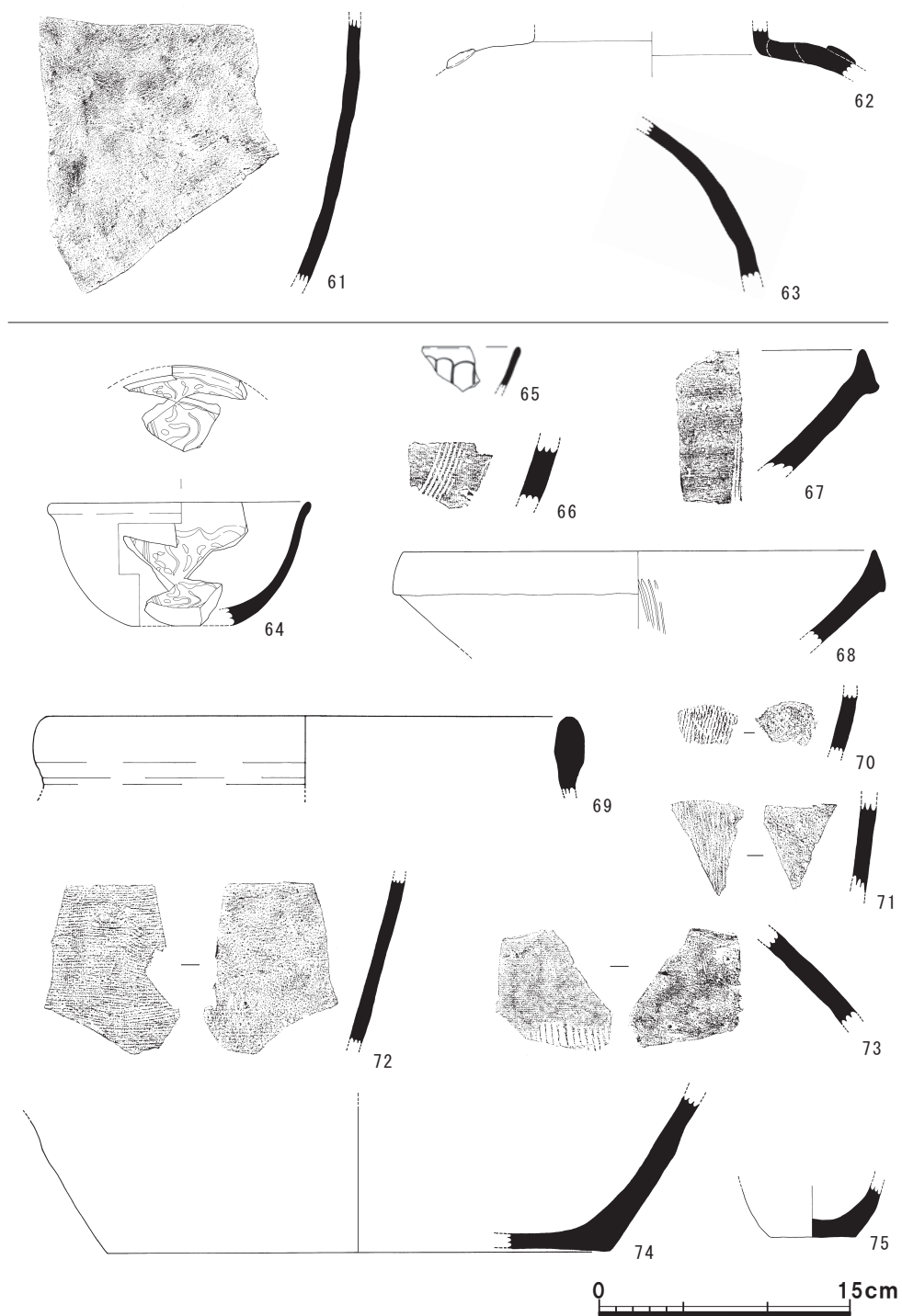


第9図 鏡東谷遺跡北地区出土中世陶磁器類実測図  
 (49・50, 青磁、51～58, 備前焼)

生時代～近世にわたる多数の遺構・遺物が検出された。中世の遺構は調査区全体に広がっており、郭状遺構6ヶ所（S X 01～06）、掘立柱建物跡3棟（S B 03～05）、溝3条（S D 01～03）、池状遺構1ヶ所（S X 07）などが検出されている。出土遺物は調査区北半部を中心にほぼ全域から出土しているが、遺構検出以前に大半の遺物が出土したことから、遺構との関連を明確にすることのできる遺物は多くない。陶磁器の出土状況は、遺物が集中する調査区北部を主体としており、わずかに調査区南端部にも分布が認められる（第8図）。調査区北部では、備前焼を主体に、青磁が少量認められる。調査区中央部～南部では、青磁、備前焼が少量散漫に出土している。磁器では白磁がまったく認められず、青磁の出土量も少ない。

磁器（第10図64・65） いずれも龍泉窯系の青磁碗である。64は体部が腰部から大きく内湾し、口縁部ではやや外反する。口縁端部は外に丸く肥厚して小さな玉縁状を呈する。内面には花文と思われる文様が陽刻されている。復元口径は15cmである。65は口縁部破片で、口縁部は丸くおさめ、外面には細い蓮弁文が描かれている。内面は無文である。貫入が見られる。この他にも小破片2点（写真4-8・9）がある。

陶器（第10図66～75） 大半は備前焼（66～72・74・75）で、常滑焼（73）が1点認められる。備前焼は、搗鉢（66～68）、甕（69・74）、壺（75）が認められる。66は胴部破片で、内外面ともに回転ヨコナデ調整を施す。沈線は6条1単位である。67・68は口縁部～体部上半で、口縁端部を上下方向に拡張している。67は内面の沈線は確認できるが、単位は不明である。内外に回転ヨコナデ調整を施す。68は口縁端部を先細りに仕上げしており、下端の拡張はわずかである。内外面ともにヨコナデ調整である。内面は磨耗しているが回転ヨコナデ調整で、現状で4本の沈線が確認できる。口縁肥厚帯の上下縁辺はやや波状を呈している。69は池状遺構（S X 07）出土の甕口縁部で、口縁部は折り返して肥厚させ、内面・外面ともにナデ調整が施されている。頸部には自然釉がかかっている。70～72は甕もしくは壺の破片である。70・71は内面はハケメ調整のちナデ調整を施し、外面はハケメ調整である。70は色調が灰褐色を呈している。72は内外面ともにハケメ調整が施され、器壁は直線的である。74は甕底部で、北地区出土資料片と接合した。内面は丁寧なヨコナデ調整で、体部にはヘラナデ調整が施されている。外面はヨコナデ調整と縦位のヘラナデ調整が施され、指頭圧痕が認められる。胴部外面は横位のハケメ調整の後にナデ消している。底部はわずかに上げ底である。復元底径は29.8cmである。75は小壺底部である。底径は5.0cmで、底面には繊維状の圧痕が見られる。内外面ともに回転ナデ調整である。

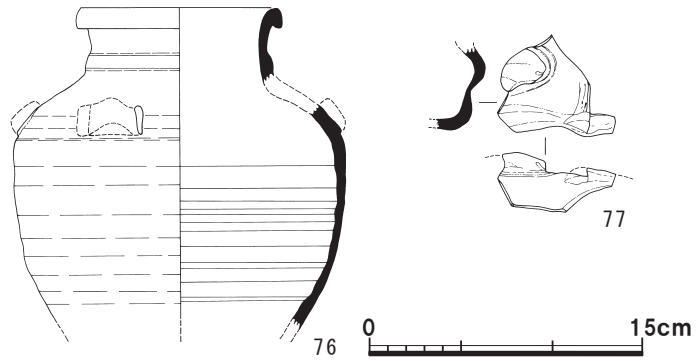


第 10 図 鏡東谷遺跡北地区および南地区出土中世陶磁器類実測図

(61～63. 北地区、64～75. 南地区：64・65. 青磁、61～63・66～72・74・75. 備前焼、73. 常滑焼)

この他に備前焼の甕または壺の胴部・底部破片が31点ある。

73は常滑焼甕肩部付近で、常滑焼は本資料のみである。内面はナデ調整で、外面は暗緑色の自然釉で厚く覆われている。胴部上半には5～6条を単位とする櫛状の工具による調整が見られる。



第11図 鏡千人塚遺跡出土中世陶磁器類実測図

(76. 白磁、77. 青磁)

### Ⅲ. 鏡千人塚遺跡

鏡東谷遺跡の東側約200mに位置し、鏡山から南へ延びる丘陵頂部に立地している。鏡山の南側山麓部に位置する低丘陵の一つであるが、鏡山との間に鞍部を形成しており、独立丘陵状を呈している。1980年に広島県教育委員会によって調査が行われ、中世の掘立柱建物跡1棟、土壙墓23基、積石塚1基、弥生時代の溝1条が検出された。その後、遺跡が南側に広がっていることが判明し、1981年に広島大学埋蔵文化財調査委員会が追加調査を実施し、弥生時代、古墳時代、中世の遺構・遺物を検出した。1981年調査では、中世関係の遺構として積石塚3基を検出した。2次にわたる発掘調査で中世の遺構・遺物が多数検出されたが、陶磁器類としては広島県教育委員会調査地区で、白磁1点、青磁1点が出土したのみである。

磁器(第11図76・77)いずれも遺構から出土したものではないが、本来は調査区内に存在する墳墓に伴っていたものであろう。76は白磁の四耳壺で、時期的には12世紀代に位置づけられるもので、伝世品が副葬品として墳墓に使用されたものと想定されている(植田編1982)。77は青磁の置物などの破片と思われるが、詳細は明らかにできない。

### 3. 鏡地区出土陶磁器の様相

鏡地区出土の中世陶磁器は遺跡や地区ごとで異なった様相を見せており、時期的にも長期にわたっている。まず、出土陶磁器の分類を行ったのち、遺跡ごと、地区ごとの様相についてまとめておきたい。

## 1) 出土陶磁器の分類

ここでは、磁器と陶器に大別し、磁器では、青磁、白磁、陶器では備前焼について、器種ごとに、文様や器形を基準として分類を行った。

### 1 - 1. 磁器

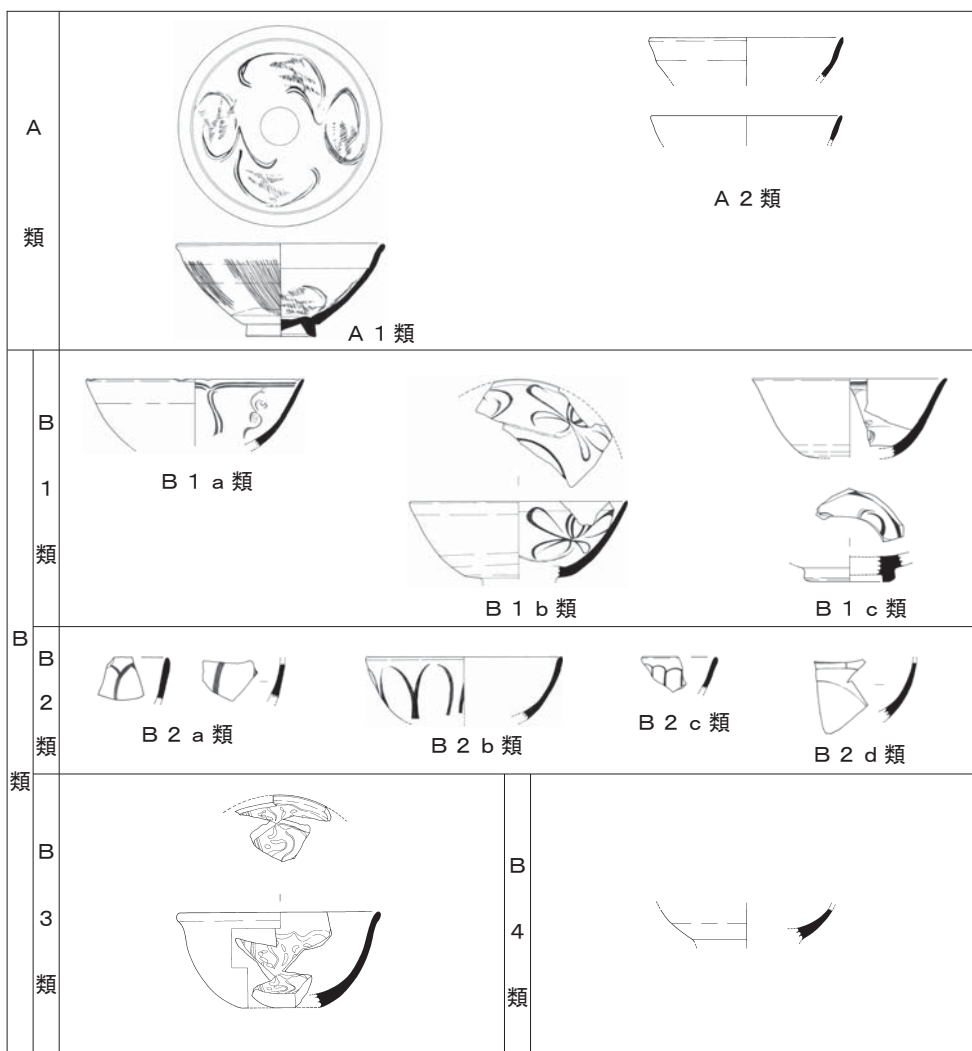
青磁の器種は、碗、皿、その他であり、大半は碗と皿である。その他は、盤？および鏡千人塚遺跡で出土した置物と思われるもので、各1点のみである。碗および皿については、有文と無文が認められるが、大半は小破片であり、無文に分類されるものの多くが確実に無文の個体であることを保証できる状況ではない。現状では、確実に無文と判断できるものは図示した4点（第3図2～4、第5図31）のみである。

碗は、色調、文様を中心に、大分類2種類、中分類6種類、小分類10種類に分類される。

碗A類：緑味の強い灰色や黄色味ある灰色を呈し、おおむね貫入が顕著である。同安窯系に属する一群と判断した。有文（A1類）と無文（A2類）に区分される。碗A1類は、外面に櫛状工具による縦方向の平行条線、内面に櫛状・ヘラ状の工具による文様が描かれている。A2類は口縁部がわずかに外反している。

碗B類：暗緑色を中心に、黄灰色を呈するものが認められる。有文と無文が認められ、有文では、劃花文、蓮弁文、雷文などが認められる。龍泉窯系と判断した一群である。文様の内容から、内面に劃花文を施すもの（B1類）、外面にヘラ状工具で施文するもの（B2類）、内面に花文レリーフを施すもの（B3類）、無文のもの（B4類）の4種類に区分できる。さらに、碗B1類は劃花文の内容から3種類（a類：ヘラ描飛雲文、b類：ヘラ描蓮華文、c類：櫛描花文）、碗B2類は文様の内容から3種類（a類：幅広の片彫蓮弁文、b類：蓮弁の盛り上がりを失った幅広の片彫蓮弁文、c類：細描蓮弁文、d類：雷文）に細分される。a類は蓮弁先端部の表現が丁寧で、先端部が相互に密接しているが、b類は全体に表現がやや粗雑で蓮弁の形状が均整を欠き、蓮弁相互が離れ気味であり蓮弁先端部が途切れているものが認められる。c類はヘラ状工具による施文である。

皿は大きく2種類に分類されるが、碗に対応する形での大分類は存在せず、中分類のみである。色調は、緑味の強い灰色や黄色味ある灰色で、貫入が顕著なものが多いが、やや青みのある灰色を呈する個体では貫入の認められないものがある。同安窯系に属する一群と判断しており、碗A類に対応する。有文（1類）と無文（2類）に区分される。皿1類は、内面に櫛状・ヘラ状工具による文様が描かれ、外面の体部下部にヘラケズリ調整と押し引きによる花文が施されている。1類、2類とも底部の確認されるものは、

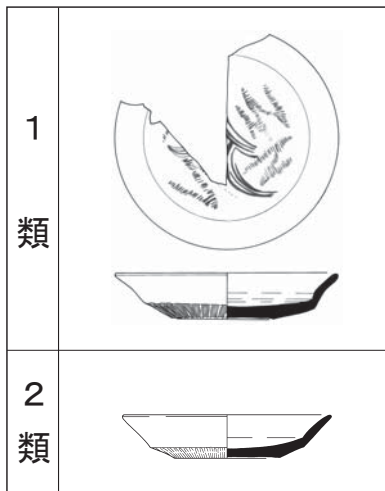


第 12 図 鏡地区出土青磁碗分類図

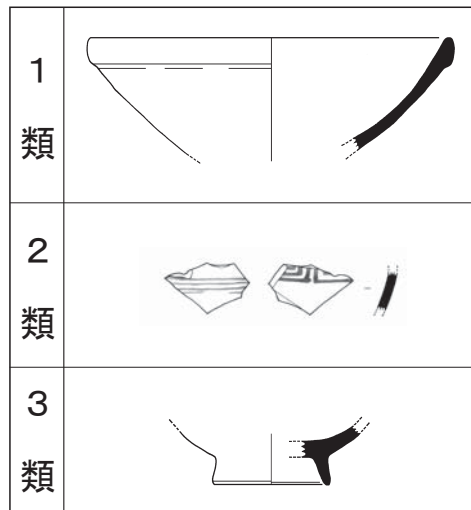
施釉ののち底部の釉を掻き取っている。

白磁の器種は、碗、坏、四耳壺である。坏は鏡西谷遺跡 C 地区で出土したもので、四耳壺は鏡千人塚遺跡などで出土しており、いずれも 2～3 点以下である。

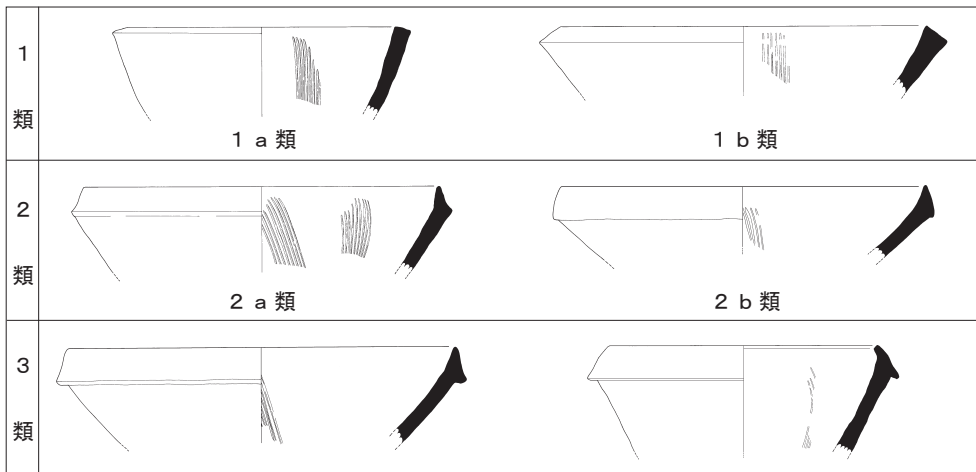
碗は、文様の有無、口縁部の形態、高台の形状などから、無文で玉縁状の口縁をもつもの（1 類）、内外面に雷文が描かれるもの（2 類）、無文で、高くあまり厚くない高台をもつもの（3 類）の 3 種類に分類した。1 類および 2 類は、本遺跡では底部および高台が出土していないが、高台は低く厚めの形態を呈するものと推定される。



第 13 図 鏡地区出土青磁皿分類図



第 14 図 鏡地区出土白磁碗分類図



第 15 図 鏡地区出土備前焼播鉢分類図

## 1 - 2. 陶器

国産と朝鮮産がある。国産では、備前焼、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器があり、備前焼が主体をなす。朝鮮産はB地区で出土した青灰釉陶器で、1点のみである。なお、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器および朝鮮産陶器については出土点数が非常に少なく、分類を行わなかった。

備前焼の器種は、播鉢、甕、壺、小壺が認められる。出土点数は甕が最も多く、播

鉢がそれに次ぎ、壺、小壺はわずかである。甕は基本的に大甕と思われ、胴部破片が多数を占めることから、個体数としては挿鉢とあまり変わらない可能性が高い。一定数が認められる挿鉢について分類を行った。甕についても一定数が存在するが、胴部が大半であり、時期の指標となる口縁部や頸部～肩部がきわめて少ないこと、口縁部の形態が基本的に口縁部を折り返して肥厚させ、幅広の玉縁状を呈するものに限られることから分類は行わなかった。

挿鉢は口縁部の形態を中心に検討し、口縁端部を拡張しないもの（1類）、口縁端部を上方に拡張するもの（2類）、口縁端部を上方と下方に拡張するもの（3類）の3種類に分類した。1類は胴部～口縁部にかけてほとんど厚さが変化せず、やや内湾気味にカーブし、傾斜がやや急な形態（a類）と口縁端部に向かって次第に広がり、胴部～口縁部が直線的な形態（b類）が認められる。1b類は1a類と後述の2a類の中間的形態である。2類はいずれも断面が「く」の字状を呈するが、口縁端部が上方（内面側）へのみ拡張されるもの（a類）と下方（外面側）へもわずかに拡張されるもの（b類）が認められる。2b類は、2a類と3類の中間的形態である。

## 2) 各地区の出土状況

鏡地区における出土陶磁器の内訳を見ると、青磁50点、白磁11点、陶器119点である。青磁、白磁はいずれも中国産と考えられるもので、陶磁器の約1/3を占める。陶器は大半が備前焼であり、朝鮮産青灰釉、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器がほんのわずかに認められる。

ところで、ここに提示した点数は接合資料全体を1点として集計しており、備前焼の大半は大甕の破片と思われることから、陶器の出土点数が個体数を示すものではないが、個体数は少なく見積もっても全点数の半数を大きく下回ることはないと判断される。青磁・白磁および朝鮮産青灰釉、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器については、色調、胎土、焼成および釉、文様などからほぼ個体数を表していると見てよい。

鏡地区出土の陶磁器は、すでに各遺跡、各調査地区の出土状況で述べたように、同じ調査区内でも種類によって分布状況を異にしている。また、青磁、白磁、陶器の比率や種類ごとの型式の組み合わせなどが、遺跡、地区によって異なる様相を見せている（第5～7表）ことから、以下、鏡西谷遺跡および鏡東谷遺跡の各地区における青磁、白磁、陶器の型式と出土状況について詳述してみたい。

青磁50点の内訳を見ると、鏡西谷遺跡B地区7点、C地区15点、D地区1点、E地区17点、鏡東谷遺跡北地区5点、南地区4点、鏡千人塚遺跡1点で、鏡西谷遺跡



C 地区および E 地区を中心に出土している。青磁の器種としては、碗、皿の他に、盤の可能性のあるもの（以下、盤と略す）、形態不明の置物と思われるものが 1 点ずつ認められる。器種全体として見ると、碗を主体に、少量の皿が加わる基本構成であるが、鏡東谷遺跡では皿が欠いている。ただ、遺跡の中心部と思われる鏡東谷遺跡北地区は近世～現代の改変によって中世の遺構が失われていることなどからすると、本来的に皿を含まない構成であったかどうかはさらに検討が必要である。鏡千人塚遺跡では形態不明の置物と思われる青磁片が 1 点出土しており、墳墓に伴うものと判断される。本遺跡は墳墓を主体としており、器種構成の上でも他の調査区とは異なる様相と見られる。

鏡西谷遺跡 B 地区では、碗 5 点、皿 2 点、盤 1 点が出土した。皿 2 点は S X 02 の南側に近接して出土しており、いずれも 2 類である。碗 5 点のうち 2 点は出土区を特定できないが、調査区西半部出土で、1 点は B4 類、1 点は C 地区 S B 01（掘立柱建物）出土破片と接合した A2 類である。前者は釉に透明感があり、やや青みが強い。残りの 3 点は調査区西半部の C2 区、D6 区、調査区東半の H5 区出土で出土している。いずれも B 類で、C2 区出土のものは B1b 類である。暗緑色を呈する。青磁の出土状況から組成を検討することはできないが、調査区西半部出土の碗、皿は組み合わせとなる可能性がある。

鏡西谷遺跡 C 地区では、碗 11 点（内 1 点は B 地点西半部出土資料と接合）、皿 2 点、碗または皿 1 点、碗破片素材と考えられる円盤状土製品 1 点が出土した。出土資料のうち約 2/3 にあたる 10 点が S B 01 由来であり、内訳は、碗 6 点、皿 2 点、碗または皿 1 点、円盤状土製品 1 点である。碗は A 類 5 点、B 類 1 点で、A 類が主体を占める。A 類の内訳は、A1 類 1 点、A2 類 2 点、不明 2 点である。B 類は B1a 類に分類される。皿の内訳は、1 類 1 点、不明 1 点である。碗または皿、円盤状土製品ともに同安窯系で、全体として見ても、大半が同安窯系であり、わずかに龍泉窯系が伴っていると言えよう。他の青磁は調査区西半部の北部を中心に、西半部全体に散漫に分布しており、一部 S B 01 由来の資料を含んでいる可能性がある。いずれも碗で、A 類 1 点、B 類 4 点と、S B 01 とは逆に B 類が主体を占めている。細分型式の確認できる個体は B2d 類 1 点のみで、そのほかは不明である。

鏡西谷遺跡 D 地区では、調査区北端部で碗 1 点が出土した。丘陵平坦部から西斜面にかけての調査区であり、B4 類に分類される。出土位置は特定できないが、堅穴遺構、1 号土壙墓などが近接し、これらの遺構に関連する可能性もある。

鏡西谷遺跡 E 地区では、碗 14 点、皿 3 点が出土した。出土資料の大半は調査区北東部の D・E - 3・4 区付近から集中的に出土しており、調査区北西端部の A1・2 区で 1 点、調査区南部で 3 点出土したのみである。E 地区の大半は、D 地区と F 地区に挟まれた谷地形であり、調査区南部出土資料のうち 1 点が D3・4 区出土資料と接合していること、調査区南部が谷流路の下流にあたることなどから、調査区南部の資料はおおむね調査区北東部の集中的分布域から流下したものと見てよいであろう。碗は A 類 2 点、B 類 12 点で、B 類が主体である。A 類はいずれも A1 類に分類される。B 類は、B1 類 6 点、B2 類 2 点、不明 4 点である。不明の 4 点がいずれに分類されるかによって様相が大きく変化するが、現状では B1 類が比率の上ではかなり上回っている。さらに、B1 類は、a 類 1 点、b 類 2 点、c 類 3 点に細分され、b・c 類に主体がある。B2 類はいずれも a 類である。細分形態の分布を見ると、B1 類は D3 区を中心にかなり狭い範囲に分布するが、B2 類はこの分布域からははずれている。皿は 1 類と 2 類が各 1 点ずつである。1 類は調査区北西部の支谷の谷頭部から出土しており、明確にこの時期に位置づけられる遺構は検出されていないが、調査区北端部の広い範囲で何らかの活動が行われたのかもしれない。

鏡東谷遺跡北地区では、碗 5 点が調査区東半部を中心に散漫に出土した。いずれも B 類で、B2 類 2 点、不明 3 点である。B2 類 2 点のうち 1 点は b 類 1 点で、残り 1 点は a 類もしくは b 類に分類されるものと思われる。

鏡東谷遺跡南地区では、碗 4 点が調査区北部と調査区南部で散漫に出土した。いずれも B 類で、B2 類 2 点、B3 類 1 点、不明 1 点に分類される。B2 類はいずれも c 類に細分され、S X 01 (平坦面)、S X 02 (平坦面) または S X 07 (池状遺構) から出土したものと思われる。B3 類は S B 04・05 付近で出土しており、不明は S B 03 埋土から出土したものと判断される。

次に、白磁であるが、11 点のうち、鏡千人塚遺跡で 1 点出土している他は、すべて鏡西谷遺跡出土であり、青磁よりさらに出土地区が限定されている。鏡西谷遺跡での内訳は、B 地区 2 点、C 地区 4 点、E 地区 4 点である。出土器種は、碗、坏、四耳壺が認められ、いずれも点数は少ないが、碗、四耳壺を主体に搬入されているようである。

鏡西谷遺跡 B 地区では碗 2 点が調査区南西部から出土した。3 類に分類される。鏡西谷遺跡 C 地区では、碗 1 点、坏 1 点、四耳壺 1 点、不明 1 点が調査区西半部西北部の B1～3 区を中心に出土した。碗は 2 類に分類される。坏は S B 01 に近接して

出土している。坏を除くと、B1～3区出土で、調査区西半部の青磁の分布とも一致している。鏡西谷遺跡E地区では、碗2点、四耳壺1点、不明1点が、調査区北部のD3・D4・E3区にまとまる形で出土し、青磁碗B1類の分布域と一致する。碗はいずれも1類に分類され、2点のうちの1点はG地区北端部出土資料と接合している。

最後に、陶器は備前焼を主体に、青灰釉陶器1点、美濃・瀬戸系陶器2点、常滑焼1点が出土している。青灰釉陶器、美濃・瀬戸系陶器は鏡西谷遺跡B地区、常滑焼は鏡東谷遺跡南地区出土である。備前焼は115点出土しており、その内訳は、鏡西谷遺跡B地区12点、C地区7点、G地区4点、E地区1点、鏡東谷遺跡北地区51点、南地区40点である。鏡東谷遺跡での出土点数が全体の大半を占めており、磁器類の出土状況と逆の様相を示している。備前焼の器種は、播鉢、甕（大甕）、壺、小壺が認められる。大半が胴部および底部の破片であり、甕および壺の判別は困難である。

鏡西谷遺跡B地区では、播鉢7点、甕または壺5点が出土した。このうち播鉢1点を除く全てが調査区東半部出土であり、SD01（溝）、SK01（土壇墓）、SX01（柱穴状ピット群）などの遺構群およびその南側に分布が集中している。調査区東半部から出土した播鉢6点の内訳は、1類1点、2類2点、不明3点である。1類はb類、2類はいずれもa類に細分される。不明3点はいずれも底部のため全体の器形は不明であるが、底部形状からすると、1・2類の底部である可能性が高い。これら調査区西部の備前焼分布域で瀬戸・美濃系陶器（天目碗）1点が出土している。残り1点の播鉢は調査区西半部南端部のC・D5区から出土している。底部破片で、分類できないが、1・2類に属する可能性がある。近接して朝鮮産青灰釉陶器碗1点、瀬戸・美濃系陶器（灰釉碗）1点が出土している。備前焼の出土点数は多くはないが、他の地区に比較して播鉢の比率が高いことが指摘できる。

鏡西谷遺跡C地区では、播鉢2点、甕または壺5点が出土した。甕または壺1点を除くと、すべて調査区西半部出土である。特に調査区西半部でも西北部を中心に分布しており、青磁の分布域と重複している。播鉢はいずれも1類で、細分形態はa類である（同一個体の可能性がある）。甕または壺1点はSB01に近接して出土しているが、調査区西半部出土の甕または壺と胎土、色調、調整法が類似していることから同時期の所産と思われる。

鏡西谷遺跡G地区では、調査区西南部から甕または壺4点が出土した。また、E地区では、調査区北西部（B3区）で播鉢1点が出土し、2b類に分類される。

鏡東谷遺跡北地区では、51点中39点が調査区西半部の埋積谷から出土した。これ

らの遺物は、近世後期～近代（明治前半）の遺物と混在する形で出土しており、包含層が近代後半～現代のいずれかの時点で周囲を削平して谷部分を埋積した際に形成されたものと推測される。39点のうち2点の甕または壺が調査区東半部出土資料と接合していることから、出土遺物の一部に調査区東半部由来の資料を含んでいる可能性がある。調査区西半部出土備前焼は全て埋積谷由来であり、播鉢1点、甕2点、壺1点、甕または壺32点である。大半が甕または壺の胴部破片である。播鉢は3類である。調査区東半部では、播鉢3点、壺1点、甕または壺11点が出土しており、やはり、甕または壺の胴部破片が多くを占める。播鉢は、3類2点、不明1点であり、西半部の1点を含め、分類可能資料はいずれも3類である。

鏡東谷遺跡南地区では、40点中35点がS X 01・02・07、S B 03などの北部遺構群出土であり、北側の試掘区を含め、ほとんどが北部遺構群由来の資料である。北部遺構群出土資料の内訳は、播鉢3点、甕1点、小壺1点、甕または壺30点である。播鉢はいずれもS X 01に由来するものと思われ、2b類1点、3類1点、不明1点である。小壺はS X 01、甕はS X 07出土と思われるが、他の甕または壺の分布状況から見て、甕はS X 02からの流入の可能性が高い。甕または壺は大半が胴部破片で、S X 01・S X 02を主体として、S X 01・02から一段低い平坦面のS X 05に若干の分布が認められる。S X 05の資料についても、わずか3点であることから見て、S X 02からの流入である可能性が高い。平坦面は北側に何段か存在することを確認しており、試掘区からも備前焼などが出土していることから、調査区の北側に遺構・遺物がかかなりの広がりを見せていたことはほぼ間違いない。調査区北側遺構群以外では、調査区北部の試掘区2点のほかは、S X 06、S B 04など調査区南部で甕または壺が3点出土したのみである。

以上、鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡の各地における青磁、白磁、陶器の型式と分布状況について概観した。簡単に各地区の様相をまとめておくと、青磁は鏡西谷遺跡C区、E区を中心に出土しており、白磁は鏡西谷遺跡のみで認められる。陶器は備前焼を主体とし、鏡西谷遺跡B地区では朝鮮産青灰釉陶器、瀬戸・美濃系陶器、鏡東谷遺跡南区では常滑焼がわずかに出土している。備前焼は磁器の様相とは逆に、鏡東谷遺跡を中心に出土している。

器種を中心に見ると、青磁では、碗を中心に、皿、盤が認められるが、鏡東谷遺跡では碗のみである。白磁は、碗、坏、四耳壺が認められるが、出土点数が少なく、地点ごとの特徴を見出すことが困難である。備前焼は播鉢、甕（大甕）、壺、小壺が認

められる。甕または壺の胴部破片が大多数を占めるため、正確な個体数による比較は困難であるが、鏡西谷遺跡では播鉢の割合が高く、鏡東谷遺跡では甕（大甕）の割合が相対的に高いと思われる。

地点ごとの陶磁器の特徴について見ると、鏡西谷遺跡B地区は調査区の東半部と西半部で大きく様相を異にしており、東半部では備前焼を中心に青磁、瀬戸・美濃系天目碗が1点ずつ出土している。青磁は碗B類で、備前焼は、播鉢、甕または壺が半数ずつを占め、播鉢は1b類、2a類で構成される。北部にSD 01、SX 01などの遺構群が位置し、これらの遺構に関連して残された遺物を主体とすると考えられる。これに対して、西半部では、備前焼はわずか1点のみで、青磁5点、白磁2点、朝鮮産青灰釉陶器1点、瀬戸・美濃系陶器灰釉碗1点が散漫に分布する。分布はB・C-2・3区の北部とC～F5区を中心とする南部に分けることができ、北部は青磁碗B1d類、青磁皿2類、C地区SB 01出土資料と接合した青磁碗A2類が分布し、出土区不明の青磁B4類も近接して出土した可能性がある。南部は、青磁碗B類、盤、朝鮮産青灰釉陶器碗、瀬戸・美濃系灰釉碗、備前焼播鉢が出土している。

鏡西谷遺跡C地区は調査区東半部と西半部の分布域が認められる。東半部はSB 01関連資料で、青磁を主体とする。青磁は碗、皿で構成され、碗はA類を主体に、B1a類1点が伴っている。調査区西半部は北西部を中心に、青磁、白磁、備前焼が出土している。青磁は碗のみで、B類を主体にA類1点が含まれる。白磁は、碗、四耳壺があり、碗は2類である。備前焼は播鉢、甕または壺で、播鉢はいずれも1a類である。C地区とB地区南部は連続した地形であることを考えると、B地区南部、特にその西半部とC地区西半部は一連の分布と捉えることが可能であり、所属時期の問題を含めて次節で検討してみたい。

鏡西谷遺跡E地区は青磁を主体としており、白磁が少量出土した。陶器は磁器の分布域から外れて備前焼1点が認められるのみで、基本的に組成されない。出土遺物の大半は調査区北東部から出土しており、調査区北西部でも若干の分布が認められる。青磁は碗を主体に、皿が少量組成する。碗はB類を主体とし、A類が少量伴う組成で、C地区SB 01とは逆の様相である。B類は12点あるが、細分可能なものは8点で、B1類、B2類が認められ、前者が主体である。白磁は、碗、四耳壺が認められる。E地区では明確な関連遺構を伴わず、谷地形を中心とすることから、本来の位置から移動している可能性が高い。集中分布の東端部であるF3・4区では土坑群、柱穴群が検出されているが、現状保存が決定されたことから遺構の調査は行っておら

ず、時期や性格は不明である。F3・4区を含む一帯は丘陵緩斜面であり、その東側にはD地区の丘陵平坦面が北西に向かって広がっている（道路敷のため調査していない）。さらにその東側にはB地区西半部が連続した地形面として存在する。D地区北端部で青磁碗1点が出土していることを考慮すると、D地区の北西側に広がる丘陵部を中心として関連遺構が存在した可能性が想定される。E地区の出土磁器についてはB地区西半部、C地区西半部、D地区の出土遺物とも関連づける必要があり、次節で所属時期の問題を含めて検討する。

鏡東谷遺跡は、北地区、南地区ともに備前焼を主体としており、青磁が少量伴っているが、白磁はまったく出土していない。南地区では、1点であるが、常滑焼甕が出土した。両地区出土の青磁はいずれも碗のみで、B類であり、B2類、B3類が認められる。備前焼は、挿鉢、甕（大甕）、壺、小壺が認められ、鏡西谷遺跡に比べると器種が豊富である。挿鉢は3類を主体に2b類が認められる。なお、備前焼の大半は甕または壺の胴部破片であり、かなりの同一個体を含むと思われる、両地区とも甕または壺は5～10個体程度である可能性がある。

### 3) 鏡地区出土の陶磁器類の時期と組成

まず、鏡地区出土の陶磁器の年代について検討してみたい。青磁は碗、皿、盤、そのほかが認められ、本稿では、碗を2類に大別し、さらに2段階に細別して全体10類に分類し、皿を2類に大別した。これらの分類を横田・森田分類（横田・森田1978）および上田分類（上田1982）に対比すると、碗A1類は横田・森田分類同安窯系碗I-1b類、碗A2類は口縁部がわずかに外反し、無文であることからすれば同安窯系碗II類に相当する。また、皿1類は横田・森田分類同安窯系皿I-2b類に、皿2類のうち底部が確認できるものは皿I-2a類にあたる。同安窯系青磁は12世紀中葉～13世紀の初頭に主体があるとされている。碗B1類は内面に劃花文が描かれるものであり、横田・森田分類龍泉窯系碗I類にあたる。碗B1a類は龍泉窯系碗I-4類、碗B1b類は龍泉窯系碗I-2類に、碗B1c類は内面の劃花文が櫛状の工具で描かれていることからすれば、龍泉窯系碗I-3類に比定されるであろう。龍泉窯系碗I-2～4類は12世紀中葉～13世紀初頭に主体があるとされている。碗B2類のうち、B2a類、B2b類は、外面にヘラ状工具によって蓮弁文を描くもので、B2c類も主体はヘラ描である。これらは上田分類のB類に相当し、蓮弁の表現や口縁部形態から見て、碗B2a類は上田分類B-I'、碗B2b類は上田分類B-II類、碗B2c類は上田分類のB-IV類に相当するものと思われる。上田分類B-I'は14世紀中

頃～後半、B - II類は14世紀後半～15世紀前半、B - IV類は15世紀後葉～16世紀初頭に位置づけられている<sup>(1)</sup>。B2d類は口縁部に雷文帯、その下部の胴部に幅広の蓮弁を施しており、上田分類C - II類にあたる。1400年前後に位置づけられている。B3類は横田・森田分類、上田分類に対応するものがないが、沖縄などから多く出土するものであり、15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられている<sup>(2)</sup>。B4類は対比資料を欠き、小破片であることから位置づけが困難であるが、B1類～B2a類に近い年代の可能性はある。

白磁は、碗、坏、四耳壺が認められ、碗を3類に大別した。碗1類は、広い玉縁口縁を有し直線的に広がる体部であることから横田・森田分類碗IV類に相当し、IV - 1類に分類される可能性もある。11世紀後半～12世紀前半に位置づけられているが、大宰府跡では12世紀後半まで普遍的に出土するようである。碗2類は横田・森田分類、森田分類（森田1982）に対応するものがないが、森田によると、内面の印刻による雷文の使用は14世紀代に位置づけられている（森田1982）。3類は底部のみのため詳細は不明であるが、中世の白磁では類例に乏しく、胎土が粗いこと、釉の透明度が高く、釉の厚さが薄いこと、底部が薄いことなどから近世もしくはそれ以降の所産の可能性はある。杯は森田分類のD群にあたり、15世紀代に位置づけられている。

陶器は備前焼を主体としており、播鉢、甕（大甕）、壺、小壺が認められ、播鉢について3類に大別し、さらに細別を行って全体で5類型に分類した。これらの分類を間壁編年（間壁1991）に対比すると、播鉢1類は口縁端部を上下に拡張していないことからⅢ期に位置づけられ、口縁部から胴部の厚さに変化がなく、胴部が内湾気味にカーブする1a類はⅢ期前半、直線的な胴部と口縁端部に向かって厚さを増す播鉢1b類はⅢ期後半に比定される。2類および3類は口縁端部を上部あるいは上下に拡張しており、口縁部外面はほぼ平坦であること、胴部外面の調整が丁寧なヨコナデ調整であることなどからⅣ期に比定される。播鉢2類は口縁部の拡張があまり小さくなく、2a類は口縁部の拡張が上部のみであることからⅣ期初頭に、2b類は下部にも拡張していることからⅣ期前半に位置づけられるものと思われ、播鉢3類は口縁部を上下に拡張し、特に上部への拡張が顕著であることからⅣ期後半に位置づけられるものであろう。各時期の年代は、Ⅲ期が13世紀末～14世紀末、Ⅳ期が14世紀末～16世紀初頭に位置づけられている。各時期の細分については詳細に述べられていないが、ここではⅢ期前半を13世紀末～14世紀前半、Ⅲ期後半を14世紀後半～末、Ⅳ期初頭を14世紀末～15世紀初頭、Ⅳ期前半を15世紀前半、Ⅳ期後半を15世紀後半～16世

紀初頭に位置づけておきたい。甕については時期比定可能な口縁部が出土しており、いずれも扁平化した玉縁口縁であり、Ⅳ期後半に位置づけられるものであろう。

陶器については、この他に、朝鮮産青灰釉陶器、瀬戸・美濃系陶器、常滑焼が少量出土している。朝鮮産青灰釉碗が15世紀後半～16世紀代、瀬戸・美濃系灰釉碗が15世紀後半、瀬戸・美濃系天目碗が15世紀～16世紀に位置づけられるものと思われる<sup>3)</sup>。常滑焼甕は小破片のため詳細な検討ができず、時期は不明である。

次に、上述の年代観に基づいて、鏡地区各遺跡各地区の陶磁器の分布状況を考慮しながら陶磁器の時期や組成について考えてみたい。鏡西谷遺跡B地区では調査区東半部と西半部の大きく分けて二つの分布域を認めることができる。東半部では備前焼を主体としており、青磁、瀬戸・美濃系天目碗が1点ずつ認められた。備前焼のうち時期の特定可能な資料は播鉢で、1b類・2a類であり、間壁編年Ⅲ期後半～Ⅳ期初頭に位置づけられる。青磁碗は小破片で龍泉窯系と判断されるが、詳細な時期は不明である。ただ、色調や釉の状態からすると、碗B2類などに近いものがあり、時代的にはやや下るものと思われる。瀬戸・美濃系天目碗は15世紀～16世紀に位置づけられるもので、備前焼とはやや年代的な開きがあると思われる。調査区北東部遺構群出土の土師質土器は、杯は体部がやや内湾気味である、坏、皿ともに口径／底径が小さく、器高が高い、やや厚手で、内外ともヨコナデ調整がしっかりしているなどの特徴があり、少なくとも15世紀後半以降に位置づけることはできない。調査区東半出土遺物の多くは北東部の遺構群に由来するものと思われ、14世紀後半～15世紀初頭を中心とする時期に位置づけられると考えられ、陶磁器は備前焼播鉢、甕または壺を中心に、青磁碗B類が組成するものと思われる。調査区西半部はさらに北部と南部に分布が分かれており、北部は龍泉窯系青磁碗B1d類1点、同安窯系青磁皿2点が分布する。この他に、調査区西半部出土C地区SB01出土資料と接合した同安窯系青磁碗1点と青磁碗B4類もこの付近から出土した可能性が高いと思われる。同安窯系青磁は碗A2類、皿A2類である。同安窯系青磁は大宰府では12世紀中葉～13世紀の初頭に主体があるとされているが、青磁碗が接合したC地区SB01の様相や、青磁碗B1b類が近接して出土していることなどから、本遺跡では13世紀前葉に位置づけられるものと思われる。南部では青磁碗B類、盤、朝鮮産青灰釉陶器碗、瀬戸・美濃系灰釉碗、備前焼播鉢1点が出土した。朝鮮産青灰釉碗は15世紀後半～16世紀代、瀬戸・美濃系灰釉碗は15世紀後半に位置づけられるが、青磁、備前焼は詳細な時期は不明である。備前焼は分布の中心が調査区東半部にあり、出土位置が比較的近接している



ことから一連の分布として捉えておきたい。また、調査区東半部出土の瀬戸・美濃系天目碗も15世紀～16世紀に位置づけられるものであることから、これら南部出土の陶器と関連あるものと思われ、13世紀後半以降、B地区における人的活動が15世紀後半頃まで何らかの形で行われていたことが推測される。

鏡西谷遺跡C地区は調査区東半部のSB01関連遺物と調査区西半部出土遺物に分けることができる。SB01関連遺物は青磁を主体としており、同安窯系碗を中心に同安窯系皿、龍泉窯系碗の組み合わせを確認することができる。同安窯系碗および皿は横田・森田分類同安窯系碗I-1b類、同碗II類、同皿I-2b類で、龍泉窯系碗は横田・森田分類龍泉窯系碗I-1b類で、大宰府跡における同時期の組成として確認でき、12世紀後半～13世紀初頭に位置づけられている。しかし、SB01で共伴する瓦器、東播系須恵器の年代からすると、現状では13世紀前葉を中心とする時期に位置づけるのが妥当と思われる。先にも述べたように、SB01出土青磁碗とB地区西半部出土資料が接合しており、周辺に同安窯系青磁が出土していることから、SB01造営集団の活動域がB地区西部まで及んでいたことが推定できる。なお、SB01に近接して白磁1点が出土しているが、森田分類D群に分類され、年代的にかなり後出であることからすると、少なくともSB01に伴うものではないと考えられる。

調査区西半部では北西部を中心に、青磁、白磁、備前焼が出土した。青磁はB類を主体にA類が認められる。B類で時期の明確なものはB2d類のみであるが、伝世を考慮しなければA類とB2d類は共伴の可能性が低い組み合わせである。白磁は碗、四耳壺が認められるが、時期推定の可能なものは、碗2類のみである。備前焼は播鉢、甕または壺で、時期推定可能なものは、播鉢1a類がある。これらの様相からすると、青磁碗A類は他の陶磁器類に比べてもっと時期が古く、隣接地にSB01が存在することから、SB01との関連で捉えるのが妥当であろう。東半部出土の白磁坏を含めてその他の陶磁器類を見ると、13世紀末～14世紀前半の備前焼播鉢、15世紀代（前半）に位置づけられる青磁碗B2d類、白磁坏が認められ、複数の時期の陶磁器類が混在している。時期不明の青磁B類は、釉に透明感がありやや青みのあるものと釉の透明度がやや低く緑味の強いものがある。前者は碗B1類に分類される可能性が高く、碗A類に近い時期に、後者は調査区西半部出土の碗B2d類に近い時期のものとして想定しておきたい。以上のことからすると、調査区西半部に分布する陶磁器類は、13世紀前葉に位置づけられる青磁碗A類、B1類?、13世紀末～14世紀前半の備前焼播鉢、15世紀代（前半）に位置づけられる青磁碗B2d類、白磁坏の大きく3時期の

資料が混在していると見られる。3者とも調査区北西部を中心に分布しており、分ちがたい分布状況を示している。青磁碗 A 類、B1 ? 類は調査区東部 S B 01 造営集団の活動と関連する可能性が高いが、現状では接合関係など直接的な関連を窺わせる材料はなく、S B 01 構築前後の何らかの活動を示唆する可能性もある。先に述べたように、B 地区では初頭 13 世紀後半～15 世紀後半に断続的に人的活動が行われた(14 世紀後半～15 世紀初頭が中心か)ことが推定され、それらの活動域が地形的に連続する C 地区まで及んでいるものと理解することができる。

鏡西谷遺跡 D 地区では青磁碗 B4 類が 1 点出土しているのみである。青磁碗の出土区に近接して S K 05 (1 号土壙墓)や S B 04 (竪穴遺構)など中世遺構が位置している。S K 05 出土土師質土器は型式学的特徴より C 地区 S B 01 出土土師質土器に先行する位置づけができ、青磁碗の詳細な年代は明らかではないが、S B 04 に伴っていたとも考えられ、本遺構からは底部ヘラ切りの須恵器坏が出土していることから、1 号土壙墓 S K 05 に近い年代が想定できる。

鏡西谷遺跡 E 地区は調査区北東部を中心に青磁を主体として白磁がわずかに出土した。青磁は碗が主体で、皿が少量認められる。碗は B 類が主体で、分類可能なものは、A1 類 2 点、B1 類 6 点 (B1a 類 1 点、B1b 類 2 点、B1c 類 3 点)、B2 類 2 点 (B2a 類) である。皿は 2 点あり、1 類、2 類が 1 点ずつである。碗 A1 類・B1 類、皿 1・2 類は大宰府跡における同時期の組み合わせとして確認でき、本地区においても組成をなすものであろう。B2a 類は横田・森田分類では 13 世紀中頃～後半に、上田分類では 14 世紀前半に位置づけられており、碗 A1 類をはじめとする組成に後続するものと思われる。分布状況を考慮して、少なくとも 2 時期の遺物が存在すると見ておきたい。また、本地区では少量ではあるが白磁が出土しており、碗 2 点と四耳壺片などが認められる。碗は 1 類で 11 世紀後半～12 世紀前半に位置づけられ、大宰府跡では 12 世紀後半まで普遍的に存在することや、青磁碗 B1 類と同じ分布域から出土していることなどから、本遺跡では青磁碗 A1 類・B1 類、皿 1 類・2 類に組成するものと見ておきたい。これらの青磁、白磁の年代についてであるが、同じ分布域から少量の瓦器碗<sup>4)</sup>、東播系須恵器<sup>5)</sup>が出土しており、これらは C 地区同様、前者は森嶋編年第三 - 2 期 (尾上・森嶋 1995) に、後者は森田編年第二期第 2 段階～第三期第 1 段階 (森田 1995) に位置づけられるものである。これらの遺物が伴っているとすれば、C 地区 S B 01 とほぼ同時期の 13 世紀前葉を中心とする時期と見ることができよう。しかし白磁が見られるなど C 地区 S B 01 の輸入磁器とは異なる組成を示すことや、瓦器、須

恵器をはじめとする遺物組成・量比などがかなり異なることから、今後時期差や性格差などを検討する必要がある。

ところで、D地区の丘陵平坦面は北東側に延びており、B地区西半部、D地区北部の遺構・遺物の出土状態、E地区の遺物出土状態から見て、未調査のD地区の北西に位置する丘陵部を中心に中世の遺構・遺物が存在したことを先に推定した。B地区西半部の北部を中心に青磁碗A類・B1類、皿が分布しており、瓦器塚、東播系須恵器などが少量出土している。また、D地区北端部でも青磁碗B4類が出土し、E地区でも青磁碗A1類・B1類、皿1類・2類、白磁碗1類が出土しており、ほぼ同じ時期の磁器がD地区の北側丘陵部を取り巻くように出土していることから、丘陵平坦部を中心に鎌倉時代前半期の遺構が存在した可能性を想定できる。この丘陵部については平坦面の一部と西側緩斜面部が保存区として現状保存されており、今後の調査によって上記の問題が解決できる可能性も残されていることを付記しておきたい。

鏡東谷遺跡北地区では、青磁、備前焼が出土しており、備前焼が主体である。青磁はいずれも碗B類で、分類可能なものは、碗B2b類、碗B2a類またはB2b類が各1点ずつである。その他の青磁は分類できないが、色調や釉など特徴は碗B2b類・B2c類に類似しており、これらと同時期に位置づけられるものと思われる。年代的には、14世紀後半～16世初頭の時期幅の中に位置づけられよう。備前焼は、播鉢、甕、壺が認められる。播鉢は3類が認められ、間壁編年第IV期後半に位置づけられる。甕は扁平な玉縁口縁で、間壁編年第IV期後半に位置づけられるものと思われる。備前焼の大半は甕または胴部破片で時期の特定は困難であるが、上述のことから、間壁編年IV期に位置づけられ、その後半を中心としているものと推定される。このように、青磁は備前焼より古い時期のものが認められるが、碗B2c類の年代は備前焼とほぼ一致している。備前焼の様相を重視すれば、15世紀後半～16世紀初頭に主体があると見ることができるともかもしれない。北地区では中世の遺構は削平されており、まったく検出することはできなかったが、出土遺物の示す時期に何らかの遺構があったと想定することができる。

鏡東谷遺跡南地区では、青磁、備前焼、常滑焼が出土しており、北地区同様、備前焼を主体としている。青磁はいずれもB類であり、B2c類、B3類が認められる。年代的には、15世紀後半～16世初頭に位置づけられるものであろう。備前焼は、播鉢、甕（大甕）、小壺が認められる。播鉢は、2b類、3類で、大甕は扁平な玉縁口縁であり、全体としては間壁編年IV期前半～後半の時期が認められる。常滑焼は甕であるが、胴

部小破片で、時期的な決め手を欠いている。このように、南地区では北地区と逆に備前焼において青磁に比べ広い時期幅が認められ、15世紀前半～16世紀初頭の年代である。しかし、備前焼挿鉢2b類は1点のみであり、北地区同様、備前焼の主体はIV期後半にある可能性が高い。南地区の出土遺物は調査区北部の遺構群を中心に出土しているが、調査区南部のS B 04・05やS X 06など遺構周辺からも出土が認められる。これらのことから、調査区内で検出された遺構はおおむね同時期に属するものと想定され、陶磁器の示す時期の後半を中心としているものと思われる。

鏡東谷遺跡北地区および南地区における青磁、備前焼の示す年代は少し様相が異なっているものの、全体として見れば、ほぼ同じ時期幅の中で捉えることができ、15世紀後半～16世紀初頭を主体としているものと言えよう。また、組成の上では、備前焼を主体に、青磁碗が少量伴う点では共通している。南地区検出の遺構は丘陵平坦部を階段状に造成した平坦面と丘陵側面を削平して丘陵主軸に平行した細長い平坦面、掘立柱建物群、池状遺構から構成されている。鏡山城跡の南裾に近接して位置し、出土遺物の年代も鏡山城が利用された年代幅の中におさまっており、鏡山城を維持した武士団の居館の一部を構成していたと想定している。北地区では関連遺構を検出することはできなかったが、鏡山城跡の南裾にあたっており、広い平坦面が造成されていたと想定されることや出土の陶磁器などの年代が、南地区同様、15世紀後半～16世紀初頭を中心に、14世紀後半～15世紀前半まで遡る<sup>6)</sup>ことなどから、南地区検出の遺構群に連なる居館の中心部が存在した可能性がある。

なお、鏡千人塚遺跡では、青磁、白磁が1点ずつ出土しており、墳墓に伴うと想定される。

#### 4. 安芸地方における陶磁器の時期的・地域的様相

##### 1) 安芸地方における中世遺跡の調査と陶磁器研究

福山市草戸千軒町遺跡の組織的かつ計画的な発掘調査と研究（岩本編 1993・1994・1995a・1995b）は広島県のみならず中世考古学研究の基盤を形成した。しかし、出土土器の大半を占める土師質土器について見ると、草戸千軒町遺跡が位置する備後（広島県東部）においては同遺跡の土器編年研究の成果をある程度援用することが可能であるが、安芸地方（広島県西部）では様相が異なっており、独自の編年研究を行う必要がある。安芸地方における中世遺跡の発掘調査は1970年前後から少しずつ進められてきており、現在、相当量の資料が蓄積されているが、土器研究について見ると、

必ずしも研究が進展したとは言えない状況にある。

陶磁器類を中心に安芸地方における中世遺跡の発掘調査を概観すると、西条盆地、太田川下流域を中心とする広島湾周辺地域、旧大朝町・豊平町・千代田町および旧吉田町を中心とする芸北地域、安芸と備後の境界に位置する沼田川下流域・竹原地域の4地域において調査が進展している。西条盆地では30遺跡以上の発掘調査が実施されているが、広島大学の東広島市への移転が開始された1981年以降の開発に伴う調査が大半であり、特に1985年以降多くの資料が蓄積された。中世の各時期の遺跡を認めることができるが、鎌倉、南北朝時代に位置づけられる資料は少なく、室町時代を主体とする遺跡が中心である。前者では、道照遺跡（松村編1981、鍛冶編1982、藤岡1993）、鏡西谷遺跡C地区（藤野・増田2003）など、後者では、薬師城跡（渡邊編1996）、城仏土居屋敷遺跡（恵谷編2005a）などで良好な資料が検出されている。広島湾周辺地域においても多くの発掘調査が実施され、中世の各時期の資料が蓄積されている。県内において広域の市街化が早くから進行した地域であり、研究史初期の1960年代～1980年代前半にかなりの発掘調査が実施されており、資料化の点で十分でない遺跡も多い。大半が山城を中心とする城館遺跡であるが、有井城跡（稲葉編1993）、恵下山城跡（山県1977）などで陶磁器をはじめとする豊富な資料を出土した遺跡が散見される。芸北地域は1991年に広島県教育委員会内に中世遺跡調査班が設置され、吉川氏関連の小倉山城跡（小都・平川編2002他）、吉川元春館跡（小都・尾崎編1994他）、万徳院跡（田邊編1991他）などが計画的に発掘調査され、広島県下全域の城館遺跡の基礎調査が実施されるなど、室町時代後半を中心に中世の考古学的研究が大きく進展した。また、この時期に郡山大通院谷遺跡（新川・重森・沖田編2002他）、龍山城跡（是光1993）など開発に伴う発掘調査も行われ、中世後期の資料を中心に蓄積が進んだ。瀬戸内の島部を含む沼田川下流域・竹原地域では発掘調査の件数はあまり多くないが、1970年代後半以降、少しずつ資料蓄積が進んでおり、三原市三太刀遺跡（梅本編2003）、尾道市伎崎城跡（山田・出野上編1998）において良好な資料が得られている。前者は中世前半、後者は中世後半を中心としており、中世の土器様相を大まかに捉えることができる。

安芸地方における調査遺跡の多くは城館遺跡であり、集落遺跡、寺院遺跡などは少ない。特に、物資が集積する港町や城下町などの町屋の調査はほとんど行われていない。また、土器研究の面では編年の基礎となる土師質土器の研究が遅れており、吉野による中世土師質土器編年（吉野1998）が提示されているものの、各地域における

詳細な研究は今後の課題として残されている。

陶磁器研究については発掘調査報告書における組成や年代について考察が主体であるが、いくつかの論攷が散見される。沢本保夫は、万徳院跡出土の陶磁器の組成、出土状態を整理し、広島県の城館遺跡を中心に比較検討した（沢元 2000）。沢元は万徳院跡出土の陶磁器の組成がほぼ同時期にあたる大坂城豊臣前期の様相に類似すること、出土の状況は庫裏と想定される S B 02・03 に集中すること、戦国大名クラスの城館遺跡では、青磁花生・香炉、白磁水注・四耳壺などの付加価値的要素をもつ陶磁器が出土するが、本遺跡では認められず、吉川家岩国移封に伴って搬出されたと想定されることなどを特徴としてまとめている。次に、広島県における城館出土の陶磁器を概観し、16 世紀前半以前は国産陶器において備前焼壺・甕・播鉢のセット、瀬戸・美濃焼天目碗・皿が多く見られ、古い時期には常滑焼甕が加わること、輸入陶磁器は青磁・白磁の碗・皿が多く、朝鮮産青磁・白磁がこれに加わり、16 世紀前半頃から青花が次第に加わるようになること、万徳院跡、吉川元春館跡に代表されるように、16 世紀第 4 四半期以降、青花の陶磁器に占める割合が増大することなどを指摘した。さらに、万徳院跡、吉川元春館跡と 16 世紀前半を中心とする薬師城跡の陶磁器を比較し、共通の特徴として土師質土器の割合が 85～95% に対して陶磁器類は数% ときわめて低いことを挙げ、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の中でも朝倉館跡の様相に共通し、遺跡の性格・機能を顕著に表していると考察している。また、薬師城跡と万徳院跡、吉川元春館跡の相違について、付加価値的要素をもつ陶磁器が前者では顕著であるが、後者ではわずかであること、輸入陶磁器は前者では青磁の割合が高く、後者では青花の割合が高いこと、国産陶器はいずれも備前焼が主体で組成が多様化し、前者では亀山焼、後者では唐津焼が少量加わることなどを指摘しており、遺跡の存続期間、廃絶状況などを反映したものと想定した。さらに、沢元は広島県内の陶磁器が出土した中世城館を集成し、小都隆の編年観に基づきながら、14 世紀、15 世紀、16 世紀前半、16 世紀後半に区分して、出土陶磁器の様相を概観するとともに、陶磁器の組成が公表されている城館遺跡の分析を行い、基本的には先の論攷における指摘を追認した（沢元 2008）。新川隆は吉川氏、毛利氏関連の城館遺跡出土資料を中心に中世後期の輸入陶磁器の様相を検討した（新川 2002）。新川はまず広島県出土の中世陶磁器の様相を概観し、15 世紀以前の遺跡では青磁、白磁が主体で、青磁は龍泉窯系 D 類、白磁は D 群が多く、龍泉窯系 B 類、E 類が含まれること、16 世紀に盛期のある遺跡では様相が一変し、青花が主体となり、青磁は龍泉窯 B4 類が多く、後半では景德鎮産が含まれ、

白磁はE1・E2群が主体となるとした<sup>7)</sup>。ついで、芸北地域の郡山大通院谷遺跡、吉川元春館跡、万徳院跡、小倉山城跡の4遺跡について比較検討し、輸入陶磁器の割合はいずれも10%以下であるが郡山大通院谷遺跡においてやや高いこと、単位面積当たりの出土量は通常居住空間である郡山大通院谷遺跡、吉川元春館跡で高いこと、いずれの遺跡でも奢侈品が出土しているが、吉川元春館跡の酒会壺、万徳院の朝鮮産象嵌青磁は遺跡の性格を示すものとして注目されることなどを指摘している。小都隆は城館の年代的な位置づけを行うにあたり安芸地方の14～16世紀の土器編年を行った(小都2005)。小都は輸入陶磁器および備前焼を編年の軸に据えながら、14世紀、15世紀、16世紀前半、16世紀後半の大きく4時期に区分して、標識遺跡の土師質土器および陶磁器の組成を述べている。陶磁器について列挙すると、14世紀では、青磁碗(線描文・蓮弁文)・皿、白磁小皿、高麗青磁碗、備前焼甕・壺・播鉢(Ⅲ期後半)、常滑焼壺・甕、瀬戸・美濃焼瓶子・天目碗、15世紀では、青磁碗(蓮弁文)・皿、白磁、備前焼甕・播鉢(Ⅳ期)、瀬戸・美濃焼皿・皿の組成が想定されている。16世紀前半では、新たに青花が組成に加わり、青磁碗(鋸歯文・縦線表現の蓮弁文)、白磁皿、青花碗・皿、備前焼甕・壺・播鉢、16世紀後半では、青花碗・皿、青磁、白磁、褐釉陶器、備前焼甕・壺・播鉢・平鉢・碗、瀬戸・美濃皿・天目碗、肥前陶磁器の組成を想定し、輸入磁器では青花が主体を占めるとともに備前焼に多様な器形が見られはじめることを述べている。さらに、小都は城館遺跡の分析を行う中で、定住、恒久的な施設をもつ城や屋敷では陶磁器を含む遺物の出土数が多いことを指摘している。

以上見てきたように、安芸地方における陶磁器研究はその組成について大まかな変遷が解明された段階と言えるが、未だ城館遺跡を中心とした状況であり、地域単位の組成変遷、遺跡の性格に基づく比較研究、型式組成の変遷、他の地方との様相比較など多くの基礎的な研究が課題として残されたままと言えよう。

## 2) 安芸地方における陶磁器組成の検討

前節で見たように、安芸地域における中世の陶磁器研究は城館遺跡を中心としており、年代的にも15世紀以降を主体としている。現状においても、城館遺跡の資料が主体であり、13～14世紀の資料は決して多くはないが、ここでは中世全般<sup>8)</sup>にわたる遺跡<sup>9)</sup>を対象として、安芸地方の主要地域における出土陶磁器類の様相を検討してみたい。分析対象としたのは、資料蓄積の進んでいる西条盆地、広島湾周辺、芸北地域、沼田川下流・竹原地域である。出土陶磁器の組成を分析するにあたっては、輸入磁器(青磁、白磁、青花)および備前焼を中心に器種や型式の組成に注目するとともに、その

他の国産陶器、輸入陶器についても組成変化を見る上で重視した。中国産青磁、白磁および備前焼の型式と年代観については、青磁が横田賢次郎・森田勉分類分類（1978）、上田秀夫分類（1982）、白磁が横田賢次郎・森田勉分類（1978）、森田勉分類（1982）、備前焼が間壁忠彦編年（1991）に基づいており、青磁については、12～13世紀が、横田・森田分類、14世紀以降が上田分類、白磁については、12～13世紀が横田・森田分類、14世紀以降が森田分類に拠っている。なお、上田分類青磁B I'類はB I類（鎬蓮弁文）の鎬を失ったものとされており、A類（横田・上田分類龍泉窯Ⅲ類に対比）よりもやや新しいとされているが、横田・森田分類ではどちらも同じI-5類としてまとめられており、ここでは13世紀後半～14世紀前半の時期に位置づけた。年代については各遺跡出土の備前焼（特に播鉢）を中心に、輸入磁器やその他の陶器および土師質土器の様相を参考に位置づけた。陶磁器の分類や数量については報告書を基本としながら実見資料について観察結果を反映させたが、郡山大通院谷遺跡については新川2002の集計に基づいている。

**西条盆地** 平成大合併以前の旧東広島市および旧福富町を含む地域で、鏡地区を含め30以上の遺跡から陶磁器類が出土しており、その主要なものを検討した（第1表）。13世紀代の遺跡数は少なく、3遺跡のみである。中でも道照遺跡は陶磁器の出土量が突出しており、青磁88点、白磁137点が認められ、白磁の割合が高いのが特徴である（鍛治編1983、藤岡1993）。青磁は同安窯系と龍泉窯系I類の碗が確認でき、青白磁瓶などの奢侈品も見受けられる。割合としてはI-5類（鎬蓮弁文）が多い。白磁のうち分類可能なものはIV～VI類の割合が高く、はっきりと型式が確定できないものを含めて古い形態の碗が多いが、A群が少量認められる。陶器は量的に少なく、備前焼播鉢底部が1点を確認している。この播鉢は硬く焼き締められているが、色調は青灰色を呈しており、備前焼Ⅲ期前半に位置づけられるものと考えられる。出土状況を概観すると、1991年の東広島市調査地区（藤岡1993）ではIV～VI類を中心とする白磁が主体で、同安窯系青磁を少量含む構成であるのに対して、1981年の広島県教育委員会調査地区（鍛治編1983）では白磁の出土量が少なく、青磁はI-5類が主体であることなど、両地区とも陶器がほとんど組成しないが、後者ではわずかに備前焼Ⅲ期前半の播鉢が認められることから、相対的に前者が古く、後者が新しい様相を示していると言えよう。特に、前者ではIV～VI類白磁を主体としており、12世紀代には本遺跡が成立していた可能性が高く、13世紀後半以降遺跡の中心が後者の地区に移った可能性がある。また、鷺田遺跡では同安窯系・龍泉窯系青磁碗4点が出土している（沢



元 1989)。龍泉窯系は I 類で、I - 5 類が認められる。古代から継続して集落が営まれており、出土瓦器の年代や国産陶器が出土していないことなどから 13 世紀代を主体とする組成と考えられる。この他、安芸国分尼寺跡確認調査に伴って行われた露掛西地区など試掘調査区（是光編 1978、松村編 1979・1980）や浄福寺 3 号遺跡（青山編 1990）からも陶磁器が出土している。前者は詳細が不明だが、青磁龍泉窯系青磁 D 類碗、越州窯系青磁壺、白磁 IV・VII・VIII 類碗、備前焼 III 期甕・播鉢などが出土しており、12～14 世紀の遺物が混在しているものと思われる。後者では、龍泉窯系青磁 I - 4 類碗、白磁壺が出土した。

14 世紀代に位置づけられる遺跡はきわめて少なく、福原城跡（葉杖編 2003）、時宗遺跡（石井編 2003）などをあげることができる程度である。福原城跡は 15 世紀後半～16 世紀前半の遺物が主体であるが、この時期に位置づけられる遺物群が検出されており、青磁 B - I 類・D 類碗、亀山焼甕、古瀬戸<sup>(10)</sup> 壺などが含まれている。時宗遺跡では古瀬戸鉢 1 点出土している。この他、福成寺旧境内遺跡第 1・2 調査区（恵谷編 2005b）で青磁 D 類碗、備前焼播鉢・甕（III 期後半）が、周田子遺跡（石井編著 1989）で青磁 B - I' 類碗が出土している。

15 世紀以降は城館を中心に検討可能な資料がかなり存在する。出土資料の主体が 15 世紀代に位置づけられる遺跡としては、福成寺旧境内遺跡（立川編著 1999、恵谷編 2005b）、上条城跡（石井編 1987）、柁坂城跡（吉野編 1993）、古慈喜城跡（吉野編 1996）、向城跡（伊吹・鹿見・篠原・脇坂 1972）、鏡山城跡（小都・佐伯 1987）、五反田遺跡（立川編 1994）などがあり、上条城跡、向城跡は前半、柁坂城跡、鏡山城跡は後半を主体とする可能性がある。遺構との関連で厳密な組成の検討可能な報告例はなく、溝や郭などの遺構面出土の遺物群である。福成寺旧境内遺跡 B 区溝状遺構 1・2 では 15 世紀代を主体とする遺物が出土しており、青磁 D 類・E 類碗・香炉・盤、天目碗、朝鮮産象嵌青磁碗、褐釉四耳壺、古瀬戸灰釉碗、備前焼播鉢・甕（IV 期）など豊富な陶磁器が出土している。柁坂城跡では第 3 郭縁辺部のみの調査であり、青磁 B - II・III 類・C 類碗と白磁 E 群、備前焼播鉢（IV 期）、古瀬戸皿・卸皿が出土した。上条城跡では第 2・3・5 郭から土師質土器を主体に青磁 D 類碗、白磁 III 類皿、古瀬戸天目碗、備前焼播鉢（IV 期前半）が少量出土しており、その他にも龍泉窯系青磁 I 類・D 類碗、白磁 III 類皿・D 群皿、備前焼播鉢・甕（IV 期前半～後半）、古瀬戸皿が出土している。鏡山城跡は試掘調査であるが、下のダバ土塁付近を中心に、青磁 B - IV 類碗・稜花皿、備前焼甕・壺（IV 期後半）などが出土している。その他の遺跡では遺物の総

第1表 西条盆地主要遺跡

種類・型式 遺跡名	青磁											白磁								
	同安窯	I類	B I類	Ⅲ類	B I類	B II類	C II類	D類	E類	B III類	B IV類	稜花皿	不明	大宰府	A群	B群	C群	D群	E群	不明
1 鏡西谷遺跡B地区東部*		△																		△
2 鏡西谷遺跡B地区西北部*	△	△																		
3 鏡西谷遺跡B地区西南部*																				
4 鏡西谷遺跡C地区西北部*	△	△					△						△					△		△
5 鏡西谷遺跡C地区SB 01*	◎	△																		
6 鏡西谷遺跡D地区*		△																		
7 鏡西谷遺跡E地区*	△	◎			△									△						
8 鏡西谷遺跡G地区*																				
9 道照遺跡(広島県調査区)*	△	△	◎	△	△			△	△		△		△	◎	△			△		○
10 道照遺跡(東広島市調査区)*	△	△	△										△	◎						
11 鷲田遺跡*	△	△	△										△							
12 露掛西地区													△							
13 浄福寺3号遺跡		△																		
14 時宗遺跡																				
15 福成寺旧境内遺跡								△		△									△	
16 周田子遺跡*					△															
17 上条城跡*								◎						△						
18 枕坂城跡*						△	△			△			△						△	
19 古慈喜城跡*												△	△							△
20 向城跡*								△												
21 鏡山城跡*											△	△								
22 五反田遺跡*													△							
23 鏡東谷遺跡北地区*						△														△
24 鏡東谷遺跡南地区*												△								△
25 城仏土居屋敷跡*				△		△	△	△	△	△			△					○		
26 薬師城跡*						△		○	◎	◎	○	◎	△		△			◎	◎	
27 寺家城跡*													△							
28 福原城跡*			△					△												
29 御土居遺跡*			△								△	△							△	
30 土居屋敷跡											△								△	
31 山崎1号遺跡*					△															
32 岡城跡*							△	○	○		△								△	
33 上泓遺跡*																			△	
34 荒谷土居屋敷跡*														△						△
35 沼田城跡*																				
36 諏訪面遺跡*													△							
37 秋森城跡*																				
37 山崎2号遺跡*								△					△							

【凡 例】1. 各型式は、青磁Ⅰ・Ⅲが横田・森田分類(1978)、青磁BⅠ～BⅣが上田分類(1982)、白磁大宰府が横田・森田分類(1978)、白磁A～E群が森田分類(1982)、備前焼Ⅲ期～Ⅴ期が間壁編年(1991)に基づく。  
 2. BⅠは横田・森田分類龍泉窯Ⅰ-5類(鎬連弁)である。

出土中世陶磁器一覧表

青花	その他	Ⅲ期播鉢		Ⅲ期甕・壺		Ⅳ期播鉢		Ⅳ期甕・壺		Ⅴ期播鉢	Ⅴ期甕・壺	不明備前	常滑	古瀬戸	他陶器
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半						
			△			△	△					△		○	
												△			
	盤											△		○	朝鮮産碗
	白磁四耳壺	△										△			
						△									
	白磁壺					△									
												△			
	青白磁（梅瓶？）	△													
	白磁四耳壺														
				△											
	白磁壺													○	
△	青磁盤・香炉、朝鮮産象嵌青磁				△	△			△			△		○	天目碗、褐釉壺
							△		△			○		○	
△						△	△							○	
						△						△			
								△	△			△			
							△	△	△			◎			
						△	△	△	△			◎	○		
◎	青磁皿					△	△	△	△			○			天目碗
◎	青磁香炉・壺・瓶・盤・白磁瓶						△		△	△		◎		○	黒褐釉壺、天目碗、朝鮮産壺
									○	△					
									△				○	○	
									△			△			
									△			◎			
	青磁盤								△	△				○	
△	青白磁											△			朝鮮産碗
△									△		△	△			
										△		△		○	
△															
△								△	△					○	○

- △・○・◎は破片数を示し、△= 1～5点、○= 6～10点、◎= 11点以上である。
- 遺跡名の後に\*印のある遺跡については、出土資料全体を対象として集計した。そのほかについては、報告書掲載資料のみ集計している。
- 常滑、古瀬戸は出土の有無のみを示しており、○は点数を表したものではない。

量自体が少なく、出土陶磁器もわずかである。古慈喜城跡では、青磁碗・稜花皿、備前焼甕もしくは壺底部、向城跡では青磁D類碗と備前焼播鉢（IV期前半）、五反田遺跡では堀埋土から複数時期の遺物とともに15世紀代と思われる青磁碗1点が出土した。

15世紀後半（後葉）～16世紀に位置づけられる遺跡としては、薬師城跡（渡邊編1996）、城仏土居屋敷跡（恵谷編2005a）がある。特に、薬師城跡では良好な状態で多量の陶磁器類が出土しており、この地域の基準資料として重要な位置を占める。本遺跡は火災による整地などにより大きく2時期に分けられ、I期（遺構面2）は15世紀後半～16世紀前半、II期（遺構面1-1～3）は16世紀中頃～後半に比定されており、ほぼ肯首できる。遺構に伴って出土した陶磁器類として、I期ではSD1で青磁B-IV碗、白磁D群皿、天目碗、粉青沙器、SE2からは青磁B-III類碗・稜花皿（5個体分以上）、青花皿、黒・褐釉四耳壺、備前焼壺・小壺・水指（IV期後半）など、II期ではSB1で白磁E群皿、青花、SX3で青花、SX4で備前焼播鉢（IV期後半）、SK3で白磁D群坏が出土している。中でも、SE2出土遺物は火災に伴って一括廃棄された資料と判断され、同時性を保証できる貴重な資料である。この他、遺構外から、青磁B-IV類・D類・E類碗・皿・香炉・酒会壺・瓶・盤、白磁E群皿、青花皿、備前焼播鉢・甕（IV期後半～V期）、古瀬戸天目碗・皿の他、灰釉陶器や粉青沙器壺などが出土している。城仏土居屋敷では2枚の遺構面から多くの遺構が検出され、陶磁器が出土したが、多くは遺構面上の包含層であり、陶磁器は遺構との関りで組成が検討できる資料を欠いている。遺構面との関りで見ると、下部遺構面では、青磁C-II類・D類碗、白磁D群坏、天目碗、備前播鉢・甕・壺・鉢（IV期初頭～前半）、上部遺構面では青磁III類・D類・E類、青花、備前甕・壺、小壺（IV期後半）などが出土している。全体的に青磁はやや古い様相を示しているが、下部遺構面は15世紀後半、上部遺構面は15世紀後葉～16世紀前半を中心とするものと思われる。この他、寺家城遺跡（荒木・唐口・松崎1993）、福原城跡（葉杖編2003）があり、前者では青磁D類もしくはE類碗、備前焼播鉢（IV期甕・V期）、後者では備前焼甕（IV期後半）などが出土している。

16世紀代に中心をもつ遺跡も多く、御土居屋敷遺跡（渡邊編2006）、土居遺跡（吉野編2001）、山崎1号遺跡（妹尾編1995）などがあり、御土居屋敷遺跡は遺構との関連で組成が検討できる良好な遺跡である。御土居遺跡は4時期の遺構面が検出されているが、組成の検討可能なものは第1遺構面のみである。陶磁器に関連する主な例を

挙げると、SD1で青花、備前甕（V期）、SD9で備前壺（V期）、唐津皿、SX4で青花碗が出土しており、この他単独出土あるいは遺構に伴わない形で、青磁B-IV類碗・稜花皿、白磁E群皿、青花碗・皿などが出土している。第1遺構面は16世紀前半～中葉を主体とし、17世紀前半までは継続しているようである。土居遺跡でも遺構に伴って多くの遺物が出土しているが、陶磁器組成については検討できるものはほとんどない。SE2中層で白磁E群皿が出土している程度で、遺構外から青磁B-IV類碗、青花碗、備前焼破片などが出土している。山崎1号遺跡では16世紀前半を中心とする良好な遺構・遺物が検出されているが、陶磁器の出土はわずかである。SK2で蓮弁文の青磁碗（B-II類か）、SD3で備前焼甕、播鉢（IV期後半）が出土している。

この他、この時期の遺跡として、岡城跡（出野上編2002）、上泓遺跡（吉野編著2000）、荒谷土居屋敷跡（吉野編著2000）、沼田城跡、諏訪面遺跡、秋森城跡（石井編1989）、山崎2号遺跡（吉野編1999）などがある。岡城跡では青磁B-IV類・C-II類・D類・E類碗・青磁盤、白磁D群、青花、備前焼播鉢・甕（IV～V期）、古瀬戸・美濃焼皿が出土した。土師質土器と磁器には年代差があり、明確な遺構は検出されていないが、磁器は備前焼IV期の遺物群と判断される。上泓遺跡では白磁D群皿、青白磁合子、備前焼壺または甕（IV期）が出土している。15世紀代の遺構・遺物が検出されており、陶磁器はこれらに関連する可能性が高い。荒谷土居屋敷跡では近世遺構の整地土などから、白磁VI類もしくはVII類碗、青磁香炉、青花、備前焼播鉢・壺（V期）が出土している。また、沼田城跡で白磁、備前焼、諏訪面遺跡でD類もしくはE類の青磁碗、秋森城跡で青花、山崎2号遺跡で青磁碗（B-IIIもしくはB-IV類）、備前焼甕（IV期後半）などが出土している。

広島湾周辺地域 太田川下流域を中心とする地域で、可部北部、五日市沿岸部、廿日市市沿岸部、安芸郡府中町、海田町などを含んでいる。20遺跡以上から陶磁器が出土しており、その主要なものを検討した（第2表）。大半は城館遺跡であり、城下町や港町など町屋や集落遺跡、寺院遺跡など、今後多様な遺跡の調査・研究が課題となる。13世紀代の遺跡としては下沖2号遺跡（高下編1994）、巖島菩提院遺跡（是光・妹尾編2005）がある。下沖2号遺跡では古代～中世の建物群が検出されているが、遺構との関りで検討できる資料はない。同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁I-2類・5類（B-I類）・D類碗、白磁IV・V類碗・皿、古瀬戸天目碗などが出土している。出土瓦器は和泉型III-1期～IV-2期（尾上・森嶋・近江1995）におさまるものと

第2表 広島湾周辺主要遺跡

種類・型式 遺跡名		青磁											白磁						青花			
		同安窯	I類	B I類	III類	B I類	B II類	C II類	D類	E類	B III類	B IV類	稜花皿	不明	大宰府	A群	B群	C群		D群	E群	不明
1	下沖2号遺跡*	△	△	△					△						△				△			
2	巖島菩提院遺跡		△												△							
3	下岡田遺跡			△					△					△	△							
4	太田川放水路遺跡			△																		
5	石原常本貝塚			△											△							
6	畝観音免1号古墳														△							
7	恵下山城跡*								△					△							△	
8	三ツ城跡		△												△							
9	恵下城跡*																					
10	白山城跡*																					
11	亀崎城跡*				△			△	◎			△	◎		△			◎		△		
12	横山城跡*																					
13	地藏堂山城跡*								○	◎											△	
14	今市城跡																					
15	国重城跡													△								
16	草津城跡													△								
17	有井城跡			△			△	△	△	△	△	△	△	△	△							△
18	串山城跡													△								△
19	伴東城跡											△										
20	北谷山城跡								△	△	△							△				
21	池田城跡													△								
22	長野遺跡					△		△		△	△											
23	宗高尾城跡											△	△									△
24	寺山城跡																					
25	水晶城跡*																					

【凡例】

1. 各型式は、青磁Ⅰ・Ⅲが横田・森田分類（1978）、青磁BⅠ～BⅣが上田分類（1982）、白磁大宰府が横田・森田分類（1978）、白磁A～E群が森田分類（1982）、備前焼Ⅲ期～Ⅴ期が間壁編年（1991）に基づく。
2. BⅠは横田・森田分類龍泉窯Ⅰ～Ⅴ類（鍋連弁）である。
3. △・○・◎は破片数を示し、△＝1～5点、○＝6～10点、◎＝11点以上である。

思われること、報文では備前焼が確認できないことなどから、組成の細分化が可能ではあるものの、一部14世紀前葉を含む12世紀後半～13世紀を中心とした組成と捉えることができよう。菩提院遺跡は5面の遺構面が検出されており、出土遺物の様相から各遺構面の継続期間を一定の幅に絞り込むことのできる良好な遺跡である。第Ⅲ遺構面を主体に、第Ⅱ遺構面で陶磁器が出土している。第Ⅲ遺構面では、龍泉窯系青磁Ⅰ-4・5類碗・双魚文皿・水差、白磁Ⅳ・Ⅴ類碗<sup>(11)</sup>・Ⅸ類皿<sup>(12)</sup>、中国産黄釉盤、褐釉六耳壺、古瀬戸瓶子、常滑焼壺などが出土した。出土吉備系土師質土器は草戸Ⅱ

出土中世陶磁器一覧表

その他	Ⅲ期播鉢		Ⅲ期甕・壺		Ⅳ期播鉢		Ⅳ期甕・壺		Ⅴ期播鉢	Ⅴ期甕・壺	不明備前	常滑	古瀬戸	他陶器
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半						
													○	
青磁皿・水注			△								△	○	○	褐釉六耳壺、黄釉盤
高麗青磁碗・皿					△	△			△		△			
白磁四耳壺											△			
白磁四耳壺											△			
白磁壺・瓶・高麗青磁碗	○			○	○						◎	○	○	
		△		△			△						○	陶器皿
		△												
			△				△				△			
青磁皿				△	△		○				△	○	○	
					△								○	
壺・香炉							△				△		○	
							△	△					○	
青磁皿	△	△				△		△	△	△	△	○		天目碗、朝鮮産碗
						△							○	
					△	○	△	△	△					
朝鮮白磁皿						△		△	△		△			
朝鮮青磁碗								△	△	△				
青磁皿・香炉						△		△		△				
							△				△			
											△			
							△							

4. 遺跡名の後に\*印のある遺跡については、出土資料全体を対象として集計した。そのほかについては、報告書掲載資料のみ集計している。
5. 常滑、古瀬戸は出土の有無のみを示しており、○は点数を表したものではない。

期前半～Ⅱ期後半古段階（鈴木 2006）を主体とすると思われること、下層の第Ⅳ遺構面出土した瓦器は和泉型Ⅲ-2・3期を主体としさらに新しい傾向を有する個体も認められることから、13世紀前葉～中葉に位置づけられること、上層の第Ⅱ遺構面では備前焼播鉢・甕（Ⅲ期前半～後半）が少量出土していることなどから、第Ⅲ遺構面は13世紀後葉～14世紀中葉に中心をもつと想定される。この他に、詳細は不明であるが、13世紀後半～14世紀前半に遡る遺跡として、下岡田遺跡（潮見・藤田編著 1966、潮見編著 1967、潮見・小沢・鈴木他 1983）、太田川放水路遺跡（松崎・潮

見 1961)、石原常本貝塚 (橋本 2001)、畝観音免 1 号古墳 (河瀬編著 1979) など陶磁器が出土している。下岡田遺跡では、龍泉窯系青磁 I - 5 類・D 類碗、高麗青磁、白磁Ⅲ類・ⅦもしくはⅧ類皿、備前焼播鉢 (Ⅳ・Ⅴ期) などが出土しており、13 世紀後半以降も継続的に遺跡が営まれたものと思われる。また、太田川放水路遺跡で龍泉窯系青磁 I - 5 類碗、白磁四耳壺など、石原常本貝塚で龍泉窯系青磁 I - 5 類、白磁Ⅳ類またはⅤ類碗・四耳壺、備前甕 (時期不明) など、畝観音免 1 号古墳では白磁Ⅳ類碗が出土している<sup>(13)</sup>。組成の詳細は不明だが、青磁は同安窯系が認められず、龍泉窯系 I - 5 類を主体としており、白磁の量が少ないこと、出土遺物に和泉型Ⅲ - 1 期～Ⅳ - 1 期の瓦器を含むことなどから 13 世紀後半～14 世紀を主体とするものと思われる。

14 世紀代を主体とする遺跡は少ないが、恵下山城跡 (山県 1977) では陶磁器がまとまって出土している。恵下山城からは第 1 郭を中心に、青磁 B - I 類・D 類碗や白磁皿・瓶、朝鮮産象嵌青磁碗、備前焼播鉢・甕・壺 (Ⅲ期前半～後半)、常滑焼が出土しており、備前焼の量が多く、土師質土器がきわめて少ないなど特殊な遺物組成を示している。備前焼はⅢ期前半を主体とすること、常滑焼は 6・7 型式 (中野 1995) を主体とするようで、その前後の型式も若干認められることなどから、陶磁器の様相を主として見ると、14 世紀前半～中葉を主体とする組成の可能性が高い。この他に、三ツ城跡 (奥田・岡野編 1987)、恵下城跡 (桧垣編 1978)、白山城跡 (是光・鹿見・篠原他 1973) があり、三ツ城跡では龍泉窯系青磁 I 類碗、白磁Ⅲ類碗、備前焼播鉢・甕 (Ⅲ期～Ⅳ期初頭)、古瀬戸折縁皿・卸皿が出土している。磁器は陶器や土師質土器に比べて古い様相である。恵下城跡は備前焼播鉢 (Ⅲ期後半)、白山城跡は備前焼甕 (Ⅲ期後半～Ⅳ期初頭) が出土している。

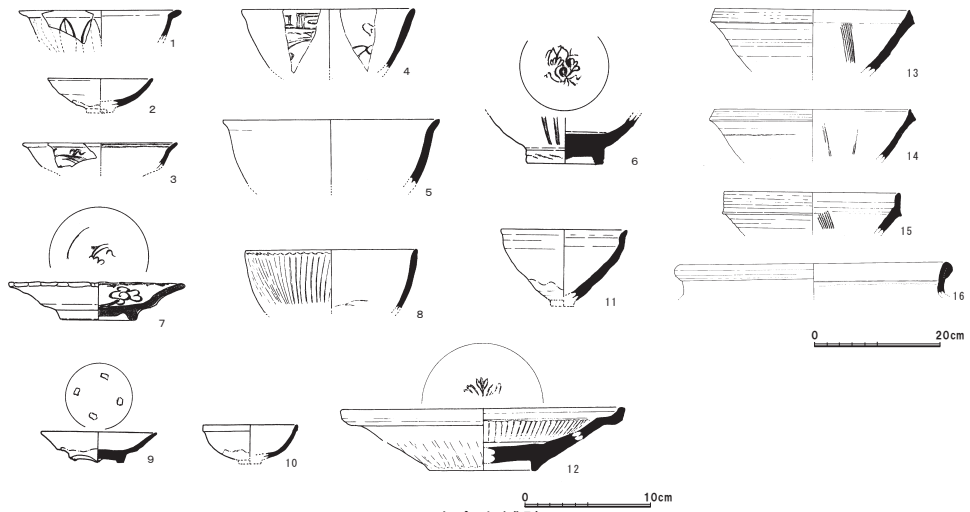
出土状況に基づく詳細な検討はできないが、亀崎城跡 (佐伯 1977) も陶磁器の出土は多い。出土遺物の様相から 14 世紀代 (後半) と 15 世紀代 (前半中心) の大きく 2 時期細分できる可能性があり、前者に青磁 D 類碗・蓮弁文折縁皿 (坏Ⅲ類)、備前焼壺・小壺 (Ⅲ期)、常滑焼甕、後者に青磁 C - II 類・B - IV 類碗、古瀬戸天目碗・卸皿などが含まれると思われる。白磁皿が出土しているが、時期は不明である。青磁は無文が多く、A 類・C - II 類・D 類・E 類碗が認められる。おおむね 14 世紀後葉～15 世紀前葉に位置づけられるものが多いが、現状では大半のものが両時期に属する可能性がある。

15 世紀以降では多くの遺跡が知られるが、ほぼ城館遺跡に限られる。陶磁器を出



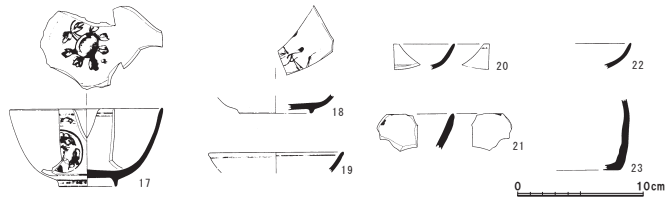
土する遺跡も多いが、遺構との関りで組成が検討できる形で公表されている遺跡はほとんどない。15世紀を主体とするものは、横山城跡（辻編 1984）、地蔵堂山城跡（松村 1977）、今市城跡（宮田編 1993）、国重城跡（幸田・中村・橋本編 1982）、草津城跡（中村・橋本編 1983）などがある。横山城跡では4期の遺構面が確認されているが、各遺構面からの出土量は少なく、最も古期の第1期で備前焼甕（Ⅲ期後半）、第3期で古瀬戸天目碗が出土している。地蔵堂山城跡では青磁D類・E類碗・壺・水注・香炉、白磁D群皿、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期）、古瀬戸皿が出土しているが、出土状況の詳細は不明である。この他、今市城跡では備前播鉢（Ⅳ期後半）、国重城跡では型式不明青磁碗、備前焼甕（Ⅳ期）、古瀬戸小片、草津城跡では型式不明青磁碗が出土している。

15世紀後半～16世紀前半に主体をもつ遺跡も多いが、詳細な組成が検討できる遺跡はほとんどない。有井城跡（稲葉編 1993）、串山城跡（荒川編 1995）、伴東城跡（若島・廣本編 1989）、北谷山城跡（阿部編 1986）、池田城跡（奥田・中村編 1986）、長野遺跡（奥田編 1985）などがある。有井城跡では3期の遺構が検出されているが、各遺構面や遺構との関連に基づいて検討できる資料はほとんどない。出土遺物は第2・3郭を中心に多数出土しており、陶磁器も相当量認められる。青磁B-Ⅱ～Ⅳ類・C-Ⅱ類・D類・E類碗・稜花皿、白磁Ⅲ類碗・皿、青花碗、天目碗、朝鮮産陶器、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅲ期～Ⅴ期）がある。備前焼で見ると、かなり長期間にわたって利用された様子が窺えるが、大きくは備前焼Ⅲ期～Ⅳ期前半とⅣ期後半～Ⅴ期の2様相に分けることができる。前者は青磁B-Ⅱ類・C-Ⅱ類・D類碗、白磁碗・皿、天目碗、朝鮮産陶器、後者は青磁B-Ⅲ・Ⅳ類碗・稜花皿などが属するものと思われ、土師質土器の大半も後者に属する。串山城跡では、青磁碗、青花、朝鮮産青磁碗、備前焼播鉢（Ⅳ期後半）、古瀬戸天目碗が出土している。伴東城跡では第3郭を中心に陶磁器が出土している。第1・2郭出土の陶磁器は、青磁B-Ⅳ類碗、備前焼甕・壺（Ⅳ期後半）で、第3郭は備前焼播鉢・壺（Ⅴ期）などで、相対的に後者が新しい時期を示している。北谷山城跡は青磁B-Ⅲ・Ⅳ類・E類碗、白磁D群皿、朝鮮産白磁、備前焼播鉢・甕（Ⅳ期後半～Ⅴ期）などが出土している。池田城跡では、第3郭および第6郭を中心に、青磁碗、朝鮮産青磁碗、備前焼甕（Ⅳ期後半末）・播鉢・壺（Ⅴ期）が出土しており、土師質土器は16世紀代が主体である。長野遺跡では、土壇Iで青磁B-Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類・D類碗、備前焼播鉢（Ⅳ期末～Ⅴ期）、井戸で青磁B-Ⅱ・Ⅳ碗、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期末～Ⅴ期）が出土しており、遺構外から青磁皿・青磁香炉が出土している。



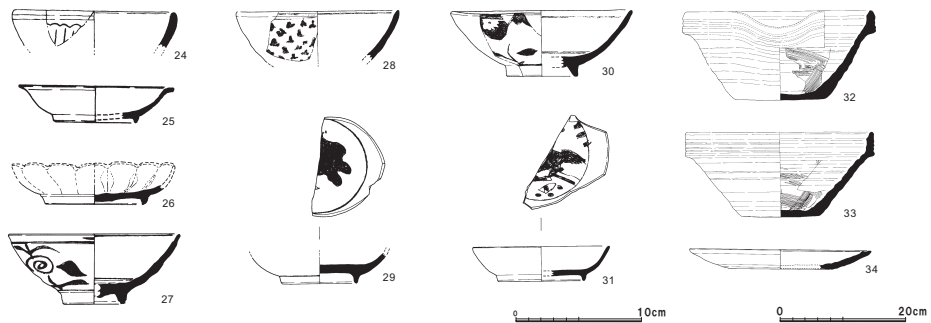
小倉山城跡

(1～3. S X 101、11・12. 小ピット、13. S D 333、15. C 地区柱穴、4～10・16. 包含層)  
(小都・平川編 1996 より)



郡山大通院谷遺跡  
(S F 301 出土陶磁器)

(新川・重森・沖田編より)



吉川元春館跡

(26・27. S D 127、28・29. S D 105、30～33. S G 303、34. S D 103、24・25. 包含層)  
(小都・尾崎編 1994、小都・沢元編 1996、小都・岩本編 1997、小都・平川編 1998 より)

第 16 図 芸北地域における中世遺跡の陶磁器組成

16世紀を主体とする遺跡では宗高尾城跡（藤田・浅岡編1998）を挙げることができ程度である。本遺跡は16世紀前半を主体とし、青磁B-IV類碗・稜花皿、青花皿、備前焼播鉢・甕・小壺がある。この他、寺山城跡（渡邊・葉杖2004）では備前焼甕破片1、水晶城跡（松村1986）では備前焼播鉢片（V期）1が出土している。

芸北地域（第13図） 1990年代に毛利氏および吉川氏関連の城館遺跡を中心に大きく調査・研究が進展した地域である。14世紀以前の様相は現状でもほとんど不明であるが、12世紀後半～14世紀代の陶磁器（同安窯系青磁、龍泉窯系I類青磁、白磁A群・B群など）が郡山大通院谷遺跡などから出土している。15世紀代では、小倉山城跡（尾崎編1993、小都・平川編2002）、須倉城跡（梅本編1998）、小奴可城跡（木村編1988）、龍山城跡（是光1993）がある。小倉山城はA～G区の7地区の調査が行われ、最大8面の遺構面が確認されているが、遺構を単位とする陶磁器組成を検討できる状況ではないので、出土遺物がまとまって報告されているA～D地区について概観する。A地区では、SX101で白磁皿、青花皿が出土している。この他、青磁B-IV類・D類・E類碗、蓮弁のついた皿、青花、朝鮮産象嵌青磁碗、備前焼播鉢・甕（IV期）、古瀬戸天目碗が出土している。B地区では、青磁B-IV類碗、白磁、古瀬戸壺、C地区では青磁C-II類・D類・E類碗・稜花皿・壺・香炉、白磁D群皿、備前焼播鉢（III期後半～V期）、青花碗、朝鮮産象嵌青磁碗・壺、D区では青磁B-IV類・D類・E類碗・稜花皿・盤・長頸壺、白磁D群皿、青花、天目碗、備前焼（IV期）などが出土している。14世紀後半～15世紀前半と15世紀～16世紀前半の大きく2群に分けることが可能であるが、後者が主体であろう。また、青磁・白磁碗には龍泉窯系I類、白磁皿類など古い時期の資料が少量含まれている。須倉城跡では青磁D類碗、備前焼播鉢（IV期前半）、古瀬戸卸皿、小奴可城跡では青磁碗、備前焼甕、古瀬戸長頸壺が出土しており、龍山城跡では青磁稜花皿1点が単独で出土した。

16世紀の遺跡は、吉川元春館跡（小都・尾崎編1994・1995、小都・沢元編1996、小都・岩本編1997、小都・平川編1998）、万徳院跡（田邊編1991・1992・1993）、郡山大通院谷遺跡（新川・重森・沖田編2002・2003）などがあり、いずれも16世紀後半を主体とする。特に、吉川元春館跡、万徳院跡は短期間に廃絶され、組成を検討する上できわめて良好な資料である。郡山大通院谷遺跡についても、16世紀中葉～後葉を主体に7期の遺構面が確認され、遺構に伴って多量の遺物が出土している。ここでは遺構ごとの事例を列挙することはせず、16世紀後半の様相として大きくまとめて説明しておく。吉川元春館跡では、磁器の7割を青花碗・皿が占めることが特徴で

第3表 芸北地域主要遺跡出土

種類・型式 遺跡名		青磁											白磁						青花			
		同安窯	I類	B I類	III類	B I類	B II類	C II類	D類	E類	B III類	B IV類	稜花皿	不明	大宰府	A群	B群	C群		D群	E群	不明
1	小倉山城跡		△	△			△	△	◎	○	○	△	○	△					△			◎
2	須倉城跡*							△														
3	小奴可城跡*							△														
4	龍山城跡*												△									
5	吉川元春館跡			△				△	△		△									◎		◎
6	万徳院跡																			○		○
7	郡山大通院谷遺跡1～4次			◎	△	○	○	◎	△	△	◎	○	◎	○	△				○	◎		◎
8	郡山大通院谷遺跡5次					△				△	◎	△	◎			△		△	◎			◎
9	郡山大通院谷遺跡6次	△	△	△		△		◎	○	△	◎	△	◎	△				◎	◎			◎
10	郡山城跡御里屋敷推定地(2・3次)			△																		
11	郡山城下町遺跡											△	△	△							△	◎
12	寺尾遺跡												△							△	△	○

【凡例】

1. 各型式は、青磁Ⅰ・Ⅲが横田・森田分類(1978)、青磁BⅠ～BⅣが上田分類(1982)、白磁大宰府が横田・森田分類(1978)、白磁A～E群が森田分類(1982)、備前焼Ⅲ期～Ⅴ期が間壁編年(1991)に基づく。
2. BⅠは横田・森田分類龍泉窯Ⅰ～Ⅴ類(鍋連弁)である。
3. △・○・◎は破片数を示し、△=1～5点、○=6～10点、◎=11点以上である。

第4表 沼田川下流域・竹原地域

種類・型式 遺跡名		青磁											白磁						青花			
		同安窯	I類	B I類	III類	B I類	B II類	C II類	D類	E類	B III類	B IV類	稜花皿	不明	大宰府	A群	B群	C群		D群	E群	不明
1	三太刀遺跡*	△	○	○		○	△		△	△				◎	○	△						△
2	俵崎城跡*					△	△					△	△						△	△	△	△
3	高崎城跡											△	△									
4	正広城跡					△							△									
5	金壳城跡												△									
6	小梨城跡									△		△	△							△		△
7	安芸国沼田荘沼田市遺跡												△						△	△	△	△
8	行武城跡											△	△							△		△

【凡例】

1. 各型式は、青磁Ⅰ・Ⅲが横田・森田分類(1978)、青磁BⅠ～BⅣが上田分類(1982)、白磁大宰府が横田・森田分類(1978)、白磁A～E群が森田分類(1982)、備前焼Ⅲ期～Ⅴ期が間壁編年(1991)に基づく。
2. BⅠは横田・森田分類龍泉窯Ⅰ～Ⅴ類(鍋連弁)である。
3. △・○・◎は破片数を示し、△=1～5点、○=6～10点、◎=11点以上である。

出土中世陶磁器一覧表

その他	Ⅲ期播鉢		Ⅲ期甕・壺		Ⅳ期播鉢		Ⅳ期甕・壺		Ⅴ期播鉢	Ⅴ期甕・壺	不明備前	常滑	古瀬戸	他陶器
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半						
青磁皿・高麗青磁・朝鮮白磁・香炉				△	△	△			△				○	朝鮮産瓶・碗皿
					△								○	
											◎		○	
									△	△	○		○	朝鮮産瓶・青釉陶器
									○				○	
青磁皿・盤・香炉・瓶・合子									○		◎		○	天目碗・朝鮮産瓶
青磁皿・盤・香炉											○		○	朝鮮産瓶
青磁皿														天目碗・朝鮮産瓶
									△					青釉陶器
青磁皿・朝鮮白磁							△		△		△		○	
									△	△	△			

4. 遺跡名の後に\*印のある遺跡については、出土資料全体を対象として集計した。そのほかについては、報告書掲載資料のみ集計している。

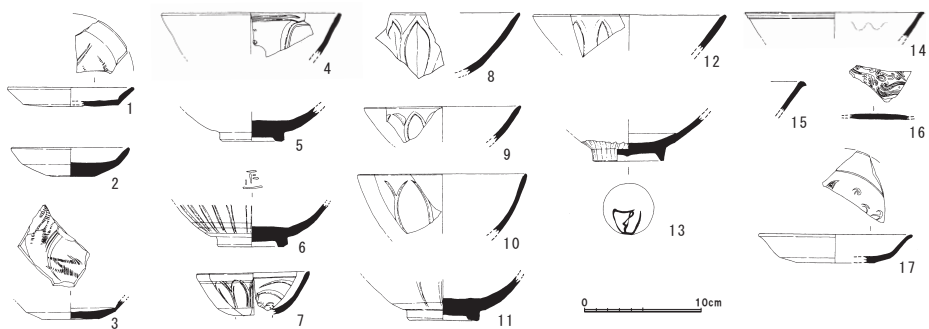
主要遺跡出土中世陶磁器一覧表

その他	Ⅲ期播鉢		Ⅲ期甕・壺		Ⅳ期播鉢		Ⅳ期甕・壺		Ⅴ期播鉢	Ⅴ期甕・壺	不明備前	常滑	古瀬戸	他陶器
	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半						
青磁皿・青白磁													○	
青磁皿・盤								○	△	△	△	○	○	朝鮮産碗・壺
					△		△	△				○		茶褐釉壺
					△	△	△							
									△	△	△			
						△	△			△	△		○	
									△	△				

4. 遺跡名の後に\*印のある遺跡については、出土資料全体を対象として集計した。そのほかについては、報告書掲載資料のみ集計している。

ある。青磁はB - IV類・D類・E類碗が多く、他に青磁壺・香炉、白磁E群皿が出土している。陶器は、朝鮮産碗・皿・瓶、備前焼播鉢・甕・壺・皿、古瀬戸天目碗・皿が認められる。備前焼は大半がV期であるが、IV期末に遡るものがわずかに見られる。万徳院跡についても16世紀第4四半期を中心とする短期間の存続であり、白磁E群皿、青花碗・皿、備前焼甕、古瀬戸が認められる。青花が約8割を占めており、備前焼は1個体のみである。郡山大通院谷遺跡でも青花の割合が7割近くを占めている。調査地点によって組成に違いが見られるが、全体として見ると、青磁は、14世紀以前に遡る同安窯系・龍泉窯系青磁I類碗以外では、盤・香炉・瓶・合子などがあり、白磁はE群皿が最も多い。陶器は中国産天目碗、朝鮮産碗・皿・瓶、備前焼甕・壺・播鉢、古瀬戸天目碗・皿・壺・蓋、唐津碗・皿など認められる。備前焼はV期を主体にIV期後半以降の資料が認められるが、量的には少ない。青花を主体とする組成がどの時期に成立しているかはさらに検討の必要があるが、V期（16世紀中頃～16世紀第3四半期後半に比定）のSF 301は青花を主体とする組成であり、この事例を重視すれば、遅くとも吉川元春館跡・万徳院跡に先立つ16世紀後葉には青花を主体とする組成に移行した可能性がある。この他、郡山城跡御里屋敷推定地2・3次調査地（尾崎1992）で龍泉窯系青磁I - 4類碗、備前焼V期播鉢など、郡山城下町遺跡（荒木編1993、伊藤編著1995）では、青磁B - I類碗・皿、白磁碗、青花碗・皿、朝鮮産白磁、備前焼V期播鉢、肥前染付碗・皿などが出土している。

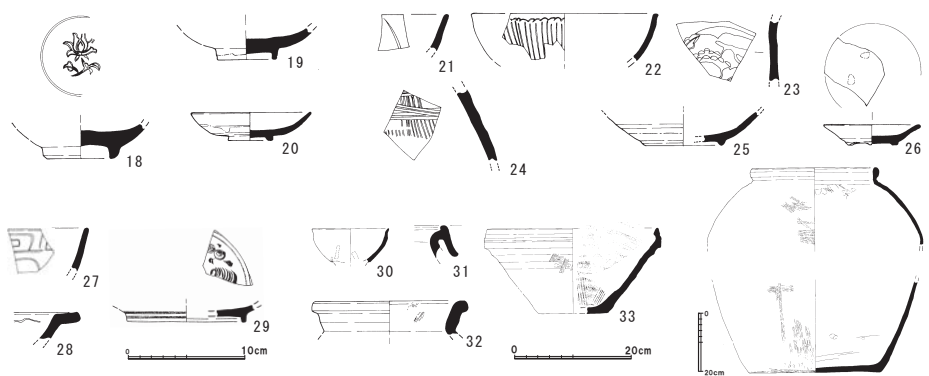
沼田川下流・竹原地域（第14図） 旧豊田郡本郷町および竹原市を中心とする地域で、安芸地方南東部に位置し、隣接する瀬戸内海の島部もここに含めて説明する。調査件数は多くないが、各時期の資料が知られており、時代順に概観する。三太刀遺跡（梅本編2003）ではA・B・C地区において遺構に伴って陶磁器類が出土している。A地区SB3で龍泉窯系青磁碗、白磁IX類碗、瓦器、B地区ではSB9で龍泉窯系青磁碗、SX1で同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁I - 5類碗および合子・香炉、V・VI類の白磁碗、青白磁碗・瓶、古瀬戸灰釉碗、瓦器、須恵器播鉢が出土しており、備前焼はまったく含まれていない。C地区ではSD9で龍泉窯系青磁I - 6類碗、瓦器が出土している。その他、単独あるいは遺構外から同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁I - 4・5類碗、白磁IV・V類、古瀬戸灰釉碗などが出土している。全体として見ると、龍泉窯系青磁I - 5類碗の割合が高く、陶器をほとんど伴っていない。瓦器・東播系須恵器および吉備系土師質土器の年代や白磁IX類が存在すること、備前焼が認められないことなどからおおむね13世紀～14世紀前半（前葉）を中心とする年代が想定される。



三太刀遺跡

(1・2・5・6・14～17. SX 8、8. SA 4、3・4・7・9～13. 包含層)

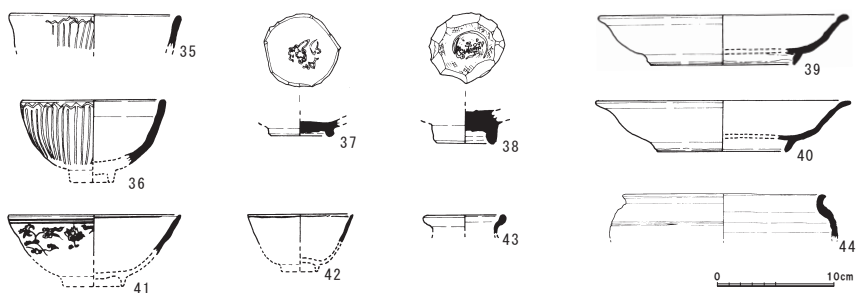
(梅本編 2003 より)



依崎城跡

(18～20. SK 33、21～24. SB 1、25・26. SD 2、34. SX 7、27～33. 包含層)

(山田・出野上編 1998 より)



行武城跡

(35・37・39. SK 1、36・40～44. SK 3、38. SX 1)

(田邊編 1984 より)

第 17 図 沼田川下流域・竹原地域における中世遺跡の陶磁器組成

14世紀代は、三太刀遺跡の他に俵崎城跡（山田・出野上編 1998）で14世紀後半とされる遺構が検出されているが、少量の土師質土器が出土しているのみで、詳細は不明である。15世紀代に位置づけられる遺跡は後半を主体としており、15世紀後半～16世紀前半に位置づけられる遺跡が大半である。俵崎城跡は4期の遺構が検出されており、Ⅱ期～Ⅳ期の遺構および遺構面で多数の遺物が出土している。陶磁器について見みると、Ⅱ期ではS K 33で青磁D類碗・B-Ⅲ類碗高台、白磁D群皿が出土している。Ⅲ期ではS B 1で青磁B-Ⅱ・Ⅳ類碗・盤、粉青沙器、S X 7で備前焼甕（Ⅳ期後半）などが出土している。S D 2・4はⅢ～Ⅳ期に属し、S D 2で白磁D群皿、E群皿、S D 4で備前焼甕（Ⅳ期後半）が出土している。備前焼の年代を重視すると、Ⅲ期は15世紀後葉～16世紀初頭に、後続するⅣ期は16世紀代と考えられる。また、Ⅱ期は15世紀後半以前と想定されるが、S K 33出土遺物に青磁B-Ⅲ類を含むこと、伴出の畿内系土師質土器の年代などから15世紀中葉～後葉に位置づけられる。この他に、1郭、4郭で多量の遺物が出土しており、磁器は、青磁B-Ⅱ・Ⅳ類・C-Ⅱ類・D・E類碗、青磁盤・香炉、白磁D・E群、青花碗・皿、陶器は中国産天目碗、朝鮮産陶器、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期後半～Ⅴ期）、常滑焼甕、古瀬戸天目碗・小壺などが認められ、おおむね15世紀～16世紀のものであろう。高崎城跡（脇坂・田邊他 1986）では井戸一括資料があり、青磁B-Ⅳ類碗、備前焼播鉢（Ⅳ期後半～Ⅴ期）が出土している。土師質土器の様相は俵崎城跡Ⅲ期に類似する。また、郭の遺構などから備前焼播鉢・壺（Ⅳ期後半～Ⅴ期）、古瀬戸皿・卸皿が出土している。この他、正広城跡（樫・橋本編 1992）では、青磁B類・E類碗、備前焼播鉢・甕（Ⅳ期前半～後半）、常滑焼甕、小梨城跡（太田ほか 1978）では第1a郭を中心に青磁B-Ⅳ類・E類碗・稜花皿、白磁E群皿、青花皿、備前焼甕・壺（Ⅳ期後半～Ⅴ期）、金売城跡（岩井・中山・椿 1994）では青磁（型式不明）が出土しており、安芸国沼田荘沼田市遺跡（佐藤編 1993）でも、詳細は不明であるが、青磁碗、白磁D・E群皿、青花碗、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期後半）、古瀬戸壺など15～16世紀に位置づけられる陶磁器が知られている。

16世紀を中心とする遺跡として、行武城跡（田邊編 1984）を挙げることができる。S K 01・03で一括資料が得られており、S K 01では青磁B-Ⅳ類・E類碗、白磁E群皿、S K 03では青磁B-Ⅳ類碗、白磁E群皿、青花皿・碗、備前焼甕もしくは壺・小壺（Ⅴ期）などが出土している。

### 3) 安芸地方の陶磁器組成の変遷

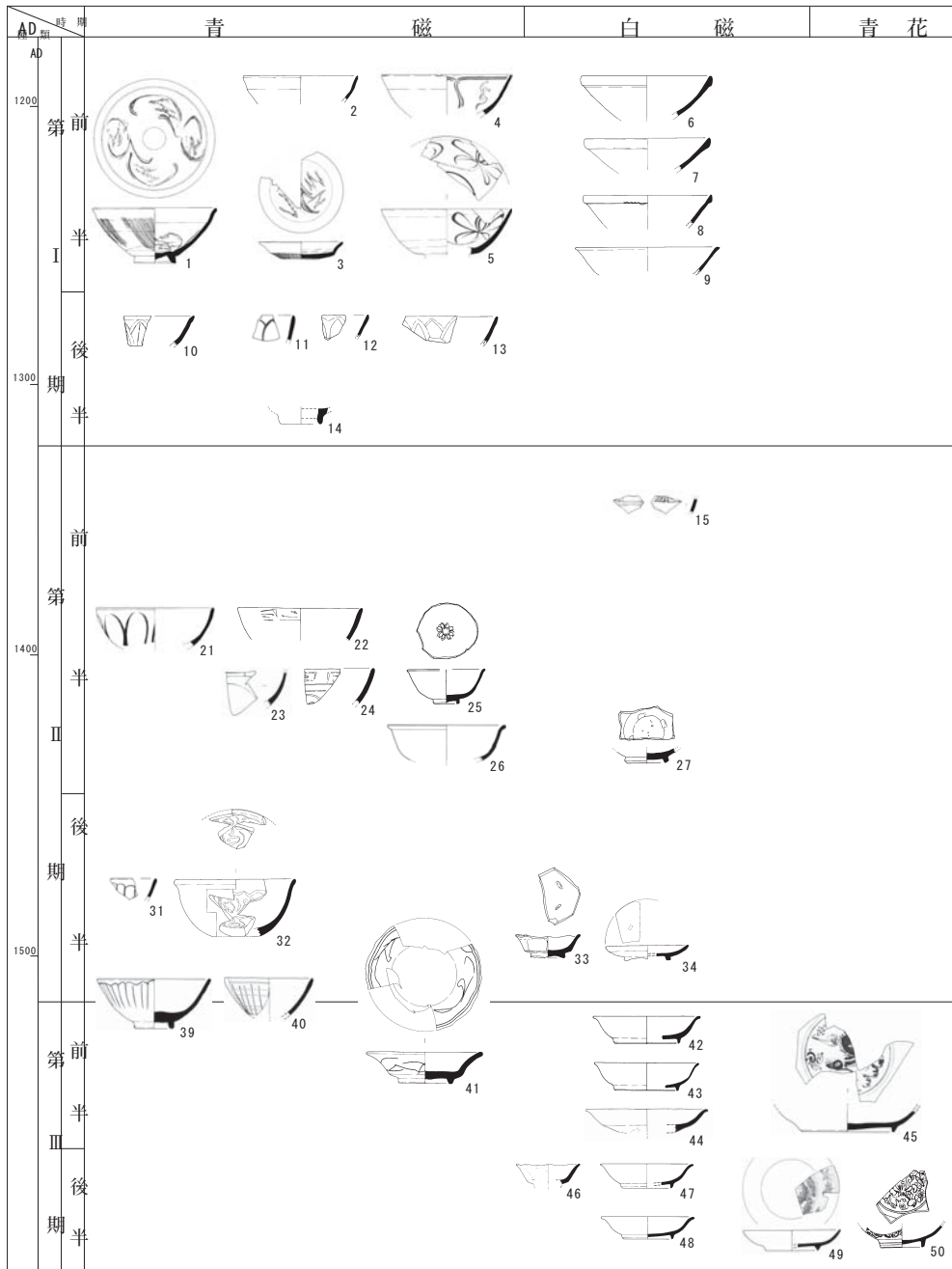
前節において、安芸地方の4地域における主要遺跡の陶磁器組成について時系列に



沿って概観した。ここで、地域様相をまとめておきたい。

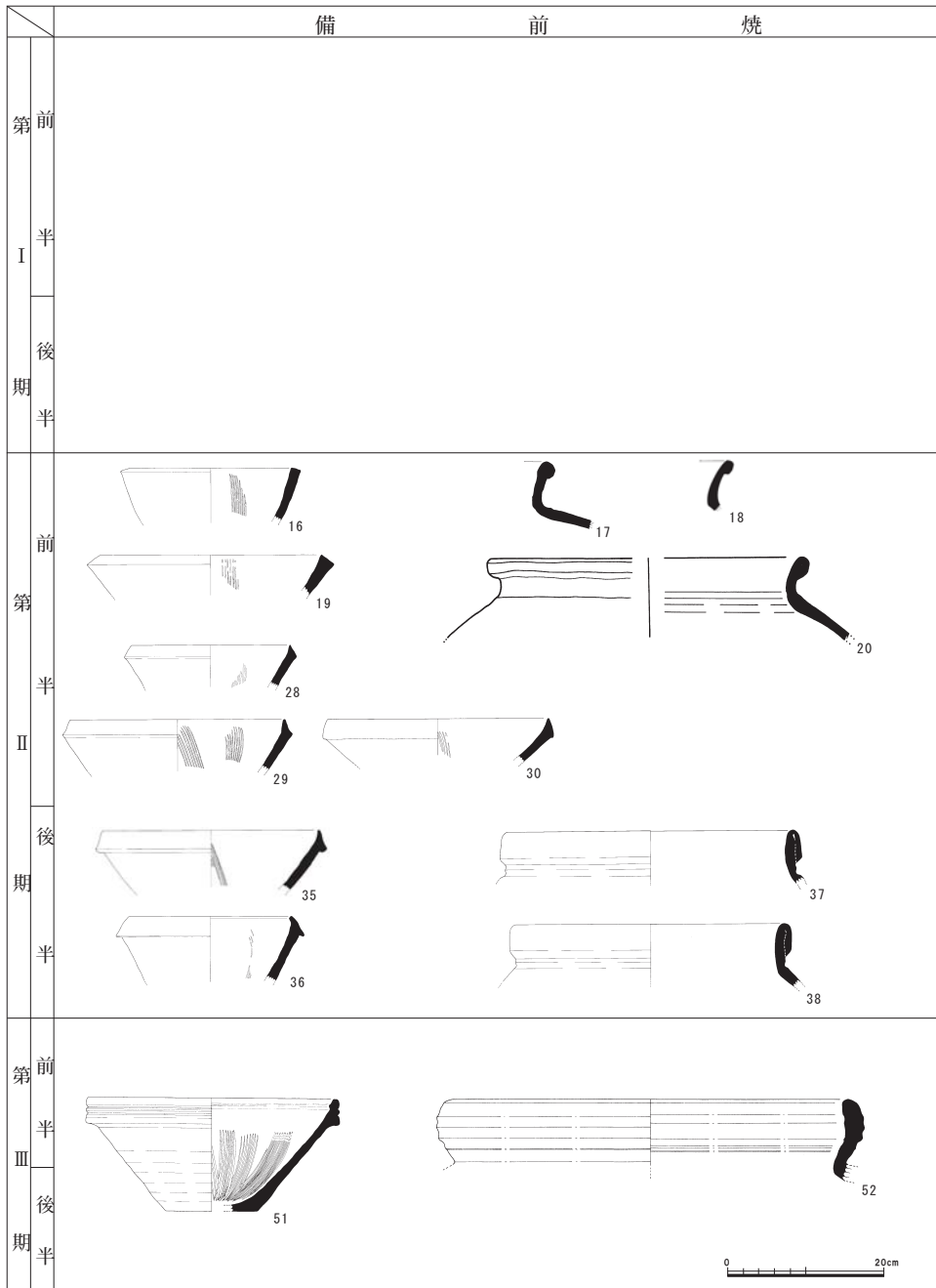
西条盆地では12世紀代後半～14世紀前半（前葉）は同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁Ⅰ-2～5類碗、白磁Ⅳ～Ⅵ類碗などが認められる。陶器の伴出量はきわめて少なく、備前焼も基本的に見られない。道照遺跡では同安窯系青磁を含みながら白磁Ⅳ～Ⅵ類を主体とする地点と同安窯系青磁、龍泉窯系青磁Ⅰ-4類、白磁Ⅳ～Ⅵ類を少量含みながら龍泉窯系青磁Ⅰ-5類（B-I類）を主体とする地点の2つ様相が認められる。両地点とも厳密な組成を確定できる状況ではなく、複数時期の遺物が混在している可能性があるが一定の時間幅における組成として理解することが可能であろう。前者は、鏡西谷遺跡C地区SB01が同安窯系青磁碗・皿と龍泉窯系青磁Ⅰ-4類碗の組み合わせで13世紀前葉を中心とする時期に位置づけられること、大宰府跡では白磁Ⅱ～Ⅵ・Ⅷ類碗、Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ類皿の組成から同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁Ⅰ-2・4類碗主体の組成へと移行し、その時期が12世紀中葉～13世紀初頭に位置づけられている（横田・森田1978）ことから、12世紀後半～13世紀初頭に位置づけられる可能性が高い。後者は鏡西谷遺跡C地区SB01や同遺跡E地区では龍泉窯系青磁Ⅰ-5類（鎬連弁）をまったく含まないこと、大宰府跡では同安窯系青磁、龍泉窯系青磁Ⅰ-2・4類の組成から龍泉窯系青磁Ⅰ-5類を主体とする組成へ移行し、その時期が13世紀中葉である（横田・森田1978）こと、点数はわずかであるが備前焼Ⅲ期前半播鉢が出土していることなどから、13世紀中葉～14世紀前半（前葉）に位置づけられるものと思われる。

14世紀代の様相は明確ではなく、青磁B-I類・D類碗、亀山焼甕、古瀬戸壺・鉢などが認められる。鏡地区の様相を参考にすれば、備前焼播鉢・甕（Ⅲ期）が組成に含まれると考えられる。白磁についても少量組成するものと思われ、鏡西谷遺跡B地区の雷文をもつ白磁碗、道照遺跡の白磁A群碗（未報告資料）が確認できる。磁器を主体とし、備前焼などの陶器が一定量組成するものと想定される。14世紀前半頃から備前焼の流通が本格的になるものと想定される。常滑焼の甕が多く流通している時期である（鈴木2006、間壁1991）が、現状では本地域では常滑焼はほとんど出土していない。青磁B-I類については14世紀代のどのあたりまで主体的に使用されているのかは現状では不明であるが、前半（前葉）を中心とする可能性がある。また、鏡西谷遺跡C地区では青磁C-II類が出土している。鏡西谷遺跡C地区に隣接する調査区の様相から見て14世紀後半～15世紀前半の時間幅の中で捉えることができると思われ、C類の出現を14世紀後半に求めることが想定可能である。



第18図 西条盆地における

(1～7、14～16・19・23・27～31. 鏡西谷遺跡、8～12. 道照遺跡、13・24・35. 城仏土居屋敷、境内遺跡、29. 上泓遺跡、36・46～51. 薬師城跡、22・44・45. 柁坂城跡、52. 山崎2号遺跡、※半透明の図は組成として含まれる型式を示すが、利用した図面の時期とは一致しない。



中世陶磁器組成の変化

17・18. 安芸国分尼寺推定地露掛西地区、20・26. 上条遺跡、21・32～34. 鏡東谷遺跡、25. 福成寺旧  
53. 寺家城遺跡、54. 御土居遺跡、A. 葉師城跡)

15世紀代では、磁器は青磁B-II～IV類・C類・D類・E類碗、青磁香炉・盤・稜花皿、白磁Ⅲ類・D群皿、陶器は天目碗、朝鮮産象嵌青磁碗、褐釉四耳壺、古瀬戸灰釉碗・皿・卸皿、備前焼播鉢・甕（IV期）などが確認でき、多くの遺跡で陶器が組成されるとともに、出土量や種類が豊富となっている。前半に盛期をもつ遺跡・遺構と後半に盛期をもつ遺跡・遺構を参考にすると、前半では龍泉窯系I類・B-II類・C類・D類碗、白磁Ⅲ類皿、瀬戸天目碗、備前焼播鉢・甕・壺（IV期前半）、後半では青磁B-Ⅲ・IV類・D類・E類碗、青磁稜花皿、白磁D群皿、備前焼播鉢・甕・壺（IV期前半）の組成が想定される。前半に見られる龍泉窯系青磁I類は型式が不明で、14世紀以前からの伝世である可能性が高く、一般的な組成ではないと思われる。白磁Ⅲ類皿も同様であろう。後半の青磁B-Ⅲ・IV類は使用の盛期に前後関係があるものと思われ、後続時期の様相からB-IV類が後出と判断される。青磁の皿は13世紀代を中心とする同安窯系青磁を除くと、その後ほとんど認められないが、この時期の後半には稜花皿が組成に加わっている。白磁D群皿は後半期に組成されるが、さらに時期的に遡るかもしれない。15世紀代および後続の16世紀前半では、備前焼を代表とする陶器類がほとんど例外なく共伴している。備前焼播鉢・甕・壺、瀬戸焼皿・卸皿などが主要な器種で、日常雑器として普及している。

15世紀後半（後葉）～16世紀前半になると、青磁B-IV類碗・白磁E群皿が多くなるが、青磁B-Ⅲ類碗、白磁D群皿も認められ、この他に、天目碗、粉青沙器、黒・褐釉四耳壺、備前焼壺・小壺・水指（IV期後半）の陶器が組成する。また、この時期から新たに青花（皿）が少量加わっている。青花の組成時期を詳細に検討できる状況にはないが、きわめて少量であり、薬師城跡I期SE2を除いて厳密な共伴関係を検討できる遺跡がほとんどないこと、16世紀前半代の遺跡でも青花の出土が少量であることなどから、当面は16世紀前半と見ておきたい。

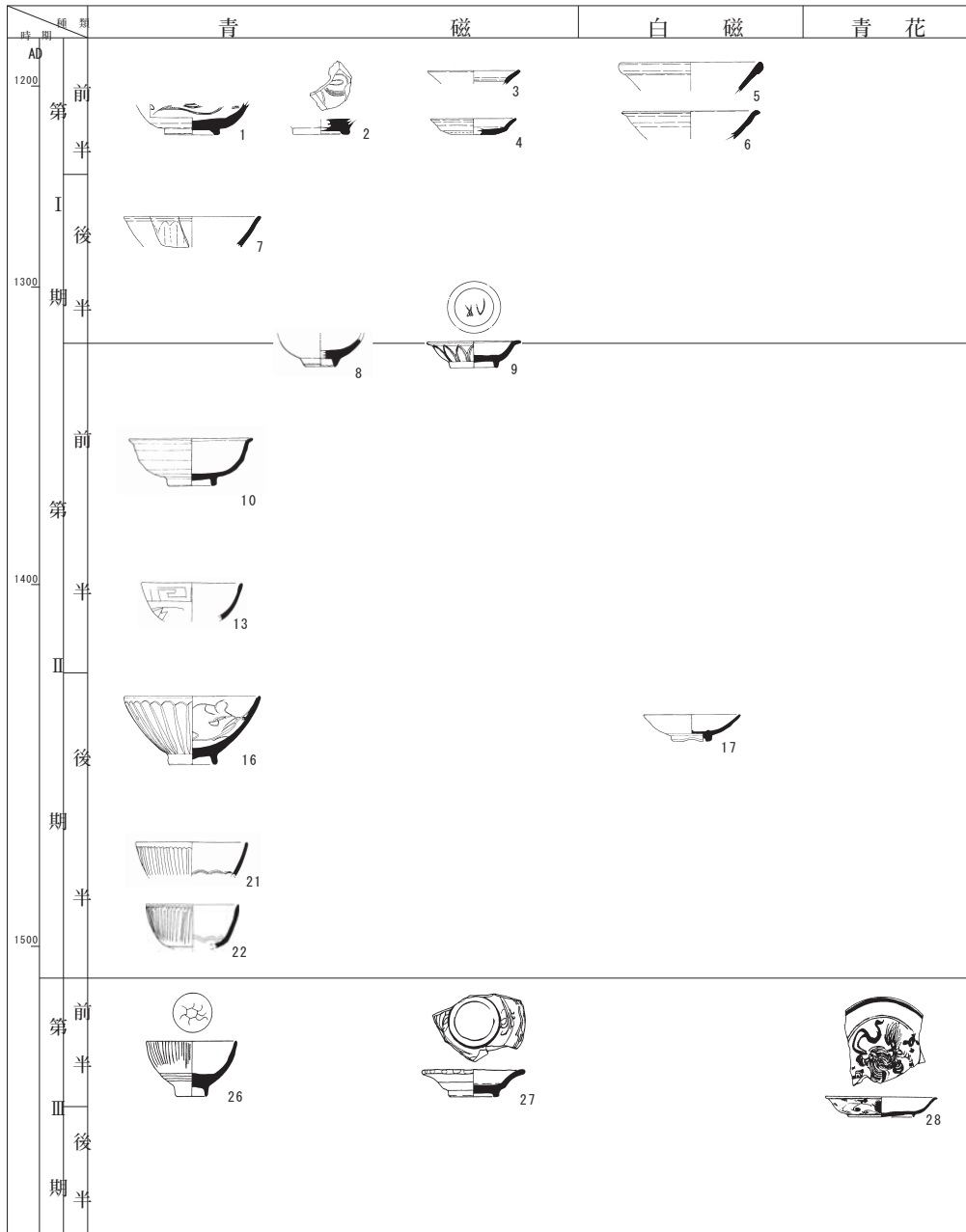
16世紀代は後半の良好な資料を欠いている。前半では、青磁B-IV類碗、青磁稜花皿、白磁E群皿、青花碗・皿、備前焼甕・壺（V期）、唐津皿などを組成としており、基本的には15世紀後葉～16世紀前半に盛期をもつ遺跡の様相に共通するが、青磁の割合が減少しつつあるようだ。また、山崎1号遺跡などの町屋では蓮弁文の青磁碗、備前焼甕・播鉢（IV期後半）が出土しており、城館遺跡に比較して廃棄が遅れるようである。16世紀後半では青磁・白磁は非常に少なく、青花が増加する傾向があるが、詳細はあまり明らかにできない。備前焼は14世紀前半以降利用が始まり、播鉢、甕、壺を主体に次第に増加するが、この時期には減少傾向にあるかもしれない。

広島湾周辺地域は、12世紀後半～14世紀前半（前葉）では磁器が主体で、陶器はわずかである。磁器は、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁Ⅰ-2・5類・D類碗、白磁Ⅳ・Ⅴ類碗・皿など、陶器は中国産黄釉盤、褐釉六耳壺、常滑壺、古瀬戸瓶子・天目碗などが認められるが、大半が菩提院遺跡出土品である。13世紀後半～14世紀中葉に中心をもつと想定される菩提院遺跡第Ⅲ遺構面では同安窯系青磁は認められないことや瓦器出土遺跡の様相などから、本地域においても同安窯系青磁の使用は13世紀前半までと思われる。また、龍泉窯系青磁Ⅰ-4類碗が菩提院遺跡第Ⅲ遺構面で出土しているが、瓦器出土遺跡の様相からすると、本地域においても13世紀後半～14世紀前半は龍泉窯系青磁Ⅰ-5類を主体とする組成である可能性が高く、本地域における使用の中心は13世紀前半にあるものと推定される。同期では少量の陶器が伴っているものと思われるが、基本的に備前焼は含まれないものと見られる。

14世紀代では磁器を主体としながら陶器が一般的に伴出しており、備前焼の共伴が認められるようになる。磁器は青磁D類、白磁A群皿、陶器は備前焼播鉢・甕・壺、常滑焼甕などが組成する。青磁D類及び備前焼はこの時期の新たな要素と見られる。また、14世紀後半～15世紀前半（前葉）に位置づけられる亀崎城跡では、青磁A類・C-Ⅱ類・D類・E類碗、青磁蓮弁文折縁皿が確認され、14世紀後半以降C類・E類が組成に加わると同時に、B-1・1'類の主体的な使用も終焉に向うものと想定される。A類については出土例が少なく、その主要な利用時期が不明であるが、周辺地域の様相からすれば、13世紀後半～14世紀前半にあるものと想定される。

15世紀代は、現状では磁器、陶器の量比に大きな差は認められない。磁器は、青磁D類・E類碗、青磁壺・水注・香炉、白磁D群皿、陶器は備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期）、古瀬戸皿が認められる。磁器の出土量がわずかである遺跡、磁器を欠く遺跡も多く、遺跡の性格に関連するものと思われる。15世紀後半～16世紀前半に盛期をもつ遺跡も多く、15世紀後半では青磁B-Ⅲ類・C-Ⅱ類・D類・E類碗、白磁D群皿、青磁稜花皿、天目碗、朝鮮産青磁・白磁・陶器、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期）、古瀬戸天目碗などの組成が想定される。青磁B-Ⅲ類・白磁C・D群の出現がこの時期にあるのかさらに遡るのかは現状では検討できないが、15世紀前半まで遡る可能性を想定しておきたい。

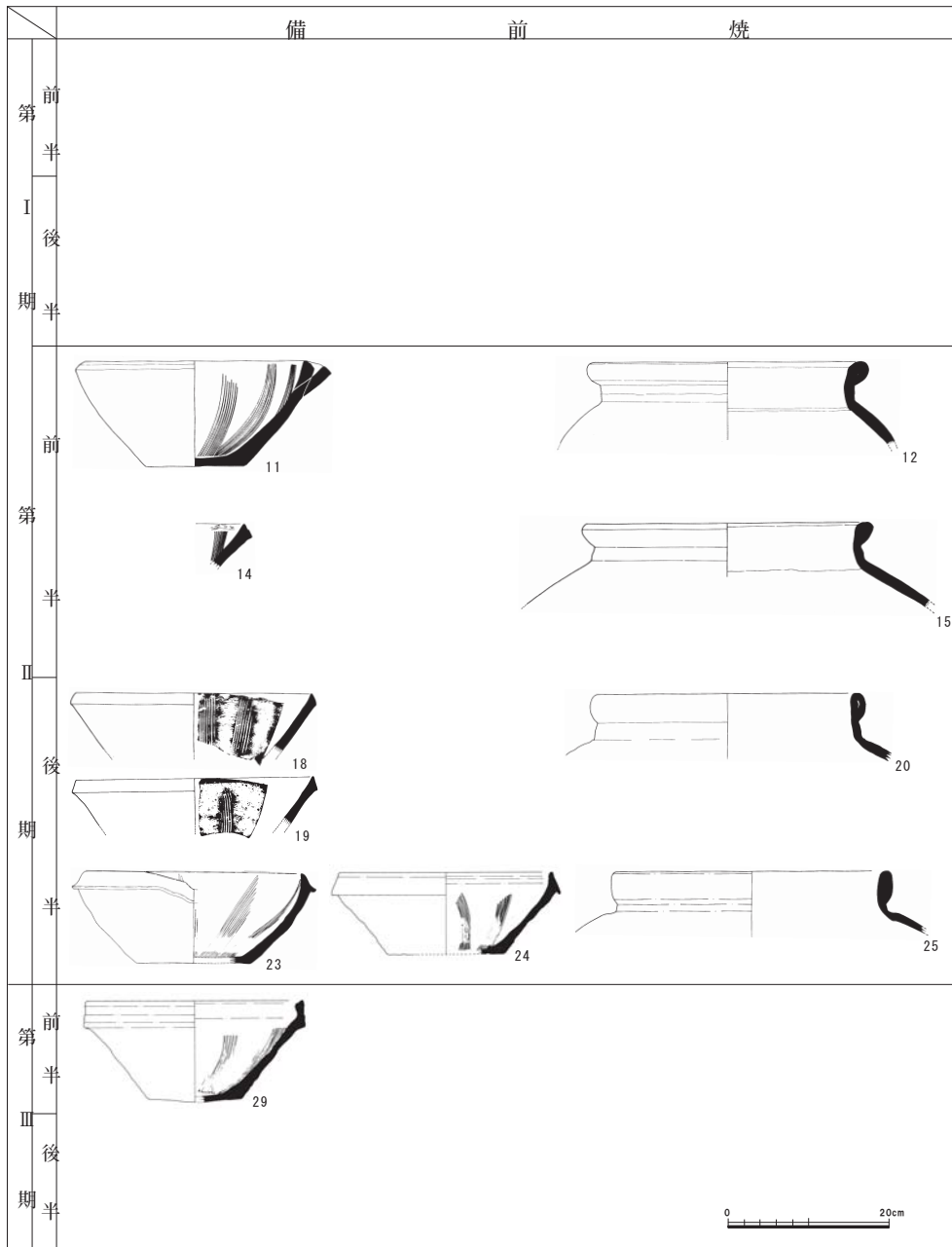
16世紀代の様相は、後半期まで存続する遺跡はあるものの、良好な遺跡に恵まれず、15世紀後半～16世紀前半の遺跡が主体である。この時期は比較的良好な組成を示す例が複数あり、磁器は、青磁B-Ⅲ・Ⅳ類・D類碗、青磁皿・稜花皿・香炉、青花皿・



第19図 広島湾周辺における

(1～7. 下沖2号遺跡、8・9・15・18・19. 亀崎城、13・14・21・24・25・29. 恵下山城

※半透明の図(A～G)は組成として含まれる型式を示すが、利用した図面の地域やは長野遺跡出土資料である。



中世陶磁器組成の変化

跡、10～12. 有井城跡、16・17・23. 北谷山城跡、20・22. 伴東城跡、26～28. 宗高尾城跡)

時期とは一致しない。A は巖島菩提院遺跡、B・C は尾道遺跡、D・E・G は有井城跡、F

(碗)、朝鮮産青磁碗、陶器は備前焼播鉢・甕・壺・小壺（Ⅳ期後半末～Ⅴ期）が組成するものと思われる。青磁B－Ⅳ類碗、青花（碗）・皿が新たに出現する時期と考えられ、陶器では常滑焼が基本的に伴わなくなる。

芸北地域は、12世紀後半～14世紀代の陶磁器の出土は認められるものの、組成を検討できる状況ではない。15世紀代も前半は同様で、15世紀後半以降の資料が主体である。小倉山城跡出土資料を中心に、15世紀後半～16世紀前半の組成をある程度知ることができ、磁器は青磁B－Ⅳ類・D類・E類碗、青磁稜花皿・壺・香炉、白磁E群皿、青花碗・皿、朝鮮産象嵌青磁碗、陶器は備前播鉢（Ⅳ期末～Ⅴ期）、古瀬戸天目碗などを組成するものと想定される。青花の出現時期については現状では明確にできないが、16世紀の中で考えておきたい。

16世紀後半は吉川元春館跡、万徳院跡で組成の内容を明確にすることができるが、いずれも16世紀第4四半期にほぼ限定され、16世紀でも終わりに近い様相である。青花が7～8割を占め、また、青磁の割合が大きく減少し、万徳院跡では白磁の量が少ないが、白磁と青磁の比率が逆転している。基本的には郡山大通院谷遺跡でも同様の様相を示しており、S F 301の事例を重視すれば、16世紀後葉には青花を主体とした組成に移行していると見ることができる。磁器は、青花碗・皿を主体に、白磁E群皿、青磁B－Ⅳ類・D類・E類碗、青磁香炉・壺、陶器では備前焼播鉢・甕・壺・皿（Ⅴ期）、朝鮮産碗・壺・瓶、古瀬戸天目碗・皿、唐津焼碗・皿などが認められる。

沼田川下流域・竹原地域は、13世紀～14世紀前半では、同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁Ⅰ－5・6類・D類碗、白磁Ⅳ・Ⅴ類、古瀬戸灰釉碗が認められる。磁器が組成の主体であり、陶器の伴出はわずかであり、備前焼は基本的に伴わない。組成を2時期に細分可能と思われ、同安窯系青磁、白磁Ⅳ・Ⅴ類と龍泉窯系青磁Ⅰ－5類を主体とする組成に分けることができると思われるが、今後の資料蓄積を待ちたい。

14世紀～15世紀前半の様相はほとんど不明である。15世紀後半では、青磁B－Ⅲ類・D類碗、白磁D群皿の組成が確認できる。この他に、青磁B－Ⅱ類・C－Ⅱ類・D・E類碗、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期後半）、常滑焼甕なども組成に加わる可能性がある。16世紀前半では、青磁B－Ⅳ類・E類碗、白磁E群皿、青花皿・碗、備前焼甕もしくは壺・小壺（Ⅴ期）の組成を確認することができ、青磁はB－Ⅳ類、白磁はE群に移行し、青花が新たに組成に加わっている。

以上、安芸地方のうち、資料的な蓄積が進んでいる4地域の様相を概観したが、地域ごとの資料蓄積の状況や地域差が認められるものの、大まかな陶磁器の組成の変遷



は共通しており、大まかには3期に区分して説明することができる。第Ⅰ期は12世紀後半～14世紀前半頃で、磁器を主体とする組成であり、陶器は少量が伴出する。陶器よりも東播系須恵器、瓦器などが多く見られるのも特徴である。同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁Ⅰ類（Ⅰ-2・4・5類など）碗、白磁Ⅳ～Ⅵ類碗・皿などを主な組成とする。陶器では古瀬戸灰釉碗などが見られるが、基本的に備前焼は伴わないものと想定される。この時期は2時期に細分される可能性が高く、前半期は白磁Ⅳ～Ⅵ類を主体に、同安窯系青磁、龍泉窯系Ⅰ-2・4類などを組成し、後半期は龍泉窯系Ⅰ-5類・Ⅲ類を主体に組成すると想定される。前半期は12世紀後半～13世紀前葉を中心とする時期、後半期は13世紀中葉～14世紀前半（前葉）を中心とする時期を想定しておきたい。道照遺跡1991年調査区、鏡西谷遺跡C地区S B 01の事例を重視すれば、前半はさらに2時期に細分可能で、白磁を主体にする組成、同安窯系青磁と龍泉窯Ⅰ-2・4類を主体とする組成の順序で変遷すると想定される。後半に相当する時期において、草戸千軒町遺跡（岩本編1993他）や尾道遺跡（篠原編1977）では龍泉窯系Ⅲ類碗および白磁A群、いわゆる口禿の白磁が鎬蓮弁文青磁碗とともに比較的多く出土しているが、現状では本地方ではほとんど見られない。

第Ⅱ期は青花の出現期以前で、14世紀後半（中葉）～15世紀頃を想定しているが、第Ⅰ期との境界はなお流動的である。また、第Ⅲ期の境界についても15世紀末～16世紀前葉の幅の中で考えておきたい。青磁はⅠ類の使用の盛期が終焉を迎え、B-Ⅱ～Ⅳ類が主体となり、陶器の使用量が増加する。今後の検討が必要であるが、備前焼の使用が始まるのも基本的にこの時期からと想定しており、備前焼Ⅲ期後半以降、本格的な利用が始まり、播鉢・甕・壺が多くの遺跡で確認できるようになる。

14世紀後半～15世紀前葉については必ずしも様相が明確ではないが、第Ⅱ期についても大きく2時期に区分しておきたい。前半期は14世紀後半（中葉）～15世紀前半（前葉）頃で、青磁B-I'・Ⅱ類・C-Ⅱ類・D類・E類碗、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅲ期後半～Ⅳ期前半）、常滑焼甕を主要な組成とし、青磁蓮弁文折縁皿、白磁皿・瓶、高麗青磁、瀬戸焼壺・皿、亀山焼などを伴っている。青磁は碗を主体としており、皿をほとんど含んでいない。白磁皿が一般的な組成に含まれる可能性が高いが、現状では例数は多くない。青磁B-I'類碗については第Ⅰ期後半から認められ、この時期（前半）まで主要な組成の一員として認められる。青磁B-Ⅱ類・C-Ⅱ類碗との共伴例は稀であることや鏡西谷遺跡では青磁B-I類（鎬蓮弁）・Ⅲ類を伴わずB-I'類のみの組成であることなどを重視すれば、青磁B-I'類を主体とする時期

を第Ⅱ期前半の早い段階に想定することができるかもしれない。後半期は15世紀中葉～15世紀後半（16世紀初頭を含む）頃で、青磁B－Ⅲ類・Ⅳ類、D類・E類、青磁稜花皿、白磁D群皿、備前焼播鉢・甕・壺（Ⅳ期前半～後半）、常滑焼甕、瀬戸焼皿・卸皿などを主要な組成とし、城館遺跡、寺院遺跡では、中国産天目碗、瀬戸天目碗を伴う場合がかなりある。この他に、朝鮮産青磁・白磁・陶器などが伴う場合がある。青磁は碗を主体とするが、稜花皿が伴う場合が多くなる。陶器は備前焼を主体とし、常滑焼を伴う場合が少なくなっている。

第Ⅲ期は青花の出現以降の時期で、16世紀前葉～末頃を想定している。青花の出現期は現状では明確にはできないが、15世紀末～16世紀前葉頃と思われる。したがって、第Ⅲ期の開始時期も流動的であり、ここでは暫定的に16世紀代を充てるが、今後の調査・研究状況を注視しながら検討したい。16世紀前半では青花の割合はきわめて少なく、磁器の主体は青磁であるが、16世紀後葉には青花を主体とする組成に大きく転換したものと想定される。青花の割合の増加が次第に進行したのか、ある時期を境に大きく変化したのかは現状では判断できないが、青花が組成に占める割合の低い前半と青花が組成の主体となる後半の2時期に暫定的に区分し、前半と後半の境は16世紀中葉を前後すると見ておきたい。

前半期は16世紀前半を中心とし、青磁B－Ⅳ類・D類・E類碗、青磁稜花皿、白磁E群皿、青花碗・皿、備前焼甕・壺（Ⅳ期後半～Ⅴ期）を主要な組成とし、朝鮮産青磁碗、唐津焼皿などが伴う場合がある。磁器は青磁碗が主体で、第Ⅱ期末の様相を基本的に引き継いでいる。青磁B－Ⅳ類に青磁D・E類、白磁E群、青磁稜花皿が伴う組成を中心に、青花が少量伴う。青花の組成に占める割合は少なく、出土しない遺構も多い。後半期は青磁が極端に少なくなり、青花が組成の主体となるとともに、陶器では備前焼の割合が減少するようである。青花碗・皿、白磁E群皿、備前焼播鉢・甕・壺・皿（Ⅴ期）を主要な組成とし、青磁香炉・壺、朝鮮産陶器、古瀬戸天目碗・皿、唐津焼碗・皿などが伴う。青磁B－Ⅳ類・D類・E類碗の伴出も確認できるが、入手時期は遅くとも前半期である可能性が高い。

各時期の青磁、白磁、陶器の基本的な組成は、地域を越えて共通したあり方を示すと言えるが、遺跡を単位とすると基本的な組成の一部欠落や逆に多くの奢侈品が認められる場合がかなりある。これらは遺跡の性格や形成の背景に要因があるものと思われる。第Ⅰ期では、各地域の中核的な遺跡を中心としているため、組成に大きな相違はないが、第Ⅱ期以降、城館遺跡を主体としながらも、多様な遺跡から陶磁器の出土

が認められるため、特に遺跡ごとの多様性が目立つ。奢侈品の出土状況は、日常的な生活痕跡のある城館遺跡、地域の中核的な城館遺跡、寺院遺跡を中心としており、出土量は決して多くはないものの、これらの遺跡では多様な種類を組成している。また、遺跡形成の様相を概観すると、第Ⅰ期の遺跡は古代末から継続的に遺跡形成が行われ、ほぼ第Ⅰ期末に終焉を迎えているものが多い。一方、第Ⅱ期以降の遺跡は第Ⅰ期から継続して遺跡形成が行われている場合も少数あるが、多くは第Ⅰ期末～第Ⅱ期初頭に形成が始まり、第Ⅱ期末～第Ⅲ期前半まで継続するものが多い。こうした遺跡形成と関連して組成のあり方が第Ⅰ期と第Ⅱ期以降では少し異なっているようで、第Ⅰ期では先行する古代の遺物がかなりの混在するものの、第Ⅱ期では先行する第Ⅰ期の陶磁器はほとんど含まれていない。

#### 4) 安芸地方の陶磁器組成の変遷から見た鏡地区の位置

これまで、安芸地方の陶磁器の組成を中心に、地域の様相と組成の変化について概観してきたが、本稿で紹介した鏡地区出土の陶磁器の組成や特徴を安芸地方の様相との比較の中で考えてみたい。

鏡地区出土の陶磁器は、遺跡や調査区によって様相を異にしており、中心となる時期が異なっていると考えられる。鏡地区では中世の初期や末期を除くほぼ全時期にわたって遺構が検出されており、報告に際して遺構形成期を中世Ⅰ期～Ⅳ期の4時期に区分した(藤野 2003)。現状においても大枠を変更する必要はないと考えており、この区分に沿って鏡地区出土陶磁器の概要を今一度まとめ直してみる。中世Ⅰ期は鎌倉時代前半を中心とする時期<sup>(14)</sup>で、鏡西谷遺跡C地区S B 01及びE地区出土陶磁器類が該当する。C地区S B 01では同安窯系青磁碗・皿を主体に、龍泉窯系青磁Ⅰ-4類碗が少量伴う組成であり、白磁は伴っていない。E地区では2時期の遺物が認められるが、主体をなすのは、龍泉窯系青磁Ⅰ-2・3・4類碗を主体に、同安窯系碗・皿、白磁碗が少量伴う組成と想定される。また、隣接するD地区では龍泉窯系青磁Ⅰ類碗、B地区北西部で同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁Ⅰ-2類碗が出土しており、これらもE地区の組成に加わるものと思われる。両地点の組成は、同安窯系青磁と龍泉窯系青磁の量比を逆転したような組成を示し、なおかつC地区S B 01では白磁を伴っていない。青磁型式の量比の違いやC地区S B 01における白磁の欠落を除くと大宰府跡におけるⅢ期1小期の様相に一致し、ほぼ同時期とみなすことができ、C地区S B 01の伴出遺物の様相から13世紀前葉を中心とする時期とすることができよう。C地区S B 01とE地区を中心とする組成の相違の背景は現状では明らかにできないが、

多少の時期差や遺跡内の性格差などを含めて今後検討が必要である。

中世Ⅱ期は鎌倉時代後半期を中心とする時期で、報告書ではB地区北西部S X 02が位置する平坦面などを想定していたが、今回の検討で同安窯系および龍泉窯系青磁が出土していることが明確となり、その所属時期は再検討が必要である。報告書ではS X 02出土土師質土器の型式学的特徴からB地区S B 01出土資料とB地区北東部遺構群出土資料の間に位置づけたが、今後周辺出土の土師質土器やその他の遺物を含めて再検討したい。ここでは暫定的に中世Ⅰ期に位置づけておきたい。B地区以外で、この時期に位置づけられる遺物としては、C地区西部で備前焼播鉢（Ⅲ期前半）、E地区で龍泉窯系青磁B - I'類碗が出土している。C地区西部はB地区西部と連続した地形面上にあり、一連の分布域と捉えることが可能である。E地区の龍泉窯系青磁B - I'類碗は中世Ⅰ期の遺構に関連する可能性もあるが、本来組成に含まれるべき龍泉窯系青磁B - I類が鏡西谷遺跡ではまったく出土していないことや上田分類ではB - I'類がB - I類より新しく編年されていることなどを考慮すれば、この時期に位置づけることが許されよう。いずれにせよ、この時期は、遺構・遺物とも調査範囲ではあまり顕著ではない。

中世Ⅲ期は鎌倉時代末～室町時代前期にあたる時期で、B地区北東部に関連遺構が残されている。B・C地区などに関連の遺物が認められ、時系列に沿ってみると、B地区東半部で備前焼播鉢（Ⅲ期後半）が少量出土している。次いで、B地区東半部やE地区では備前焼播鉢（Ⅳ期初頭主体、一部Ⅳ期前半）が出土している。B地区東半部ではこの他に備前焼甕または壺の破片が出土しており、この時期および先行する備前焼Ⅲ期後半に属するものと思われる。C地区西北部を中心に分布する青磁C - II碗、雷文を施す白磁碗、白磁坏も備前焼播鉢（Ⅳ期初頭）と同時期の組成と考えられる。B地区東北部には溝、柱穴群、土壙墓などの遺構が集中して存在し、建物跡が存在した可能性が強い。備前焼の一部はこれらの遺構群に伴って出土しており、B地区北東部遺構群の造営集団の活動がB地区～C地区西部を中心として14世紀後半～15世紀前半（14世紀後葉～15世紀初頭が中心）に行われたものと思われる。陶磁器は、青磁C - II類碗、（青磁盤）、白磁碗（雷文）・坏、備前焼播鉢、甕、壺の組成を想定することができる。陶磁器の出土量は決して多くないが、単純な点数比較では備前焼（陶器）が磁器の量を上回っている。また、鏡東谷遺跡北地区では青磁B - II類碗が1点ではあるが出土しており、この時期の組成に含まれる可能性がある。鏡東谷遺跡の中心時期は出土の備前焼からすれば、15世紀代後半であるが、備前焼の中にⅣ期

前半（Ⅲ期後半に遡る可能性のある破片も若干ある）があり、この時期の後半にはすでに遺跡が形成され始めていた可能性が高い。

中世Ⅳ期は室町時代中期に相当し、15世紀代後半～16世紀前葉を中心とするものと思われる。鏡西谷遺跡B地区朝鮮産青灰釉碗、瀬戸・美濃系天目碗・灰釉碗が出土しており、B地区を中心に遺跡東半部が継続的に利用されている。この時期は、鏡東谷遺跡の盛期にあたるとともに、鏡西谷遺跡F地区、H地区において鏡山城跡関連施設が構築されており、鏡山麓一帯が広く利用されている。鏡東谷遺跡では、北地区と南地区で多少様相が異なる部分があるものの、備前焼を主体に少量の青磁が組成している。青磁はB-Ⅳ類碗、陽刻花文碗があり、底部の形態から15世紀以降と推定される碗がある。備前焼はⅣ期後半を主体とし、Ⅴ期に属する資料は含まれていない。器種は、播鉢・甕・壺の組成が確認できる。鏡地区全体として見ると、鏡西谷遺跡B地区出土の朝鮮産青灰釉碗、瀬戸・美濃系天目碗・灰釉碗についてもこの時期に含まれる可能性がある。この時期は、確証はないが、鏡山城後半期の組成として捉えておきたい。

これら鏡地区の陶磁器組成の変遷は基本的に安芸地方のそれに共通したあり方を示していると言えよう。鏡地区中世Ⅰ期は安芸地方第Ⅰ期前半に対応し、磁器を主体とし、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁Ⅰ-2・4類碗、白磁Ⅳ～Ⅵ類碗など組成としている。安芸地方では白磁皿の組成比は低いものの、確実に組成しているが、鏡地区では碗のみである。鏡地区中世Ⅱ期は安芸地方第Ⅰ期後半～第Ⅱ期初頭に対応する。龍泉窯系青磁B-Ⅰ'類碗、備前焼播鉢（Ⅲ期前半）を組成とする可能性があるが、出土資料はわずかである。関連遺構もわずかで、土師質土器の詳細な検討を行っていないが、活動の乏しい時期と言える。安芸地方第Ⅰ期後半では龍泉窯系青磁Ⅰ-5類(B-Ⅰ・Ⅰ'類)碗を主体に、龍泉窯系青磁Ⅲ類碗、白磁Ⅳ～Ⅵ類皿などを組成しているが、鏡西谷遺跡では龍泉窯系B-Ⅰ類碗はまったく伴っていないことからすると後出の様相で、第Ⅰ期後葉～第Ⅱ期初頭に位置づけておきたい。鏡地区中世Ⅲ期は安芸地方Ⅱ期前半に相当する。備前焼を中心とする陶器類の一般的な利用と量的増加を認めることができ、磁器は青磁碗を主体し、皿をほとんど組成しない。青磁は少量で、青磁B-Ⅱ類・C-Ⅱ類碗が認められるが、安芸地方では一般的に見られるD類・E類碗を組成していない。安芸地方では皿を中心に少量の白磁が組成しているが、鏡地区でも少量認めることができ、ほぼ同様の組成を認めることができる。陶器については安芸地方では備前焼のほか、中国産天目碗、朝鮮産陶器、常滑焼、古瀬戸などを少

量組成する場合が多いが、鏡地区では備前焼以外を認めることができない。また、備前焼は播鉢を主体としており、甕・壺の組成比が低く、全体的な傾向とはやや様相を異にしている。鏡地区中世Ⅳ期は安芸地方第Ⅱ期後半に相当する。鏡地区では、この時期が鏡東谷遺跡の盛期にあたり、破片数だけで見ると、備前焼を主体に磁器と陶器の組成比が大きく逆転している。備前焼は甕・壺を多く含むことから個体数に直すと備前焼の組成比率は大きく減少するものと思われるが、陶器の割合が高いことには変わりはない。磁器は、鏡地区全体で見ても青磁碗のみである。青磁はB-Ⅳ類碗、陽刻花文碗が認められるが、安芸地方ではこの時期に一般的に認められるD類・E類碗が確認できない。白磁についても伴っておらず、安芸地方の様相と異なる。その一方では、内面に陽刻花文の碗（第10図64）は安芸地方ではほとんど類例がない。陶器は、備前焼のほか、朝鮮産陶器碗、常滑焼甕、瀬戸焼天目碗・灰釉碗が認められる。

## 5. おわりに

本稿では、広島大学東広島キャンパスに所在する鏡地区出土の陶磁器類を紹介するとともに、その位置づけに関連して安芸地方の陶磁器の組成を中心に変遷を概観した。安芸地方における陶磁器類の組成は地域により多少の相違は認められるものの、基本的な変遷は共通していることが窺え、一部の器種の欠落や組成、出土量などに相違点は認められるものの、組成の基本的なあり方も大宰府跡を中心とする西日本の様相と大きな相違は認められないようである。本稿で利用した資料は、城館遺跡、寺院遺跡、集落跡（古代官衙周辺に形成され、中世まで存続した半ば公的な性格をもつ）を中心としていることから搬入された陶磁器の多くが比較的短期間のうちに廃棄されたものと思われ、陶磁器の製作年代に近い組成が確認されたと言えよう。草戸千軒町遺跡などの様相を参考にすると、多量の物資が集積・拡散する物流拠点である城下町跡、港町、市などの遺跡では異なる様相も想定されるが、安芸地方ではこれらの遺跡がほとんど調査されておらず、今後の課題である。また、基本的な陶磁器の組成は共通するものの、遺跡を単位とした場合、陶磁器の組成はかなり変化に富んでいる。遺跡形成の背景や性格に関連するものと思われるが、今回は地域を単位とした基本的な組成の変遷の解明を主眼としたため、遺跡相互の相違の背景については今後の課題としたい。

鏡地区の各地に残された遺構群の性格や背景については、今後、陶磁器以外の資料分析を進め、多様な視点から研究を深化する必要があるが、最後に鏡地区の陶磁器の様相を簡単にまとめながら、各時期の遺構群の関連についても若干触れてみたい。鏡

地区出土の陶磁器の様相は、多少の相違点も認められたものの、基本的に安芸地方に  
の様相に共通すると言えよう。鏡地区中世Ⅲ期・Ⅳ期については、陶磁器の出土量が  
少なく、本来の様相の一部を表しているに過ぎないと想定されることから、大きな相  
違点はないと思われる。鏡地区の遺構形成の状況や出土遺物の状況から見ると、鏡地  
区中世Ⅰ期（安芸地方第Ⅰ期前半）と鏡地区中世Ⅳ期（安芸地方第Ⅱ期後半）に活発  
な活動を認めることができ、鏡地区中世Ⅱ期（安芸地方Ⅰ期後葉～第Ⅱ期初頭）～  
Ⅲ期（安芸地方第Ⅱ期前半）にも一定の活動状況を把握することができる。前者は鏡  
西谷遺跡東半部を中心としており、後者は鏡東谷遺跡を中心に、鏡西谷遺跡西半部な  
ど鏡山南麓の広い範囲で有機的な関連をもつ遺構群が形成されている。前者の鏡西谷  
遺跡東半部を中心とする遺構の造営集団の活動は鏡地区中世Ⅱ期に継続されたものと  
想定されるが、遺構や出土遺物量などから見て、この時期にいったん収束を迎えた可  
能性がある。鏡西谷遺跡の成立は12世紀代に遡ると推定され、東半部を中心とする  
遺構の造営集団の活動は14世紀前半代まで継続したと想定できる。出土遺物の様相  
や遺跡の存続期間などの面で西条盆地では道照遺跡のあり方と共通している。鏡西谷  
遺跡、道照遺跡はともに西条盆地では当該期における中核的な遺跡である。道照遺跡  
は鏡地区の東約1.6kmに近接して位置する遺跡であり、西条盆地を南下するルートに  
面して立地している可能性が高い。鏡西谷遺跡は西条盆地南部を一望できる位置に立  
地している。道照遺跡および鏡地区中世Ⅰ期の遺構造営集団は遺跡形成時期および出  
土遺物内容、遺跡の位置関係などから有機的な関連が想定され、沿岸部と西条盆地を  
結ぶルートや当該期の支配体制に関連して成立・維持された可能性も想定され、今後  
遺跡の性格究明が重要な課題であろう。

鏡地区中世Ⅳ期は、形成時期や鏡山南麓一帯に遺構群を形成している占地などから、  
鏡山城と密接な関連を有していると想定することが許されよう。鏡西谷遺跡B地区  
では鏡地区中世Ⅲ期の遺構・遺物が形成されている。今後土師質土器などの詳細な分  
析を行って判断する必要があるが、陶磁器の様相からすれば中世Ⅲ期を盛期とし、鏡  
地区中世Ⅳ期にも活動痕跡を認めることができる。一方、鏡東谷遺跡の盛期は鏡地区  
中世Ⅳ期にあるが、遺跡形成は鏡地区中世Ⅲ期に遡ると想定され、鏡東谷遺跡の成立  
は鏡西谷遺跡B地区の中世Ⅲ期遺構群造営集団の動向と密接な関連にあると想定さ  
れる。鏡東谷遺跡は鏡山城跡主要遺構群に至る南側正面の山麓裾に占拠しており、日  
常的な生活を行う居館跡が想定される位置にある。もっとも、主要な遺構が位置した  
と想定される北地区は近世以降の削平にあって関連遺構をまったく検出することはで

きなかったが、一定量の遺物を確認することができた。南地区は北地区から南へ約40 m離れた位置にあり、建物群や郭状の平坦面が検出され、居館の一部を構成したものと推定される。北地区と南地区の間にも郭状の平坦面や当該期の遺物の出土を確認しており、鏡東谷遺跡北地区・南地区を含むかなり広い地域に関連遺構が存在したことはほぼ間違いなからう。鏡東谷遺跡の調査で出土した遺物量や陶磁器の内容は比較的小規模な城館程度であるが、本来の組成のごく一部を示しているに過ぎないと判断される。鏡山城の成立時期は現状では明らかにできないが、鏡東谷遺跡の成立が鏡山城成立に関連する可能性は高く、遅くとも鏡地区中世Ⅲ期初頭（14世紀末～15世紀初頭）には何らかの城館遺構が存在したと想定したい。すでに遺跡は消滅しているが、鏡山城跡の調査や鏡地区の出土遺物のさらなる検討を通じて研究の進展を図る必要がある。また、鏡地区中世Ⅱ期～中世Ⅲ期は鏡西谷遺跡B地区を中心に何らかの施設が継続的に存在した可能性は想定できるが、調査範囲のみで見るとこの時期の遺物は前後の時期と比較して少なく、いったん機能的重要性を失ったかに見える。しかし、調査区に接して未調査地区がかなり存在することから、鏡地区中世Ⅰ・Ⅱ期の遺構造営集団と中世Ⅲ期以降の造営集団の関連についても追求して行かねばなるまい。

## 謝 辞

広島県立歴史博物館、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室、東広島市教育委員会、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課には、資料実見の便宜を図っていただいた。資料の実見に際しては、広島県立歴史博物館鈴木康之、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室古瀬裕子、同大上裕司、東広島市教育委員会谷川正洋、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課荒川美緒の各氏に大変お世話になった。また、文献収集においては、沖憲明、鈴木康之、杉原敏之、妹尾周三の各氏にお世話になるとともに、鈴木康之氏には鏡地区出土陶磁器について多くの有益な教示を得た。記して感謝の意を表したい。

## 註

- (1) 上田分類における各類型の細分型式の年代については文章中に明言されていないことから、編年図を中心に類推した年代観を中心に記述している。
- (2) 広島県立歴史博物館鈴木康之氏教示。
- (3) 広島県立歴史博物館鈴木康之氏教示。
- (4) 未報告で、『調査・研究紀要』第2号に所収予定である。
- (5) 未報告で、『調査・研究紀要』第2号に所収予定である。
- (6) 北地区および南地区出土の備前焼破片の中には須恵質の焼成を示すものも散見され、備前焼Ⅲ期に遡る資料も含まれている可能性がある。
- (7) 分類は『日本貿易陶磁研究集会中国大会資料集 中世後期における貿易陶磁の様相』2002分類に基づいている。



- (8) 本来、どの時期からを中世と捉えるか議論した上で対象資料を提示すべきであるが、ここでは鏡地区出土資料を安芸地方の様相の中で位置づけることを目的としたことから、ある程度安芸地方全体の様相が検討できる12世紀後半～13世紀以降の資料を対象としたい。
- (9) 墳墓は分析の対象外とした。また、広島城館連資料についても取り上げていない
- (10) 近年、南北朝・室町期以降の資料については瀬戸・美濃系陶器と呼称されている場合が多く、本来両者を区別して組成を検討すべきであろうが、量的に少ないことなどから、ここでは古瀬戸の呼称で一括しておく。
- (11) 引用文献（橋本2001）による。
- (12) 註(11)に同じ。
- (13) 註(11)に同じ。
- (14) 報告の段階ではその始まりを13世紀初頭前後と想定したが、ここでは遅くとも12世紀後半まで遡る可能性を想定しておきたい。

#### 引用文献

- 青山透 2001「吉川元春館跡の土器類」『中世遺跡調査研究報告第2集 吉川元春館跡の研究』広島県教育委員会、59～64頁。
- 青山透 2002「陶磁器から見た小倉山城の年代」『中世遺跡調査研究報告第3集 小倉山城発掘調査報告書』広島県教育委員会、119～125頁。
- 青山透編 1990『浄福寺遺跡群発掘調査報告書 浄福寺3号遺跡・浄福寺古墓群』浄福寺遺跡群発掘調査団。
- 阿部滋編 1986『広島市東区温品所在北谷山城跡発掘調査報告』広島市の文化財第34集、広島市教育委員会。
- 荒川正己編 1995『広島市佐伯区五日市町所在串山城遺跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第16集、（財）広島市歴史科学教育事業団。
- 荒木清二・唐口勉三・松崎哲 1993「寺家城遺跡」『寺家城遺跡・近信遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第109集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター、7～58頁。
- 荒木清二編 1993『郡山城西町遺跡』広島県埋蔵文化財調査報告書第108集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 池田純子編 1999『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第29集、尾道市教育委員会。
- 石井隆博編著 1989「周田子遺跡発掘調査報告書」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会、13～21頁。
- 石井隆博編 1987『上条遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会調査報告第11集、東広島市教育委員会。
- 石井隆博編 1987『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会調査報告第12集、東広島市教育委員会。
- 石井隆博編 1989「秋森城跡発掘調査報告書」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会調査報告第13集、東広島市教育委員会。
- 石井隆博編 2003『志和町志和東時宗遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第38冊、（財）東広島市教育文化振興事業団。
- 伊藤公一編著 1995『郡山城西町遺跡－吉田郵便局庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第135集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 稲葉瑞穂編 1993『広島市佐伯区五日市町所在有井城跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第8集、（財）広島市歴史科学教育事業団。
- 伊吹尚・鹿見啓太郎・篠原芳秀・脇坂光彦 1972「城跡」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会・広島県開発局。
- 岩井重道・中山学・椿不二美 1994「金壳城跡」『金壳・陣開』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第117集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター、39～61頁。
- 岩本正二編 1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ 北部地域北半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。
- 岩本正二編 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ 北部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査

- 研究所。
- 岩本正二編 1995a『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ 南部地域北半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。
- 岩本正二編 1995b『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ 南部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所。
- 植田千佳穂編 1982『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡・東ガガラ窯跡・鏡千人塚遺跡』広島教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学。
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会55～70頁。
- 梅本健治編 1998『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第161集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2003『東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)三太刀遺跡(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 恵谷泰典編 2005a『八本松飯田8丁目城仏土居屋敷跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第45冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 恵谷泰典編 2005b『西条町下三永福成寺旧境内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』文化財センター調査報告書第50冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 太田雅慶・太田裕子・山県元・植野浩三編 1978『小梨城跡発掘調査報告書-広島県竹原市小梨町北谷平所在遺跡-』小梨城跡発掘調査団。
- 奥田泰将編 1985『長野遺跡-発掘調査概報-』五日市町教育委員会。
- 奥田泰将・中村貞哉編 1986『広島市佐伯区五日市町所在池田城跡発掘調査報告』広島市の文化財第35集、広島市教育委員会。
- 奥田壮紀・岡野幸夫編 1987『広島県安芸区瀬野町・中野町所在三ツ城跡発掘調査報告』広島市の文化財第37集、広島市教育委員会。
- 尾崎光伸編 1992『史跡毛利氏城跡郡山城跡-御里屋敷推定地試掘調査概要-』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告3、広島県教育委員会。
- 尾崎光伸編 1993『史跡吉川氏城館跡小倉山城跡-御座所跡試掘調査概要-』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告5、広島県教育委員会。
- 小都隆 2005『中世城館跡の考古学的研究』淡水社。
- 小都隆・岩本芳幸編 1997『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第4次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告9、広島県教育委員会。
- 小都隆・尾崎光伸編 1994『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第1次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告6、広島県教育委員会。
- 小都隆・尾崎光伸編 1995『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第2次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告7、広島県教育委員会。
- 小都隆・佐伯邦芳 1987『広島県史跡鏡山城調査報告書』『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会調査報告第12集、東広島市教育委員会、1～13頁。
- 小都隆・沢元保夫編 1996『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第3次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告8、広島県教育委員会。
- 小都隆・平川孝志編 1998『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡-第5次発掘調査概要-』中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告10、広島県教育委員会。
- 小都隆・平川孝志編 2002『小倉山城跡発掘調査報告書 史跡吉川氏城館跡小倉山城跡-第2次発掘調査概要-小倉山城跡の研究』中世遺跡調査研究報告第3集、広島県教育委員会。
- 尾上実・森嶋康雄・近江俊秀 1995『瓦器』『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、315～337頁。
- 鍛冶益生編 1982『道照遺跡 西条バイパス建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 河瀬正利編著 1979『畝観音免古墳群-広島県安芸郡海田町所在-』広島県安芸郡海田町教育委員会。
- 木村信幸編 1988『小奴可城跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第73集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 高下洋一編 1994『広島市佐伯区五日市町所在下沖2号遺跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第11集、(財)広島市歴史科学教育事業団。
- 是光吉基 1993「龍山城跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』広島県埋蔵文

- 化財センター調査報告書第116集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、16～30頁。
- 是光吉基編 1978『安芸国分尼寺跡－第1次調査概報－』広島県教育委員会。
- 是光吉基・鹿見啓太郎・篠原芳秀他 1973『白山城跡発掘調査概報－北広島ニュータウン造成工事に係る－』広島県教育委員会。
- 是光吉基・妹尾周三編 2005『特別史跡及び特別名勝厳島菩提院遺跡発掘調査報告書－宮島町立歴史民俗資料館収蔵庫建設に伴う発掘調査の記録－』宮島町教育委員会。
- 佐伯邦芳 1977『亀崎城跡』『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会、202～222頁。
- 佐藤昭嗣編 1993『安芸国沼田荘沼田市の調査』広島県立歴史博物館総合研究報告1、広島県立博物館。
- 沢元保夫 2008『城館出土の陶磁器』『芸備』第35集、芸備友の会、8～53頁。
- 沢元保夫 1989『鷺田遺跡』『奥田・是石・鷺田・藤田－一般国道375号道路改良工事に伴う発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第81集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、57～123頁。
- 沢元保夫 2000『万徳院跡出土の陶磁器類』『中世遺跡調査研究報告第1集 万徳院跡の研究』広島県教育委員会、63～72頁。
- 沢元保夫編 2005『高屋町白市御土居遺跡発掘調査報告書－個人住宅(倉庫)新築工事に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第53冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 潮見浩・小沢毅・鈴木康之他 1983『下岡田遺跡発掘調査概要』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見浩編 1967『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群1966年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 潮見浩・藤田等編 1966『下岡田遺跡発掘調査概報 古代・中世建築遺構群1965年度』広島県安芸郡府中町教育委員会。
- 篠原芳秀編 1978『尾道－市街地発掘調査概要－』尾道市教育委員会。
- 篠原芳秀編 1980『尾道－市街地発掘調査概要－』尾道市教育委員会。
- 新川隆 2002『広島県出土の中世後期の貿易陶磁－毛利氏・吉川氏城館跡を中心に－』『日本貿易陶磁研究集会中国大会 資料集 中世後期における貿易陶磁の様相』日本貿易陶磁研究集会、98～109頁。
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2002『郡山大通院谷遺跡(中世編 本文)』吉田町地域振興事業団調査報告書第7集、(財)吉田町地域振興事業団。
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003『郡山大通院谷遺跡(西地点編)』吉田町地域振興事業団調査報告書第9集、(財)吉田町地域振興事業団。
- 鈴木康之 1996『第三章遺物、土器類』『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V 中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、156～226頁。
- 鈴木康之 2006『中世集落における消費活動の研究』真陽社。
- 妹尾周三編 1995『西条西本町山崎1号遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第6冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 立川敏行編著 1999『西条町三永福成寺境内遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第22冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 立川敏之編 1994『西条町下三永五反田遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第3冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 田邊英男編 1984『行武城跡発掘調査報告』行武城跡発掘調査団。
- 田邊英男編 1991『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第1次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告1、広島県教育委員会。
- 田邊英男編 1992『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第2次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告2、広島県教育委員会。
- 田邊英男編 1993『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第3次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告4、広島県教育委員会。
- 辻満久編 1984『横山城跡発掘調査報告書』(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 出野上靖編 2002『志和町志和西岡城跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書 第35冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 中野晴久 1995『常滑・渥美』『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、283～411頁。
- 中村真哉・橋本義和編 1983『広島市西区草津・田万所在草津城跡発掘調査報告』広島市の文化財第24集、広島市教育委員会。
- 西井享・中島将史編 2004『尾道市内遺跡－尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査

- 報告第 37 集、尾道市教育委員会。
- 橋本久和 2001「瓦器埴研究と流通拠点－中世前期の広島湾を中心として－」『中世土器研究論集－中世土器研究会 20 周年記念論集－』中世土器研究会、99～110 頁。
- 葉枝哲也編 2003『福原城跡』沼田川河川総合開発事業（福富ダム）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）、広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 207 集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 桧垣栄次編 1978『恵下城跡発掘調査概報』広島県教育委員会。
- 広島県教育委員会事務局生涯学習部文化課中世遺跡調査研究室編 2000『万徳院跡の研究』中世遺跡調査研究報告第 1 集、広島県教育委員会。
- 広島県教育委員会事務局生涯学習部文化課中世遺跡調査研究室編 2001『吉川元春館跡の研究』中世遺跡調査研究報告第 2 集、広島県教育委員会。
- 福井万千編 1977『尾道－市街地発掘調査概要－』尾道市文化財協会。
- 藤岡孝司 1993「道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』東広島教育委員会文化財調査報告書第 26 集、東広島教育委員会、93～112 頁。
- 藤田広幸・浅岡俊夫編 1998『廿日市市宗高尾城跡・丹波尾城跡－発掘調査の概要－』七尾土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査団六甲山麓遺跡調査会。
- 藤野次史 2003「調査の成果」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、248～275 頁。
- 藤野次史・増田直人 2003「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、25～176 頁。
- 藤野次史編 2003『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室。
- 間壁忠彦 1991『備前焼』考古学ライブラリー 60、ニュー・サイエンス社。
- 松崎寿和・潮見浩 1961「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第 1 巻、広島市、114～224 頁。
- 松村昌彦 1977「地藏堂山城跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会、26～35 頁。
- 松村昌彦 1986「水晶城遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅲ）』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 47 集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター、9～51 頁。
- 松村昌彦編 1979『安芸国分尼寺跡－第 2 次調査概報－』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1980『安芸国分尼寺跡－伝承地にかかる第 3 次調査概報－』広島県教育委員会。
- 松村昌彦編 1981『道照館跡発掘調査概報』東広島市教育委員会。
- 松村昌彦編 1981『荒谷土居屋敷跡発掘調査概報』東広島教育委員会。
- 松村昌彦・伊藤健司編 1981『沼田城跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会。
- 宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡Ⅴ－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財第 49 集、大宰府市教育委員会。
- 宮田浩二編 1993『広島市佐伯区五日市町所在今市城跡発掘調査報告』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 10 集、（財）広島市歴史科学教育事業団。
- 宮本一輝編 2004『尾道遺跡－久保一丁目地区幹線管渠築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 35 集、尾道市教育委員会。
- 森田勉 1982「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会 47～54 頁。
- 森重彰文編 1986『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 13 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文編 1989『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 17 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文編 1990『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 18 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文編 1991『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 19 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文・村上朋子編 1992『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 20 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文・村上朋子編 1993『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 21 集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文・村上朋子編 1994『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第 22 集、

- 尾道市教育委員会。
- 森重彰文・村上朋子編 1995『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第24集、尾道市教育委員会。
- 森重彰文・宮本一輝編 1998『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－』尾道市埋蔵文化財調査報告第27集、尾道市教育委員会。
- 山県元 1977「恵下山城跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会、131～158頁。
- 山県元編 1980『尾道中世遺跡発掘調査報告－尾道市土堂二丁目所在－』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編。
- 山田繁樹・出野上靖編 1998『依崎城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第163集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 幸田淳・中村真哉・橋本義和編 1982『広島市安佐南区沼田町所在国重城跡発掘調査報告』広島市の文化財第19集、広島市教育委員会。
- 樺博自・橋本宏明編 1992『正広城跡』本郷町教育委員会。
- 横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1～26頁。
- 吉野健志編 1993『柁坂城跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財調査報告書第27集、東広島市教育委員会。
- 吉野健志編 1999『西条西本町山崎2号遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第23冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志編著 2000『西条町上三永上弘遺跡・荒谷土居屋敷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第25冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志編 1996『高屋町大畠古慈喜城跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第8冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志 1998「安芸国中世の土師質土器」『文化財論究』(財)東広島市教育文化振興事業団、53～76頁。
- 吉野健志編 2001『八本松町飯田土居遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第31冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 吉野健志編 2007『高屋町白市御土居遺跡発掘調査報告書Ⅱ－一般県道造賀田万里線道路改良事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第56冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 若島一則・廣本喜稔編 1989『広島市安佐南区沼田町伴所在伴東城跡発掘調査報告』広島市の文化財第45集、広島市教育委員会。
- 脇坂光彦・田邊英男他 1986『高崎城跡発掘調査報告』竹原市教育委員会。
- 渡邊昭人編 1996『薬師城跡』広島県埋蔵文化財調査センター報告書第142集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 渡邊昭人編 2006『高屋町白市御土居遺跡発掘調査報告書－一般県道造賀田万里線道路改良事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第54冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 渡邊昭人・葉杖哲也編 2004『寺山城跡 県立壁高等学校移転事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第5集、(財)広島県教育事業団。

挿図引用文献(第18・19図)

- 第18図：1～7・14～16・19・23・27～31.鏡西谷遺跡(本稿)、8～12.道照遺跡(鍛冶編1982)、13・24・35.城仏遺跡(恵谷編2005a)、17・18.安芸国分寺推定地露掛西地区(松村編1980)、20・26.上条遺跡(石井編1987)、21・32～34.鏡東谷遺跡(本稿)、25.福成寺旧境内遺跡(立川編著1999)、29.上弘遺跡(吉野編著2000)、36・46～51・A.薬師城跡(渡邊編1996)、22・44・45.柁坂城跡(吉野編1993)、52.山崎2号遺跡(吉野編1999)、53.寺家城遺跡(荒木・唐口・松崎1993)、54.御土居遺跡(渡邊編2006)
- 第19図：1～7.下沖2号遺跡(高下編1994)、8・9・15・18・19.亀崎城跡(佐伯1977)、10～12.恵下山城跡(山県1977)、13・14・21・24・25・29・D・E・G.有井城跡(稲葉編1993)、16・17・23.北谷山城跡(阿部編1986)、20・22.伴東城跡(若島・廣本編1989)、26～29.宗高尾城跡(藤田・浅岡編1998)、A.厳島菩提院遺跡(是光・妹尾編2005)、B・C.尾道遺跡(篠原編1978)、F.長野遺跡(奥田編1985)

## 広島大学キャンパス鏡地区出土陶磁器一覧表

### 例 言

- ここに収録する資料は、1981～1982年に広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が発掘調査を行った鏡西谷遺跡、1982～1983年に広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が発掘調査を行った鏡東谷遺跡、1980年に広島県教育委員会が発掘調査を行った鏡千人塚遺跡において出土した中世陶磁器である。
- 収録した陶磁器は、中国産青磁、中国産白磁、朝鮮産青灰釉陶器、備前焼、常滑焼、瀬戸・美濃系陶器などが認められる。破片が多く、産地を特定できないものも多いが、可能な限り詳細に表記した。
- 青磁、白磁および備前焼については、本文中で行った分類を表記した。
- 資料の各遺跡における出土地区および調査区は、広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室刊行の『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』（2002年）に依拠している。
- 鏡西谷遺跡および鏡東谷遺跡では発掘対象地全域に一辺5mのグリッドが設定されており、出土位置を記録した遺物以外は、各グリッドごと、あるいは近接した複数のグリッドをまとめる形で取り上げられている。したがって、遺物出土区の表記法ならびにその示す内容については以下のごとくである。
  - A5：A5区出土
  - A5・6：A5区、A6区出土
  - A・B5区：A5区、B5区出土
  - A・B-5・6区：A5区、A6区、B5区、B6区出土
  - A～C3区：A3区、B3区、C3区出土
  - A～C-3～5区：A3区、A4区、A5区、B3区、B4区、B5区、C3区、C4区、C5区出土
- 接合個体資料を基本として資料番号を付している。また、接合はしていないが、色調、胎土などが非常に類似し、近接して出土（同一グリッドなど）資料についても同一資料番号とした。また、参考までに、各資料には破片数を示した。

第5表 鏡地区出土青磁一覧表

	出土遺跡	出土地区	器種	型式	出土区	破片数	挿図番号	写真番号	備考	
1	鏡西谷遺跡	B地区	碗	B1b類	C2区	1	第3図1	写真1-1		
2			碗	B4類	西半	1	第3図2	写真1-6		
3			碗	B類	H4区	1		写真1-4		
4			皿	2類	C3区	1	第3図3	写真1-2		
5			皿	2類	B2区	1	第3図4	写真1-3		
6					C2区	2				
7			盤?		D5区	1		写真1-5	龍泉窯系	
8		碗	B類	D6区	1		写真1-7	龍泉窯系		
9		C地区	碗	B類	A・B-1・2区	1	第4図25	写真2-8		
10					E3・4区	1				
11			碗	B2d類	B2区	1	第4図24	写真2-4		
12			碗	B類	D1・2区	1				
13			碗	B類	B2区	1		写真2-16	無文の破片	
14			碗	B類	B・C5区	1		写真2-17	高台	
15			碗	A類	D3区	1		写真2-12		
16			碗	A1類	SB01(G3区)	8	第4図19	写真2-1		
17			碗	A2類	SB01(G・H2区)	1	第4図20	写真2-2		
18					西半(B地区)	1				
19			碗	A2類	SB01(G2区)	1	第4図21	写真2-3		
20			碗	A類	SB01(F3区)	1		写真2-11		
21			碗	A類	SB01(G2区)	1		写真2-13		
22		碗	B1a類	SB01	2	第4図22	写真2-5・6			
23				G5区	1					
24	円盤状土製品	A類	SB01(H2区)	1	第4図26	写真2-7	碗破片素材			
25	碗または皿		F・G-3・4区	1		写真2-15	同安窯系			
26	皿	1類	SB01	3	第4図23	写真1-23				
27	皿		SB01(H2区)	1		写真2-14	同安窯系			
28	D地区	碗	B4類	C3・4区	1	第5図31	写真3-23			
29	E地区	碗	B1c類	D3・4区	1	第7図34	写真3-3			
30				D3区	1	第7図35	写真3-6			
31		碗	B1c類	D3区	1	第7図37	写真3-4			
32		碗	B類	D4区	1	第7図41	写真3-11			
33		碗	B類	D4区	1	第7図43	写真3-12	龍泉窯I類の高台		
34		碗	A1類	D3・4区	1	第7図36	写真3-2			
35				南部南西部	1					
36		碗	B1a類	D3・4区	1	第7図38	写真3-5			
37		碗	B1b類	D・E3区	1	第7図42	写真3-13			
38		碗	B1類	D・E3区	1		写真3-16			
39		碗	B1b類	E3区	1	第7図33	写真3-1			
40		碗	B2a類	E・F-3・4区	1	第7図40	写真3-8			
41		碗	B類	E5区	1		写真3-17	無文の破片		
42		碗	A1類	南部西南部	1		写真3-14			
43		碗	B2a類	南部東半部	1	第7図39	写真3-7			
44		皿	1類	A1・2区	1	第7図45	写真3-10			
45		皿	2類	D3・4区	1	第7図44	写真3-9			
46		皿	2類	D4区	1		写真3-15			
47		鏡東谷遺跡	北地区	碗	B2b類	C・D-5・6区	1	第9図49	写真4-1	
48				碗	B2類	K5区	1		写真4-4	B2a類またはB2b類
49	碗			B類	N1~6区	1	第9図50	写真4-2	底部	
50	碗			B類	K5区	1		写真4-5	無文の破片	
51	碗		B類	J~N-3・4区	1		写真4-3	無文の破片		
52	南地区		碗	B2c類	B・C-2・3区	1		写真4-8		
53		碗	B2c類	C・D-4・5区	1	第10図65	写真4-7	SB04・05周辺		
54		碗	B3類	B~G・J・I区	1	第10図64	写真4-6			
55	碗?	B類	G4・5区	1		写真4-9	無文の破片、SB03付近			
56	鏡千人塚遺跡		不明			1	第11図77	置物破片?		

第6表 鏡地区出土白磁一覽表

	出土遺跡	出土地区	器種	型式	出土区	破片数	挿図番号	写真番号	備考	
1	鏡西谷遺跡	B地区	碗	3類	E5区	1	第3図5	写真1-9		
2			碗		D6区	1		写真1-8		
3		C地区	碗	2類	B1・2区	1	第4図27	写真2-9		
4			坏		H3・4区	1	第4図28	写真2-10		
5			四耳壺		B3区	1		写真2-18		
6				不明		B3区	1		写真2-19	
7		E地区	碗	1類	A～C3区	1	第7図46	写真3-20		
					D・E4区	1				
8			碗	1類	D3・4区	3	第7図47	写真3-21		
					A1区(G地区)	1				
9			不明		D4区	1		写真3-19		
10		壺		D・E3区	1		写真3-18			
11	鏡千人塚遺跡		四耳壺			不明	第11図76			

第7-1表 鏡地区出土陶器一覽表(1)

	出土遺跡	出土地区	種類	器種	型式	出土区	破片数	挿図番号	写真番号	備考	
1	鏡西谷遺跡	B地区	青灰釉陶器	碗		F4区	1	第3図6	写真1-10	朝鮮産	
2			瀬戸・美濃系陶器	碗		D5区	1	第3図8	写真1-12	灰釉	
						E5区	1				
3			瀬戸・美濃系陶器	碗		I6区	1	第3図7	写真1-11	天目	
4			備前焼	播鉢	1b類	H5区	1	第3図9	写真1-13		
5			備前焼	播鉢	2a類	H4区	1	第3図10	写真1-14		
6			備前焼	播鉢	2a類	H5・6区	1	第3図11	写真1-17		
7			備前焼	播鉢		C・D5区	1	第3図15	写真1-21	底部	
8			備前焼	播鉢		H3区	1	第3図12	写真1-19	底部	
9			備前焼	播鉢		H5・6区	1	第3図14	写真1-18	底部	
10			備前焼	播鉢		I4区	1	第3図13	写真1-20	底部	
11		備前焼	甕または壺		H5区	1	第3図16	写真1-15			
12		備前焼	甕または壺		B3区	1	第3図18	写真1-22			
					F4区	1					
				F6区、G5・6区	1						
13		備前焼	甕または壺		G2区	1	第3図17	写真1-16			
						H5区			1		
14		備前焼	甕または壺		G2区	1					
15		備前焼	甕または壺		G5区	1					
16		備前焼	播鉢	1a類	B1・2区	2	第4図29	写真2-20			
17		備前焼	播鉢	1a類	A3区	1		写真2-21			
18		備前焼	甕または壺		C1・2区	1	第4図30	写真2-22			
19		備前焼	甕または壺		B3区	1		写真2-23			
20		備前焼	甕または壺		F6区、G5・6区	1					
21		備前焼	甕または壺		H・I-3・4区	1					
22		備前焼	甕または壺		排土	1					
23		備前焼	甕または壺		A5区	1		写真3-25			
24		備前焼	甕または壺		D5区	1	第5図32	写真3-24			
25		備前焼	甕または壺		D7区	1					
26		備前焼	甕または壺		排土	1		写真3-26			
27		E地区	備前焼	播鉢	2b類	B3区	1	第7図48	写真3-22		
28		鏡東谷遺跡	北地区	備前焼	播鉢		L5区	1	第9図51	写真4-12	底部
29				備前焼	播鉢	3類	L6区	1	第9図52	写真4-10	
30	備前焼			播鉢	3類	K・L-5・6区	1	第9図53	写真4-11		
31	備前焼			播鉢	3類	C・D-5・6区	1	第9図54			
32	備前焼			甕		C・D-5・6区	1	第9図55	写真4-14		
33	備前焼			甕		C・D-5・6区	2	第9図56	写真4-15		



第7-2表 鏡地区出土陶器一覧表(2)

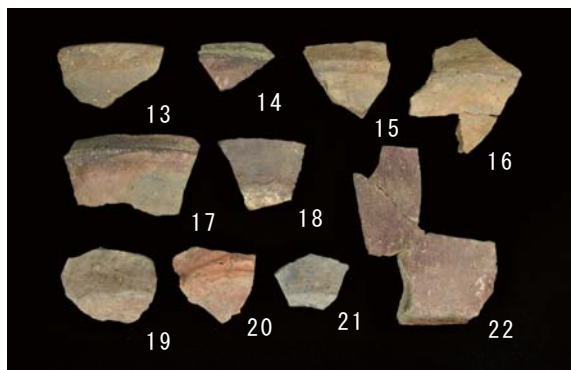
	出土遺跡	出土地区	種類	器種	型式	出土区	破片数	挿図番号	写真番号	備考
34	鏡東谷遺跡	北地区	備前焼	壺		C・D-5・6区	2	第10図63	写真4-17	
35			備前焼	壺		I・J-5・6区	8	第10図62	写真4-16	
36			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1	第9図57	写真4-22	
37			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1	第9図58	写真4-13	
38			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1	第9図59	写真4-20	
39			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1	第9図60	写真4-21	
40			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1		写真4-18	
41			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
42			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
43			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
44			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
45			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
46			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
47			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
48			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
49			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
50			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
51			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
52			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
53			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
54			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	2			
55			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	2			
56			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
						K~N2~5区	1			
57			備前焼	甕または壺		C・D-5・6区	1			
						K~N5~7区	1			
58			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
59			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
60			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
61			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
62			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
63			備前焼	甕または壺		C・D7区	1			
64			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
65			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
66			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
67			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
68			備前焼	甕または壺		C・D6区	1			
69			備前焼	甕または壺		C・D7区	1			
70			備前焼	甕または壺		K5区	1			
71			備前焼	甕または壺		K5区	1			
72			備前焼	甕または壺		K・L4区	4	第10図61	写真4-19	
73			備前焼	甕または壺		J~N5~7区	1			
74			備前焼	甕または壺		M・N3・4区	4			
75			備前焼	甕または壺		L・M3~6区	1			
76			備前焼	甕または壺		L~N3区	1			
77			備前焼	甕または壺		L~M3区	1			
78			備前焼	甕または壺		I・J4~6区	1			
79			常滑焼	甕		B2・3区	1	第10図73	写真4-23	
80			備前焼	播鉢	3類	B2・3区	1	第10図67	写真4-24	
81			備前焼	播鉢		C・D-2・3区	1	第10図66	写真4-26	胴部
82			備前焼	播鉢	2b類	C・D-2・3区	1	第10図68	写真4-25	
83			備前焼	甕		SX07(D5区)	1	第10図69	写真4-27	
84			備前焼	小壺		B2・3区	1	第10図75	写真4-28	
85			備前焼	甕または壺		B2・3区	1	第10図70	写真4-29	
86			備前焼	甕または壺		B2・3区	1	第10図71	写真4-34	

第7-3表 鏡地区出土陶器一覧表(3)

	出土遺跡	出土地区	種類	器種	型式	出土区	破片数	挿図番号	写真番号	備考	
87	鏡東谷遺跡	南地区	備前焼	甕または壺		A2・3区	1	第10図74	写真4-36		
						C・D6・6区(北地区)	2				
88			備前焼	甕または壺		B・C1区	1				
89			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
90			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
91			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
92			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
93			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
94			備前焼	甕または壺		B2・3区	1				
95			備前焼	甕または壺		B・C9区	1				
96			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1	第10図72	写真4-33		
97			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1		写真4-30		
98			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
99			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
100			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
101			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
102			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
103			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
104			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
105			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1				
106			備前焼	甕または壺		C・D2・3区	1		写真4-32		
						C・D4・5区	1				
107			備前焼	甕または壺		C・D4・5区	2		写真4-31		
108			備前焼	甕または壺		C・D4・5区	1		写真4-35		
109			備前焼	甕または壺		C・D4・5区	1				
110			備前焼	甕または壺		C・D4・5区	1				
111			備前焼	甕または壺		C・D4・5区	1				
112	備前焼	甕または壺		C・D4・5区	1						
113	備前焼	甕または壺		E4・5区	1						
114	備前焼	甕または壺		E9区	1						
115	備前焼	甕または壺		E・F4・5区	1						
116	備前焼	甕または壺		E・F14・15区	1						
117	備前焼	甕または壺		F4・5区	1						
118	備前焼	甕または壺		試掘区	1				E1区北側		
119	備前焼	甕または壺		試掘区	1				E1区北側		



B地区青磁(1~7)、白磁(8-9)、朝鮮産青灰釉陶器(10)、瀬戸・美濃系天目碗(11)、瀬戸・美濃系灰釉碗(12)  
(上：外面、下：内面)



B地区備前焼(上：外面、下：内面)

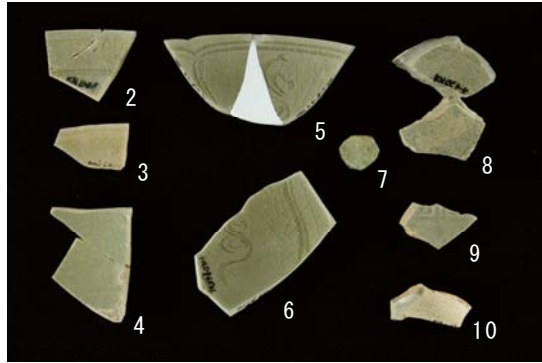


C地区青磁皿(上：外面、中：内面、下：側面)

写真1 鏡西谷遺跡B地区およびC地区出土の中世陶磁器



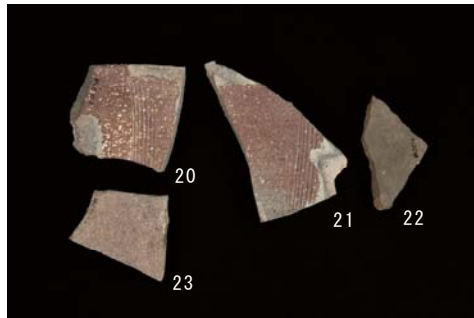
C地区青磁碗



C地区青磁(上:外面、下:内面)

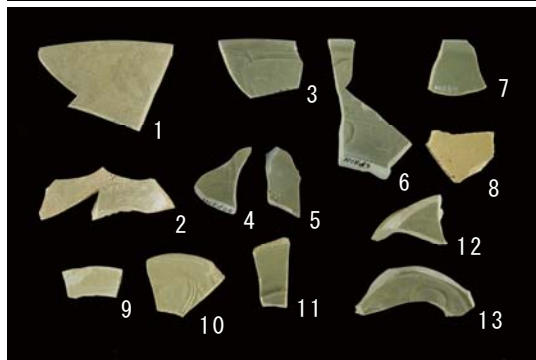


C地区青磁(11~17)・白磁(18・19)(上:外面、下:内面)

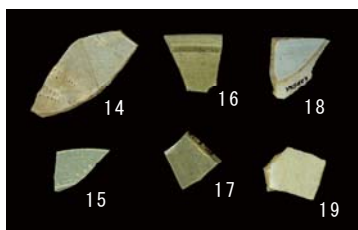


C地区備前焼(上:外面、下:内面)

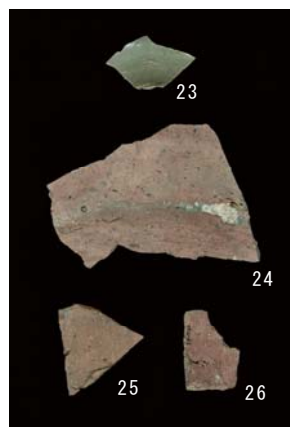
写真2 鏡西谷遺跡C地区出土の中世陶磁器



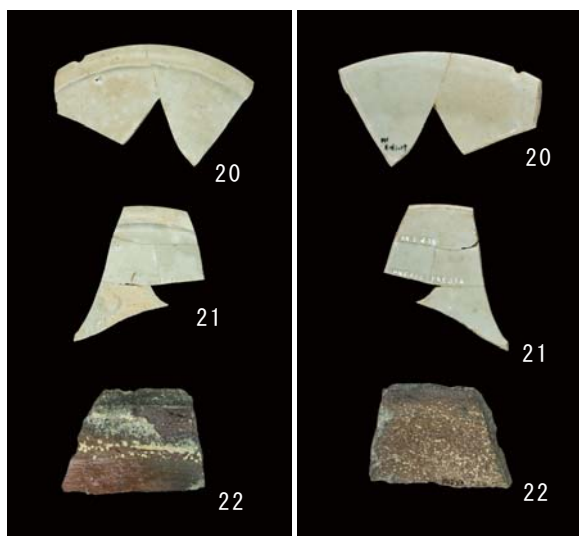
E地区青磁(上：外面、下：内面)



E地区青磁(14~16)、白磁(18~19)  
(上：外面、下：内面)

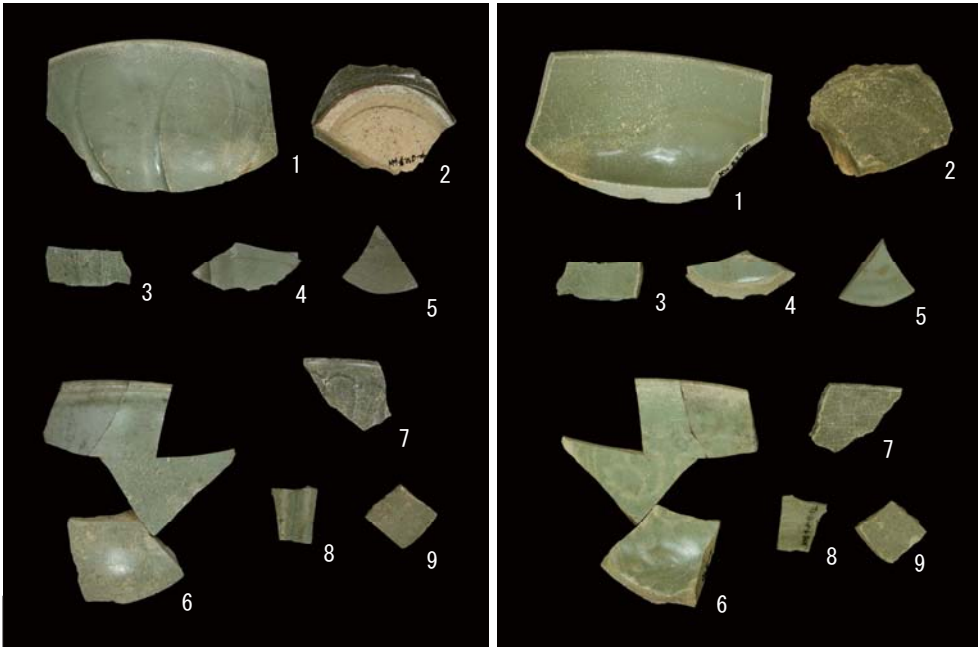


D地区青磁(23)、G地区備前焼(24~26)  
(上：外面、下：内面)

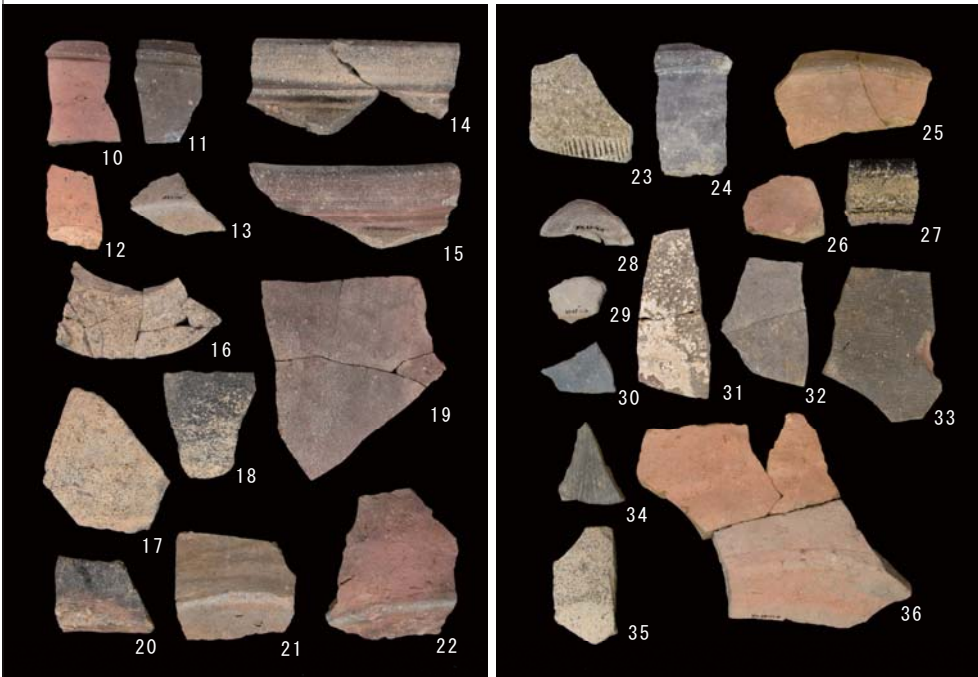


E地区白磁(20・21)、備前焼(22) (上：外面、下：内面)

写真3 鏡西谷遺跡D地区・E地区・G地区出土の陶磁器



北地区(1~5)・南地区(6~9) 青磁(左:外面、右:内面)



北地区備前焼

南地区備前焼

写真4 鏡東谷遺跡出土の中世陶磁器